

どんな要因がハラスメントを不快にするのか 2022

京都大学文学部 社会学研究室

2022 年度 社会学実習 報告書

太郎丸 博 編

2023 年 3 月

目次

調査の概要・データの概観・分析結果	太郎丸 博	1
女同士のセクハラと男同士のセクハラにおける不快感 のちがい	岡田 慶斗	25
男女大学生におけるセクハラ不快感の要因の違いを めぐり一考察	DENG YAN	32
セクシャル・ハラスメントに対する男女大学生間の認識の違い —セクハラ調査を用いた分散分析	孫 ヨウヒ	40
同調的・感情抑制的な規範意識がセクシュアル・ ハラスメント被害における不快感の感じやすさに 与える影響の考察	伊庭 達哉	48
下ネタに対する認識の違い	梶野 寿太郎	59
旧帝大とその他の大学によるセクハラを受け取り方 の違いについて	佐藤 珠希	67
セクシャルハラスメントの不快感と非サポート感の関係性	三浦 よもぎ	75
セクハラ加害者・被害者の性別による不快度の違い	緒方 初芽	84
加害者との年齢差が被害者の不快度に与える影響について	小柳 由文	94
「下ネタ」に関する大学生の不快感の考察	赤澤 翔希	98
加害者の地位・年齢・被害者との親しさがセクハラの不快感 に与える影響	大山 真之介	104
大学生が感じるセクシュアル・ハラスメントに対する不快感 についての調査		
—加害者との親しさが不快感に及ぼす効果	大坪 敏朗	121
回答者のジェンダーとセクハラの不快感の関係	中村 萌愛	129
被害者が男性の大学生となるセクハラについての考察	張 亮	136
感情規則とセクハラに対する不快感の関係	田代 寛二	144

セクハラの不快感に加害者の性別が与える影響	平島 康晟	157
セクハラ of 規模と不快感について	保田 智紀	163
ホモフォビア（同性愛嫌悪）がセクハラに対する不快感の感じ方に与える影響		
一被害者視点から見たセクハラの様態に着目して	面田 純治	169
セクハラ行為 of 加害者の性別による不快感の差の検討	林 まりな	180
セクハラ行為者の性別が職業よりも不快感に対する強い要因となるか	水垣 はるか	193
調査票		198
単純集計表		227

調査の概要・データの概観・分析結果

太郎丸博

2023-03-23

1 問題: どのような要因がハラスメントを不快にするのか

セクシュアル・ハラスメント（以下セクハラと略称）が、労働者の就業環境や学生の学習環境を害する人権侵害であることは、広く知られるようになってきた。このようなセクハラを減らしていくこと、被害が小さいうちに解決することは、重要な社会的課題である。セクハラの原因として加害者のパーソナリティが指摘されることもあるが (Fast and Chen 2009), (Halper and Rios 2019)、加害者の無知や想像力の欠如が原因となることも知られている (牟田 2013)。つまり、自分の行為が相手にとってどれだけ不快なのかがわかっていない、ということがセクハラの原因となりうるのである。それゆえ、どのような人のどのような行為がどの程度ひとを不快にするのか理解しておくことは、セクハラを防止する上で重要である。そのためには、優れたフィクションやノンフィクションから学ぶことも重要であろうが、この実習の授業では、ヴィネットを使った要因配置調査実験 (Auspurg and Hinz 2015) からどのような要因が被害者の不快感を高めるのか明らかにすることをめざしている。

2021年度の調査実習では、上記のような趣旨にもとづき、セクハラの不快感を促進する要因を、要因配置調査実験で検討した (太郎丸 et al. 2022) (太郎丸 2022)。加害者の特徴と被害の種類を示すヴィネットを提示し、どの程度不快かを評価してもらい、要因配置調査実験を大学生向けに行った。その結果、a 加害者が学生の場合よりも教授の場合のほうが、b 親しい場合よりは親しくない場合のほうが、c 加害者が女性の場合よりも男性の場合のほうが、d 加害者が同性愛者の場合よりも異性愛者の場合のほうが、e 対面でのセクハラよりもオンラインでのセクハラのほうが、有意に平均不快感が高いことが示された。また、性的意図が推測されるような加害者のほうが不快感が高まる可能性も検討されたが、そのような傾向は見られなかった。

しかし、太郎丸 et al. (2022) および 太郎丸 (2022) には三つの限界を指摘できる。第一にオンラインでのセクハラの不快感を検討することも目的の1つであったため、言葉だけで可能なセクハラの不快感だけを調べた。それゆえ、パーソナルスパー

スの侵害や身体的な接触のようなタイプのセクハラの不快感は検討できなかった。第二に、加害者が学生の場合よりも教授の場合のほうが平均不快感が高いことは、権力関係が不快感を強めていると解釈したのだが、一般的には学生よりも教授のほうが権力を持っているだけでなく、教授のほうがかなり年齢が高い。つまり、大学内での地位ではなく、年齢の高さが不快感を高めている可能性もある。年齢に付随する社会的権威が不快感を高めるのか、外見が問題なのか、といった点を識別することはできないのだが、年齢と職位のいずれが重要なのか検討してみる価値があろう。第三に、セクハラの不快感に個人差があることは明白だが、どういう人が特に不快感を感じやすいのかは不明である。これらの問題にアプローチするのが、今年度の調査実習の課題であった。

2 授業と調査の概要

仮説と要因、ワーディングの決定

授業ではまず、セクハラの基本知識に関する文献や、昨年度の分析結果を読んでもらった。その後、どのような条件下でセクハラの不快感は弱められたり、強められたりするのかが、行為の主体や被害者との関係性、場所など、さまざまな要因について、学生にブレイン・ストーミングしてもらった。さまざまな要因が提案されたが、その中から自明性や社会学的意義などを考慮して、私が最終的に以下の4つの要因を選んだ。

1. 加害者の性別（男／女）
2. 加害者の地位（同級生／35歳の非常勤講師／55歳の非常勤講師／35歳の教授／55歳の教授）
3. 加害者との親しさ（親しい／あまり親しくない）
4. 被害の種類（異性の好みを聞かれた／あなたが既婚者と浮気しているというデマを流された／下ネタの冗談を聞かされた／いやらしい目で見つめられた／顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた／手を握られた／お尻を触られた）

私が特に悩んだのは、年齢と職位（同級生、非常勤講師、教授）の扱いであった。年齢と地位は別の次元として扱い、直行させるほうが良いが、55歳の同級生や20歳の教授はめったにいないだろうから、無理やりこれらの設定のヴィネットを作って回答者に不快感を評価してもらっても、あまり意味がないように思われた。そこで、年齢と職位を組み合わせた「地位」という次元を作ることにした。

今回の調査では、前回の調査とは、職位の水準が異なっている。前回は「ゼミの友人／ゼミの先輩／ゼミの教授」であった。前回の反省として、「友人」の定義は人それぞれで、自分よりもずっと年上や年下の人も「友人」とみなす人もいれば、同じ年齢の人しか「友人」とはみなさない、といった具合に、かなり曖昧であると思われた。そこで、今回は「同級生」とし、学年が同じであることを明示した。また、前回の分析の結果、「先輩」と「同級生」には不快感に有意差がなかったため、「先輩」のかわりに「教授」よりも権力がなさそうな「非常勤講師」を設定した。また、すでに述べたように、今回はオンラインでは起きにくいセクハラを、被害の種類として4つ盛り込んだ。

リード文は前回と同じ、回答者も前回と同様に男女の学生とした。

調査の概要

上記のような要因やワーディングの検討のために1回プリテストを行っている。回答は受講学生たち自身にしてもらったので、厳密にはプリテストとは言えないだろうが、彼らも対象者の母集団に含まれているので、十分参考にはなった。その際に回答に要する時間も計っている。本調査とほぼ同じ内容で17個のヴィネットに回答してもらい、所要時間は表1のようになった。 $22/26 = 85\%$ が10分以内で回答している。受講学生は真面目に授業に取り組んでいれば質問の内容をあらかじめおおむね予想できたはずなので、本調査で一般の回答者が要する時間はもっと長いと予想されるが、17個ぐらいまでなら尋ねても大丈夫そうだという感触をえた。

表1 プリテストでの回答時間の分布

回答時間	人数
3～4分	8
5～9分	14
10～14分	1
15～18分	3

3 データ

調査票は4種類作り、回答者の誕生日で割り当てた(表2参照)¹。2月のように日数の少ない月もあるし、月によって出生率の差も少しあるので、完全に等確率ではないが、回答者が同じ確率で3つの調査票に割り当てられているという帰無仮説は棄却されない($X^2 = 3.6, df = 3$)。

表2 回答した大学生の基本属性

性別	学年	大学	調査票
女 :196	1年生 :26	京都大学 :169	A票 1,5,9月生まれ :70
男 :124	2年生 :35	同志社 :20	B票 2,6,10月生まれ:81
その他:4	3年生 :122	神戸大学 :10	C票 3,7,11月生まれ:79
	4年生 :67	大阪大学 :6	D票 4,8,12月生まれ:94
	研究生、聴講生など:14	奈良女子大学:5	
	大学院生 :60	(Other) :80	
		NA's :34	

調査対象者は大学生で、大学院生や研究生も含む。京都大学の学生が大半だが、他大学の学生も含む。2022年度に京都大学文学部の社会学実習を履修した学生に、友人・知人に調査依頼するように指示した。また、私が担当する講義の受講生にも回答を依頼した。回答は、2022/10/05から17のあいだに回収された。回答者の属性の分布は表2のとおりである。

表3: 回答を依頼した友人知人数の分布(分析の単位は受講学生)

依頼人数	受講学生数
5~10人	11
10~19人	9
20~29人	4
30~39人	2
40~49人	4
50~300人	5

¹ 正確には、[Google Formのセクションと回答によって質問や質問順を分岐させる機能](#)を使い、誕生日によって、ヴィネットを評価してもらった質問をする4つのセクションのいずれかに、回答者を割り振っている。

SNS 等でも回答を依頼し、拡散されているので、正確な依頼数は不明だが、概算で総数 1396 人（一受講生あたり平均 39.9 人）に依頼し、有効回答数は 324 人で、回収率は 23%であった。表 3 は、受講学生（35 人）を分析の単位として集計した、依頼した友人・知人数の分布である。大半の受講学生は 50 人以下に依頼しているが、300 人以上に依頼した者も二人いる。

実験計画の概要

性別、学年などのすべての調査票に共通の質問をした後

あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の 6 段階で評価してください。

というリード文に続いて以下の例のようなヴィネットを一つの調査票あたり 17 提示した。以下はヴィネットの例である。

- あまり親しくない 35 歳の教授（男）に手を握られた。
- 親しい同級生（女）にあなたが既婚者と浮気しているというデマを流された。

ヴィネットは、上で述べたように、以下の 4 つの次元からなる。1. 加害者との親しさ（親しい／あまり親しくない）、2. 加害者の年齢・地位（35 歳の教授／55 歳の教授／35 歳の非常勤講師／55 歳の非常勤講師／同級生）、3. 加害者の性別（女／男）、4. 被害の種類（異性の好みを聞かれた／あなたが既婚者と浮気しているというデマを流された／下ネタの冗談を聞かされた／いやらしい目で見つめられた／顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られた／手を握られた／お尻を触られた／下ネタの冗談を聞かされた／いやらしい目で見つめられた／顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られた）。論理的には $2 \times 5 \times 2 \times 7 = 140$ 通りの組み合わせがあるが、回答者の負担やサンプル・サイズを考慮して、17 ヴィネット \times 4 種類の調査票 = 68 種類のヴィネットを選んだ。加害者の性別、地位、被害の種類とその他の変数の交互作用が推定でき、次元間の相関ができるだけゼロに近づくようにヴィネットは選んだ。次元間相関の絶対値は最大で 0.1、平均で 0.03 であった。実験計画の作成には、R (R Core Team 2020) の AlgDesign パッケージ (Wheeler 2019) を用いた。

回答者レベルのセクハラ時不快感に影響する要因として、セクハラ時に期待できるサポート、感情抑制規範、感情表出の3つを調べた。

期待できるサポート

セクハラ時に期待できるサポートは、

もしもあなたがハラスメント被害にあったら、次の人たちの中にあなたの話を親身に聞いたり、援助したりしてくれる人がいると思いますか

という問いに続いて、

- あなたの家族
- あなたの友人
- あなたの大学の先生
- 大学のセクハラ対応窓口

と提示し、5件法でたずねた。数値が大きくなるほど期待が大きくなるように0~4の整数を割り振った。「家族」と「友人」を足してZ得点に変換したものを家族・友人サポート ($\alpha = 0.72$)、「先生」と「窓口」を足してZ得点に変換したものを大学サポート ($\alpha = 0.69$)とした。これらの平均値と相互の相関係数は表4、表5のとおりである。

表4 期待できるサポート項目の平均値と標準偏差

	家族	友人	先生	セクハラ窓口
平均	3.45	3.68	2.54	2.68
標準偏差	0.97	0.77	1.24	1.04

表5 期待できるサポートの項目間相関係数

	家族	友人	先生	セクハラ窓口
家族	1.00	0.52	0.20	0.13
友人	0.52	1.00	0.25	0.20
先生	0.20	0.25	1.00	0.51
セクハラ窓口	0.13	0.20	0.51	1.00
女性ダミー	0.05	0.17	0.06	-0.05
院生ダミー	-0.15	-0.05	0.01	0.11
京大ダミー	0.01	-0.02	-0.09	-0.05

	家族	友人	先生	セクハラ窓口
感情抑制規範	0.04	0.09	0.01	0.11

感情抑制規範

感情抑制規範については、以下の 5 つの意見への賛否を 4 件法でたずねた。数値が大きくなるほど感情を表出すべきでないと考えるように 0~3 の整数をわりふった。

1. 不快感が顔に出ないように気をつけるべきだ
2. 不快なことや腹がたつことがあっても、目上の人には言うべきではない
3. 周りの人が楽しそうにしているときは、自分が楽しくなくても周りに合わせて楽しそうにすべきだ
4. ガティブな感情を持たないように普段から気をつけるべきだ。
5. 自分自身の気持ちに正直であるべきだ (反転項目)

これらの記述統計と相互の相関係数を計算したのが表 6 と表 7 である。5 番目の「自分に正直」だけ、他の項目との相関が弱く、取り除いたほうがクロンバックのアルファが大きくなったので、残りの 4 つを加算した値を感情抑制規範の指標として用いる (4 項目 $\alpha = 0.72$)。

表 6 感情規範の項目の平均値と標準偏差

	顔に出ないように	目上の人には	周り合わせ	ネガティブ注意	自分に正直
平均	1.45	0.99	1.55	1.39	0.59
標準偏差	0.95	0.91	0.88	1.03	0.67

表 7 感情抑制規範の相関係数

	顔に出ないように	目上の人には	周り合わせ	ネガティブ注意	自分に正直
顔に出ないように	1.00	0.41	0.47	0.26	0.15
目上の人には	0.41	1.00	0.44	0.25	0.19
周り合わせ	0.47	0.44	1.00	0.44	0.18
ネガティブ注意	0.26	0.25	0.44	1.00	0.18
自分に正直	0.15	0.19	0.18	0.18	1.00
女性ダミー	-0.01	0.05	0.07	0.05	0.00
院生ダミー	0.09	0.07	0.01	0.06	0.00
京大ダミー	-0.01	-0.05	-0.06	-0.15	0.03

	顔に出ないように	目上の人には	周り合わせ	ネガティブ注意	自分に正直
家族・友人サポート	0.02	-0.01	0.07	0.11	-0.14
大学サポート	0.09	-0.06	0.06	0.09	-0.06

感情表出

感情抑制規範とよく似た概念だが、普段どの程度否定的な感情を表出しているのかも尋ねている。以下のことがどの程度自分自身にあてはまるか、4件法でたずねている。選択肢には0～3の整数を割り振り、値が大きいほど感情表出的になるようにした。

1. 不快なことがあっても、自分の気持ちをうまく人に伝えられない（反転項目）
2. 否定的な感情は表に出さないようにしている（反転項目）
3. カッとなってつい大きな声を出してしまうことがあることがある
4. 気持ちが高ぶって人前で涙を流してしまうことがある

これらの記述統計が表8、相関係数が表9である。4項目間の相関を見ると、1「伝えられない」と2「表に出さない」の間の相関係数が.38、3「カッとなって」と4「人前で涙」の相関が.27であるが、それ以外の項目間相関は弱い。1「伝えられない」と2「表に出さない」は、感情抑制規範との相関が多少あり、感情抑制規範と似た概念を測定していると考えられることもかんがみ、3「カッとなって」と4「人前で涙」を加算してZ得点に変換したものを「感情表出」と名付けることにする ($\alpha = 0.41$)。

表8 感情表出の項目の平均値と標準偏差

	伝えられない	表に出さない	カッとなって	人前で涙
平均	1.5	1.23	0.84	1.33
標準偏差	1.0	0.99	0.99	1.05

表9 感情表出の相関係数

	伝えられない	表に出さない	カッとなって	人前で涙
伝えられない	1.00	0.38	0.17	0.08
表に出さない	0.38	1.00	0.24	0.07

	伝えられない	表に出さない	カッとなって	人前で涙
カッとなって	0.17	0.24	1.00	0.27
人前で涙	0.08	0.07	0.27	1.00
女性ダミー	-0.03	0.00	-0.10	0.32
院生ダミー	0.06	0.09	0.05	0.04
京大ダミー	-0.02	0.06	0.02	-0.12
感情抑制規範	-0.15	-0.33	-0.07	-0.06
家族・友人サポート	-0.05	-0.13	-0.05	0.07
大学サポート	-0.01	-0.13	-0.01	0.08

4 分析方法

従属変数であるセクハラ被害時の不快感には、「まったく不快でない」から「とても不快である」までの 6 つの選択肢に順次 0～5 の整数を与えた。

多峰性の検討

以下ではまず、不快感の分布の多峰性 (multimodality) について検討する。社会学で扱う連続変数の分布には様々な形があるが、経験則から言えば、分布の山の頂点は一つであることが多い。これを単峰、または単峰性という。これに対して、分布の山が複数ある場合、多峰、または多峰性という。多峰の場合、サンプルの中に複数の性質の異なる集団があることが疑われる。その場合、全体の平均値や最頻値を計算しても、分布の代表値として意味があるのかどうかがあやしくなってくる。こういった問題は独立変数を統制することで解消する可能性もある。例えば、複数の性質の異なる集団とは有業者と無業者のことで、これらの違いがセクハラ時の不快感に影響を与えており、そのせいで多峰分布になっている可能性もある。この場合、分散分析や回帰分析によってそれぞれのグループの平均的な不快感や残差の分散を計算すれば、不快感の分布は適切に記述できるだろう。しかし、回帰分析しても残差が多峰性を示す可能性はある。いずれにせよ、回帰モデルを組む前に、従属変数の多峰性について検討しておくことは、データの理解を深めるうえで重要と思われる。

多峰性はヒストグラムを書くことでおおむね確認できるが、サンプル・サイズが小さい場合、ぐうぜん多峰性が生じてしまう可能性もある。今回、個々のヴィネットに回答しているのは、70～94 人なので、回答が左右のどちらかに偏っている場合、回答

がまばらなところで偶然多峰性が生じてしまう場合もあろう。そのようなサンプリング等の偶然によって生じた軽微な多峰性は無視してよいだろうが、偶然とは考えられない多峰性がどの程度生じているのか知りたい。そこで多峰性の検定を行いたいのだが、よく知られている多峰性の検定は、連続変数を前提にしており、今回の不快感の評価のように6択の変数（つまり離散変数）に応用すると、おかしな結果が出てしまう。そこで、whuber (2018) の紹介しているブートストラップ法を若干修正して用いる。

この原稿でもちいる多峰性の検定を説明するために、まず値に順序のある離散変数における多峰性を定義する。回答者 i の j 番目のヴィネットに対する不快感を y_{ij} とする。これは、0~5 のあいだの整数をとる。 y_{ij} の度数分布表をつくると、それぞれの値を選んだ回答者の人数がわかる。 j ($j = 1, 2, \dots, 68$) というヴィネットに対して k という値を選んだ人の数を n_{jk} とする。例えば、1 番目のヴィネット、「あまり親しくない 35 歳の教授（男）に手を握られた」と、2 番目、「親しい 55 歳の非常勤講師（男）に手を握られた」に対する回答の分布は、表 10 のとおりである。それゆえ、 $n_{10} = 5$, $n_{23} = 15$ である。

表 10 1 番目と 2 番目のヴィネットと架空データに関する不快感の度数分布表

	0 まったく不快ではない	1	2	3	4	5 とても不快
ヴィネット 1	5	5	7	16	25	27
ヴィネット 2	7	4	3	15	10	28
架空データ 1	10	10	30	30	20	20
架空データ 2	30	10	10	5	20	20

上のような度数分布表に関して、不快感 k が 1~4 の場合、 $n_{jk-1} < n_{jk} > n_{jk+1}$ のとき、ヴィネット j の k という値は峰 s である、と定義する。さらに $k = 5$ の場合、 $n_{j5} > n_{j4}$ のとき、ヴィネット j の 5 という値は峰 s であると定義する。また、 $k = 0$ の場合、 $n_{j0} > n_{j1}$ のとき、ヴィネット j の 0 という値は峰 s であると定義する。例えば、表 1 のヴィネット 1 は、5 だけが峰 s であるが、ヴィネット 2 は、0, 3, 5 が峰 s である。つまり、ヴィネット 1 の不快感の分布には峰 s が一つ、ヴィネット 2 に関しては峰 s が三つある。

「峰 s 」と命名したのは、「峰 s 」を修正して「峰」を定義するためである。このような迂遠な議論をしているのは、いきなり「峰」を定義するよりもわかりやすいと考えたからである。この峰 s の定義は単純で分かりやすいが、実はやや直感に反する点がある。例えば、表 10 の 3 行目の架空データ 1 のような度数分布表が得られた場合、不快感として 2, 3 を選んだ人が 30 人で他の値よりも人数が多く「峰」が一つあるように思えるが、上の定義では峰 s の数は 0 である。また架空データ 2 も「峰」が二つあるように思えるが、上の定義では峰 s の数は 1 つである。要するに峰の数を過小に推定しているという見方もできるということである。

そこで、もしも $n_{jk} = n_{j, k+1}$ のばあいは、 $n_{j, k+1}$ を度数分布表から削除した、新しい度数分布表を作る。この新しい度数分布表における峰 s を、この変数の「峰」と定義する。例えば、表 10 の架空データ 1 から、度数が同じセルを削除すると、“10, 30, 20” となり、真ん中が峰となる。それゆえ峰の数は 1 つである。表 10 の架空データ 2 から度数が同じセルを削除すると、“30, 10, 5, 20” となり、両端が峰となるので、峰の数は 2 つである。本稿では、この定義に従ってブートストラップ (Mooney et al. 1993) で峰が複数あるかどうかを検定する。帰無仮説は「峰の数 = 1」である。リサンプルの数は 1000 で、峰の数が 1 のリサンプルが 5% 未満であれば、帰無仮説を棄却する。これは、いわゆる有意性検定の p 値とは異なるが、こちらのほうが計算が単純なのでこの計算法を採用する。

回帰分析

回帰分析にはマルチモデル (REML) を用いる。推定には R の lme4 (Bates et al. 2015), lmerTest (Kuznetsova et al. 2017) パッケージを用いた。セクハラ時の不快感は男女でどうぜん違いがあるが、それについては、学生たちの書いた原稿や 太郎丸 and 張 (2023) にゆずり、ここでは、京都大学と他大学の学生の違い、および学部生と大学院生の違いについて検討する。京都大学と他大学の違いを検討するのは、ときどき「京都大学の学生は特殊だ！京大の学生のデータを使って分析しても、ほかの大学の学生には一般化できない！」といった批判を耳にするからである。私がこれまで学生の卒論のデータや調査実習のデータの分析結果を見てきた印象では、京都大学と他大学の学生の規範意識やモノの見方や感じ方にはっきりした差があらわれたことはない。京大生特殊論は神話だと思うのだが、この神話を信じ込んでいる社会学者が少なからずいる様子なので、ここで確認しておく。学部生と大学院生を比較するのは、

大学院生のほうが指導教員との関係が密接で、進路や奨学金、研究費などの獲得で教員の影響を受けやすいはずなので、学部生とはセクハラ時の不快感に複雑な差異が生じる可能性も考えられるからである。

ステップワイズ法で交互作用効果を検討

最後に、探索的にすべての独立変数間の交互作用効果を検討する。ステップワイズ法で効果が見られる交互作用効果を探すが、マルチレベル・モデルでは時間がかかりすぎるし、`lmerTest` パッケージの場合、ステップワイズ法が実装されていない（後退法は実装されている）。そこで、OLS でモデルは推定し、BIC を修正した指標を最小にするモデルを選ぶ。ここで用いる修正 BIC の定義は、

$$BIC = -2LL + 2m\log(N)$$

である。ただし、 LL は対数尤度、 m はパラメータ数、 N がサンプル・サイズ（有効回答者数×ヴィネット数）である。通常の BIC は $-2LL + m\log(N)$ であるから、修正 BIC は、通常の BIC のパラメータ数の重みを 2 倍に増やしていることになる。それゆえ、BIC よりも単純なモデルが選ばれやすくなる。このような修正 BIC を用いる理由は、第一に OLS で推定すると、標準誤差を過小に推定するので、ほんとうは効果のない交互作用を誤ってモデルに含めてしまうおそれがあるからである。パラメータ数の重みを増やすことで、そのリスクを下げるができる。第二に、マルチレベル・モデルで推定しても、複雑な交互作用効果を多数推定すると、いわゆるオーバーフィッティングが生じる恐れがある。パラメータ数が多く、複雑なモデルを探索的に推定していると、こういったことが起きやすいので、できるだけ単純なモデルを選ぶようにした。

5 分析結果

まず、68 のヴィネットに対する不快感のヒストグラムを示したのが、図 1～図 4 である。峰が二つ以上あるヴィネットはかなりたくさんあるが、一方の山は他方の山に比べて非常に小さいか、二つの峰の間の谷は浅いものが多いので、無視しても実害ないかもしれないが、正規分布でないのはもちろん、分散が均一とは言い難い。これは回帰分析の際に悪影響を与えるかもしれない。

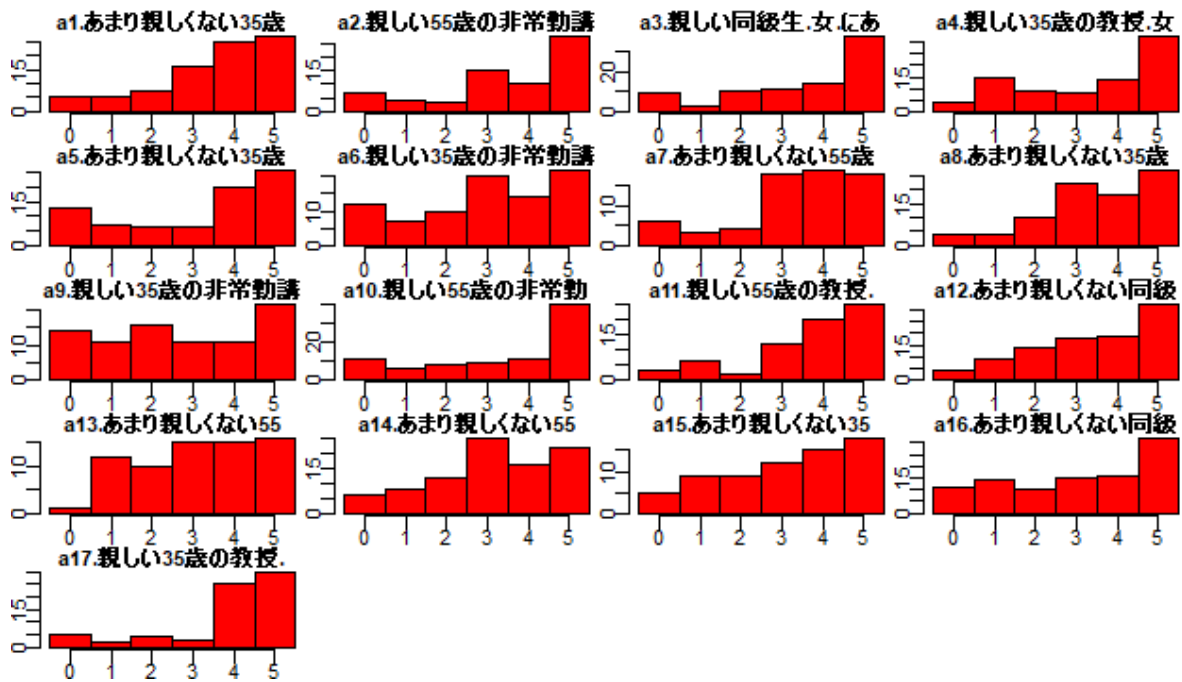


図 1: A 票のヴィネットのヒストグラム

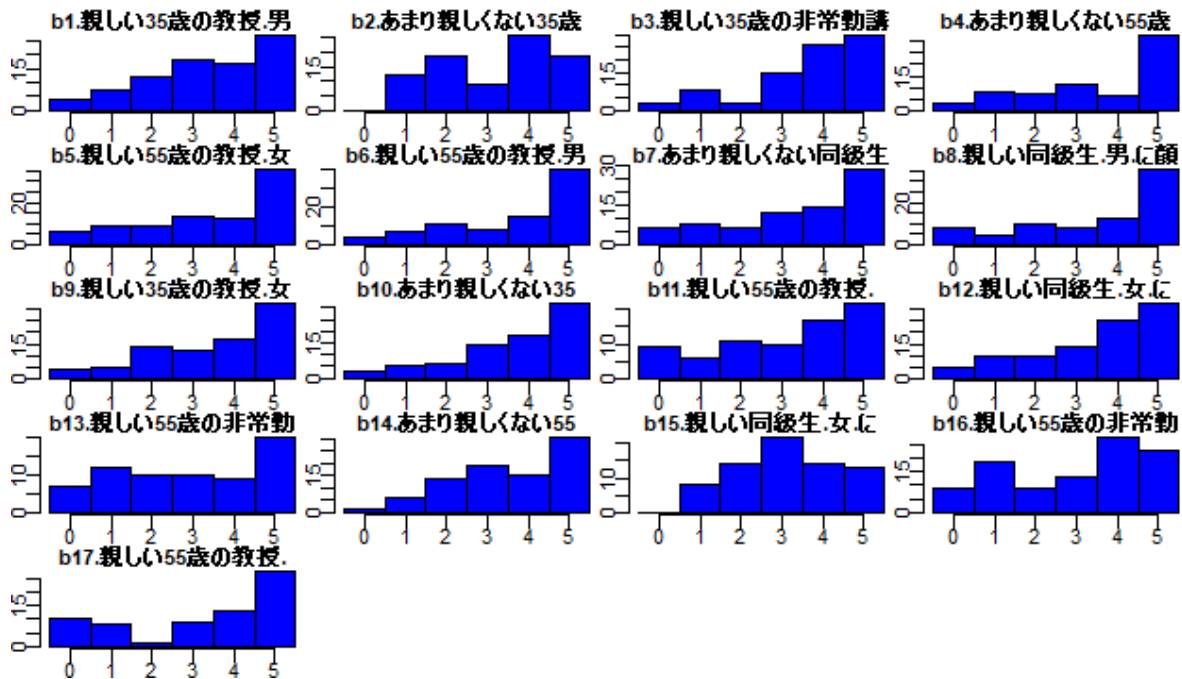


図 2: B 票 のヴィネットのヒストグラム

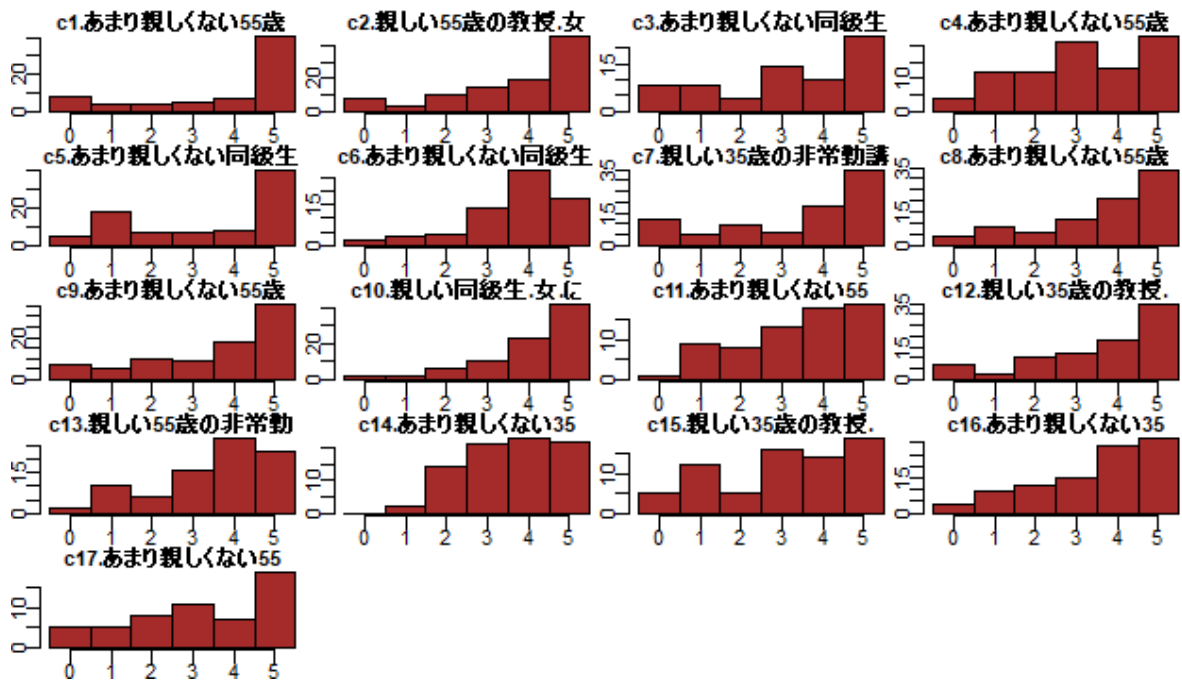


図 3: C 票 のヴィネットのヒストグラム

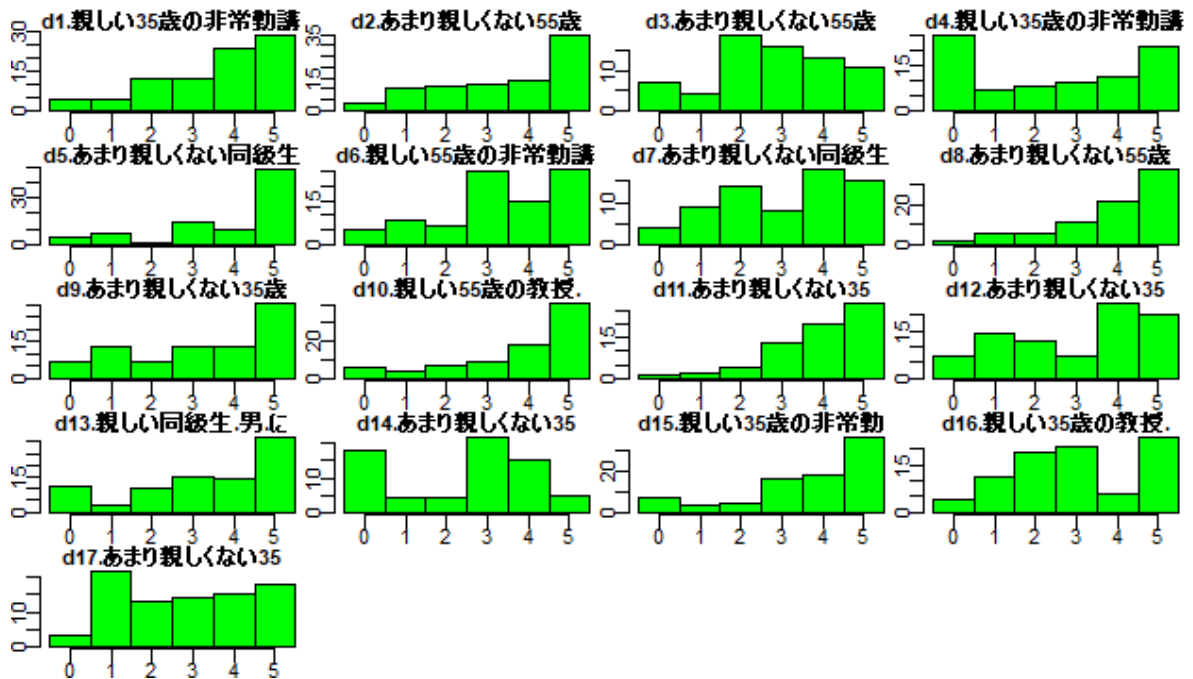


図 4: D 票 のヴィネットのヒストグラム

そこで、方法の節で説明した多峰性のブートストラップ検定を行った（リサンプリングは 1000 回）。その結果、5%水準で有意だったのは、29 (42%) のヴィネットであり、単峰性が満たされているとは言えない。1%水準で有意となったのは、以下のヴィネットに関する不快感である。特に共通性があるようには思えない。この p 値は、標準偏差が大きいほど小さくなりやすい（相関係数= -0.79）ので、単に回答のばらつきが大きいだけのこともかもしれないが、注意が必要だろう。

- a2.親しい 55 歳の非常勤講師.男.に手を握られた
- a5.あまり親しくない 35 歳の教授.女.にあなたが既婚者と浮気しているというデマを流された
- a9.親しい 35 歳の非常勤講師.女.にいやらしい目で見つめられた
- b4.あまり親しくない 55 歳の非常勤講師.女.に下ネタの冗談を聞かされた
- c5.あまり親しくない同級生.女.にお尻を触られた
- c7.親しい 35 歳の非常勤講師.男.に顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られた
- d4.親しい 35 歳の非常勤講師.男.にお尻を触られた
- d14.あまり親しくない 35 歳の教授.男.に顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られた
- d16.親しい 35 歳の教授.女.に異性の好みを聞かれた

大学による違い

京都大学とその他の大学の学生で、回帰分析の結果にどの程度違いがあるのか検討してみた結果が表 11 と表 12 である。これらを見比べればわかるように、ほとんど同じ結果である。社会学者のくせに京大神話を安易に信じる人は後を絶たないが、セクハラ時の不快感については、京大生は他大学の学生と大差ない。

表 11 セクハラ時の不快感の回帰分析（切片のみ、大学別）

	全体	京都大学	他の大学
切片	3.37 (0.04) ***	3.30 (0.06) ***	3.45 (0.07) ***
BIC	17785.03	10431.83	7372.91
対数尤度	-8879.80	-5204.01	-3675.05
N	4802	2797	2005
回答者数	283	165	118

	全体	京都大学	他の大学
Level 2 分散	0.44	0.45	0.41
Level 1 分散	2.16	2.21	2.10

表 12 セクハラ時の不快感の回帰分析（大学別）

	全体	京都大学	他の大学
切片	1.66 (0.12) ***	1.70 (0.17) ***	1.55 (0.15) ***
男性: 女性が基準	-0.54 (0.09) ***	-0.53 (0.11) ***	-0.60 (0.14) ***
性別その他	0.41 (0.34)	0.01 (0.69)	0.63 (0.40)
3,4 年生: 1,2 年生が基準	-0.11 (0.11)	-0.13 (0.16)	-0.06 (0.15)
研究生等	0.22 (0.21)	0.14 (0.24)	0.20 (0.67)
大学院生	-0.13 (0.13)	-0.18 (0.19)	-0.09 (0.20)
京大ダミー	-0.06 (0.09)		
感情抑制規範	-0.14 (0.04) ***	-0.13 (0.06) *	-0.12 (0.07)
感情表出	-0.05 (0.04)	-0.01 (0.06)	-0.11 (0.06)
家族・友人サポート	-0.10 (0.04) *	-0.17 (0.06) **	0.03 (0.07)
大学サポート	0.07 (0.04)	0.05 (0.06)	0.09 (0.07)
親しい	-0.50 (0.03) ***	-0.49 (0.04) ***	-0.52 (0.05) ***
35 歳非常勤: 同級生が基準	0.73 (0.05) ***	0.69 (0.07) ***	0.78 (0.08) ***
55 歳非常勤	0.88 (0.05) ***	0.89 (0.07) ***	0.87 (0.08) ***
35 歳教授	0.65 (0.05) ***	0.64 (0.07) ***	0.66 (0.08) ***
55 歳教授	0.91 (0.05) ***	0.90 (0.07) ***	0.92 (0.08) ***
加害者男	0.76 (0.03) ***	0.71 (0.04) ***	0.83 (0.05) ***
下ネタ: 異性好みが基準	0.84 (0.06) ***	0.72 (0.08) ***	1.00 (0.09) ***
浮気デマ	2.55 (0.06) ***	2.55 (0.08) ***	2.54 (0.09) ***
いやらしい目	1.54 (0.06) ***	1.50 (0.08) ***	1.60 (0.09) ***
顔 20cm	1.16 (0.06) ***	1.10 (0.08) ***	1.24 (0.09) ***
手を握られた	0.83 (0.06) ***	0.78 (0.08) ***	0.90 (0.09) ***
お尻触られ	1.94 (0.06) ***	1.96 (0.08) ***	1.92 (0.09) ***
BIC	15318.52	9099.36	6403.31
対数尤度	-7553.30	-4454.45	-3110.42
N	4802	2797	2005
回答者数	283	165	118
Level 2 分散	0.38	0.39	0.36

	全体	京都大学	他の大学
Level 1 分散	1.20	1.25	1.14

次に学部生と大学院生のサンプルに関して回帰分析した結果が表 13 である。学部生と大学院生の係数を比較すると、ほぼ同じであるが、「55 歳教授」、「浮気デマ」、「手握られ」の係数は学部生のほうが 5%水準で有意に大きい（検定の計算結果は割愛）。回答者の性別の係数にもかなり差があるが、係数の差は有意にならない。学部生のほうが院生よりも前述の 3 つの条件でのセクハラを不快に感じるという結果であるが、おおむね同じ結果という理解でよいのではないだろうか。

表 13 セクハラ時の不快感の回帰分析（学部生、大学院生 別）

	学部生	院生
切片	1.52 (0.10) ***	1.68 (0.23) ***
男性: 女性が基準	-0.61 (0.10) ***	-0.18 (0.22)
性別その他	0.37 (0.34)	
京大ダミー	-0.05 (0.10)	-0.15 (0.23)
感情抑制規範	-0.13 (0.05) **	-0.20 (0.10) *
感情表出	-0.03 (0.05)	-0.01 (0.10)
家族・友人サポート	-0.08 (0.06)	-0.07 (0.09)
大学サポート	0.08 (0.05)	0.06 (0.12)
親しい	-0.51 (0.04) ***	-0.49 (0.08) ***
35 歳非常勤: 同級生が基準	0.77 (0.06) ***	0.64 (0.12) ***
55 歳非常勤	0.94 (0.06) ***	0.73 (0.12) ***
35 歳教授	0.70 (0.06) ***	0.49 (0.12) ***
55 歳教授	0.96 (0.06) ***	0.70 (0.12) ***
加害者男	0.75 (0.04) ***	0.70 (0.08) ***
下ネタ: 異性好みが基準	0.83 (0.07) ***	1.00 (0.14) ***
浮気デマ	2.66 (0.07) ***	2.28 (0.14) ***
いやらしい目	1.59 (0.07) ***	1.50 (0.14) ***
顔 20cm	1.22 (0.07) ***	1.05 (0.14) ***
手握られた	0.96 (0.07) ***	0.54 (0.14) ***
お尻触られ	1.98 (0.07) ***	1.91 (0.14) ***
N	3650	914
回答者数	215	54

	学部生	院生
Level 2 分散	0.37	0.50
Level 1 分散	1.19	1.25

最後にすべての独立変数間の交互作用効果を仮定したモデルから出発した後退ステップワイズ法でモデルを選択した結果が表 14 である。これを見ると、大学サポートと感情表出、学年がモデルから消えている。これらは修正 BIC を基準とすると、モデルから脱落するということである。

表 14 不快感の回帰分析の結果（ステップワイズ法で変数選択したモデル、OLS）

	Model 1
切片	1.42 (0.08) ***
男性: 女性が基準	-0.15 (0.05) **
性別その他	0.44 (0.22) *
京大ダミー	-0.02 (0.04)
感情抑制規範	-0.13 (0.02) ***
家族・友人サポート	0.11 (0.03) ***
親しい	-0.48 (0.04) ***
35 歳非常勤: 同級生が基準	0.76 (0.06) ***
55 歳非常勤	0.89 (0.06) ***
35 歳教授	0.67 (0.06) ***
55 歳教授	0.91 (0.06) ***
加害者男	1.00 (0.10) ***
下ネタ: 異性好みが基準	0.90 (0.09) ***
浮気デマ	2.98 (0.10) ***
いやらしい目	1.49 (0.09) ***
顔 20cm	1.02 (0.10) ***
手を握られた	0.49 (0.09) ***
お尻触られ	1.93 (0.09) ***
男性×加害者男	-0.70 (0.07) ***
性別その他×加害者男	-0.14 (0.30)
京大ダミー×家族・友人サポート	-0.30 (0.04) ***
感情抑制規範×家族・友人サポート	-0.10 (0.02) ***
加害者男×下ネタ	-0.18 (0.13)

	Model 1
加害者男×浮気デマ	-0.74 (0.14) ***
加害者男×いやらしい目	0.09 (0.13)
加害者男×顔 20cm	0.24 (0.13)
加害者男×手を握られた	0.68 (0.13) ***
加害者男×お尻触られ	0.02 (0.13)
R ²	0.43
N	4802

いっぽう、いくつかの交互作用効果が検出されているが、回帰係数だけからでは理解しにくいので、これらの交互作用を図示したのが図5～図8である。図5を見ると、男性は加害者が男性でも女性でも平均不快感に大差ないが、女性の場合は大きく異なることがわかる。男女の権力関係を鑑みれば、女性が特に男性に対して脅威を感じるのは不思議ではなからう。

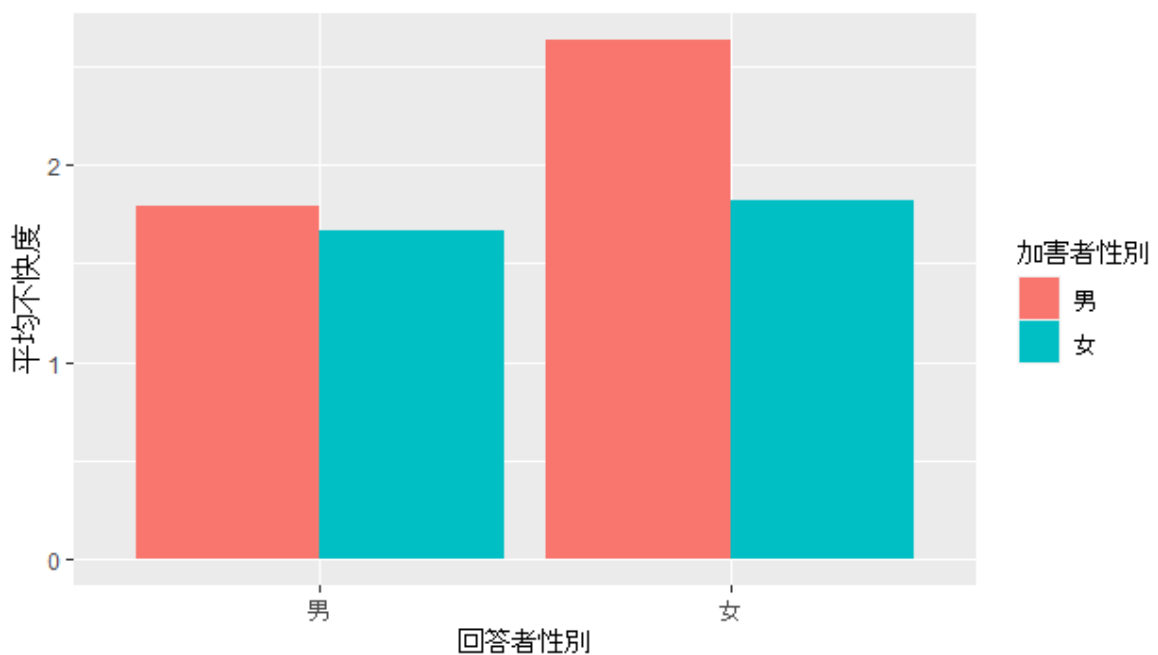


図5 平均不快感（回答者性別×加害者性別）

図6を見ると、京大生は家族や友人にサポートが期待できるほど不快感が小さくなっており、仮説通りなのであるが、その他の大学の学生は逆に不快感が高まってい

る。なぜこのような傾向が見られるのかは不明である。大多数の学生は家族や友人からのサポートを期待できると答えており（表 4 参照）、このサポート有り群については、京大と他大学の差はない。ただ、まれにこのようなサポートを期待できない学生がおり、このサポート無し群で京大と他大学との差が出る。例えば、他大学のサポート無し群は、そもそも大学への期待やコミットメントが弱いのにに対して、京大のサポート無し群は、大学への期待やコミットメントが強いのかもしれない。そのせいで他大学ではサポート無し群の不快感はそれほど高くないのにに対して、京大では高くなるのかもしれない。空想の域を出ないが、そういった仮説も考えられる。

図 7 は、家族・友人サポートが期待できるほど、感情抑制規範の効果が大きくなることを示している。周りからサポートを期待できるということは、人間関係が密なのだろうから、規範もうまく働きやすいということかもしれない。

図 8 は、加害者が男性の場合のほうが女性の場合よりも不快感が高いことを示している。このような男女差は、「手を握られ」たときに特に大きく、「浮気デマ」を流されたとき特小さい。女性に手を握られてもあまり脅威とは感じられないため男女差が大きくなり、「浮気デマ」は加害者が男でも女でも関係なく不快なので、男女差が小さくなる、ということだろう。こういった文脈によっては非性愛的な親愛の情の表現ととらえられるような行動で、特に男女差が大きくなるのかもしれない。例えば、今回の調査ではたずねていないが、「肩にふれる」、「ハグする」といった行為も男女差が出る可能性も考えられる。女性のほうが男性よりも共感的でケア役割を担いやすい、というイメージがそういった傾向を作るのだろうか。いずれも想像の域を出ないが興味深い傾向である。

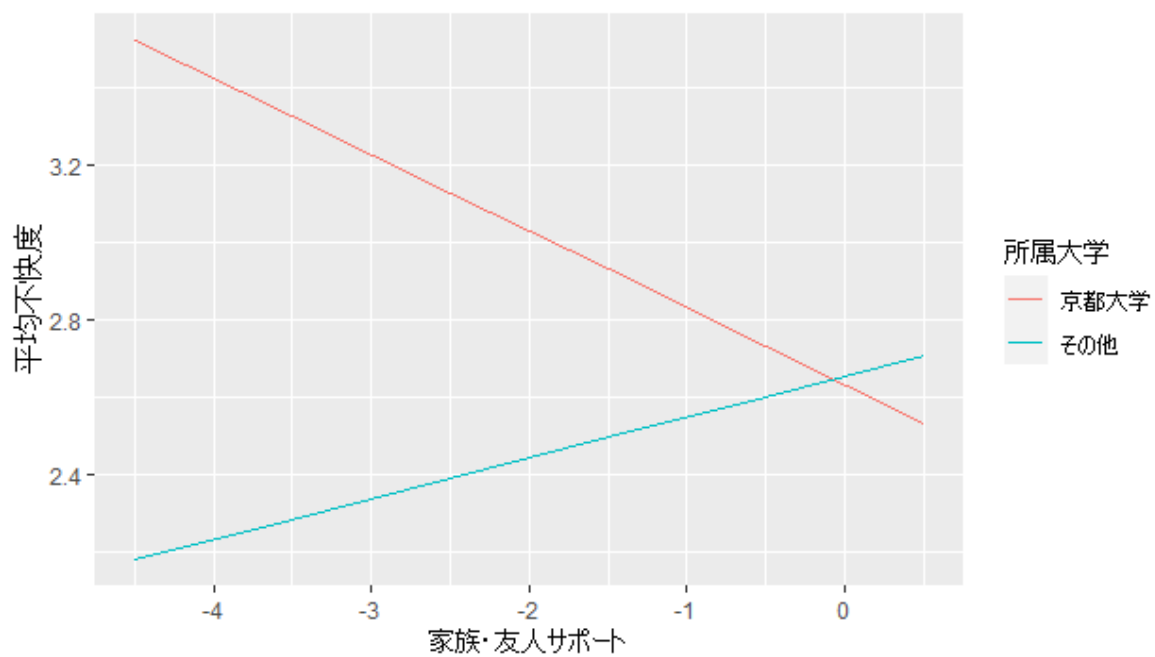


図 6 平均不快感 (家族・友人サポート×大学)

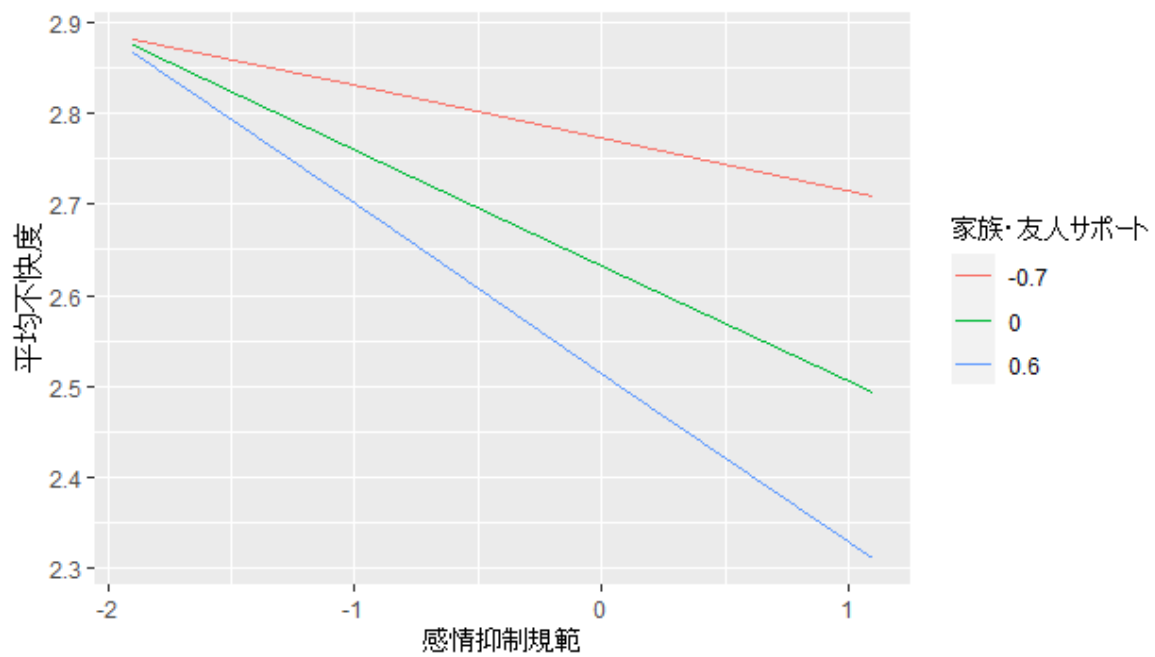


図 7 平均不快感 (家族・友人サポート×感情抑制規範)

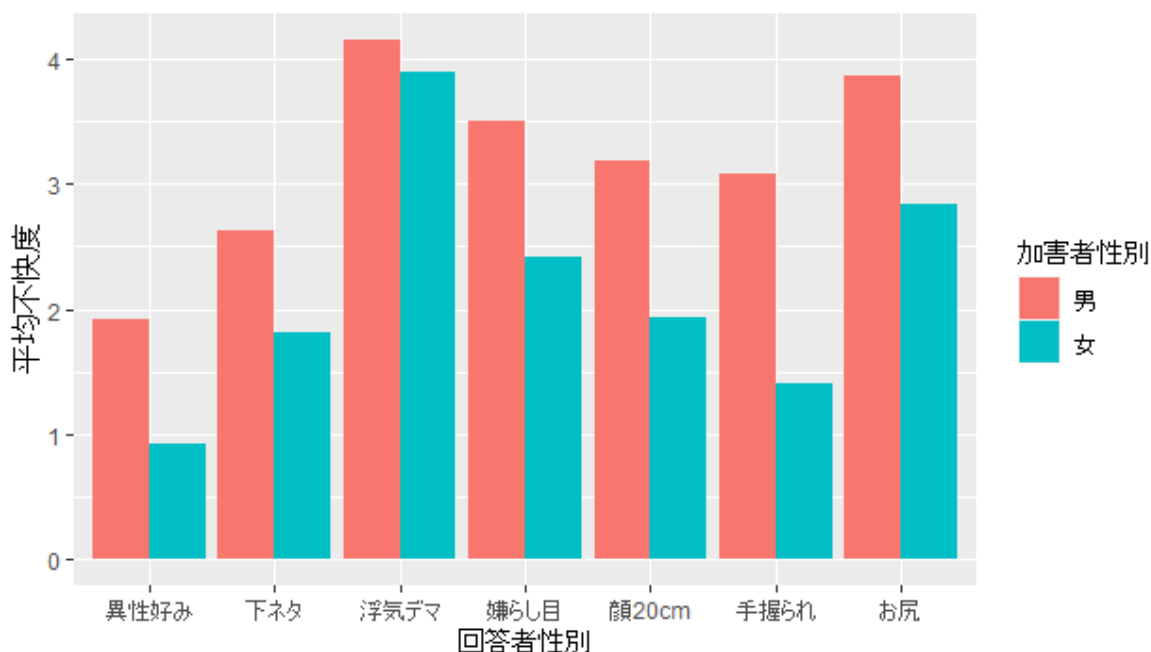


図 8 平均不快度（回答者性別×加害者性別）

ランダム効果の分布の検討

最後に、表 12 の全体の推定結果から得られた、Level 1（ヴィネット）と Level 2 のランダム効果の分布を見てみよう。いずれも最頻値が平均=0 よりも大きく、左にすそ野が長く伸びる分布になっている。つまり、例外的に不快感が全般に低い人や、特定のヴィネットだけで例外的に不快感が低い人がいる、ということである。これが、上で述べた多峰性を作り出している原因の一つと思われる。図 1～図 4 を見ると、多峰の場合、ほとんど左側の山のほうが小さいが、この小さな山を作っているのが、これらの例外的に不快感が低い人たちであろう。よく言えばハラスメント耐性が強い、悪く言えば「鈍い」ということかもしれないが、いずれにせよ、興味深いタイプの人たちと言えよう。

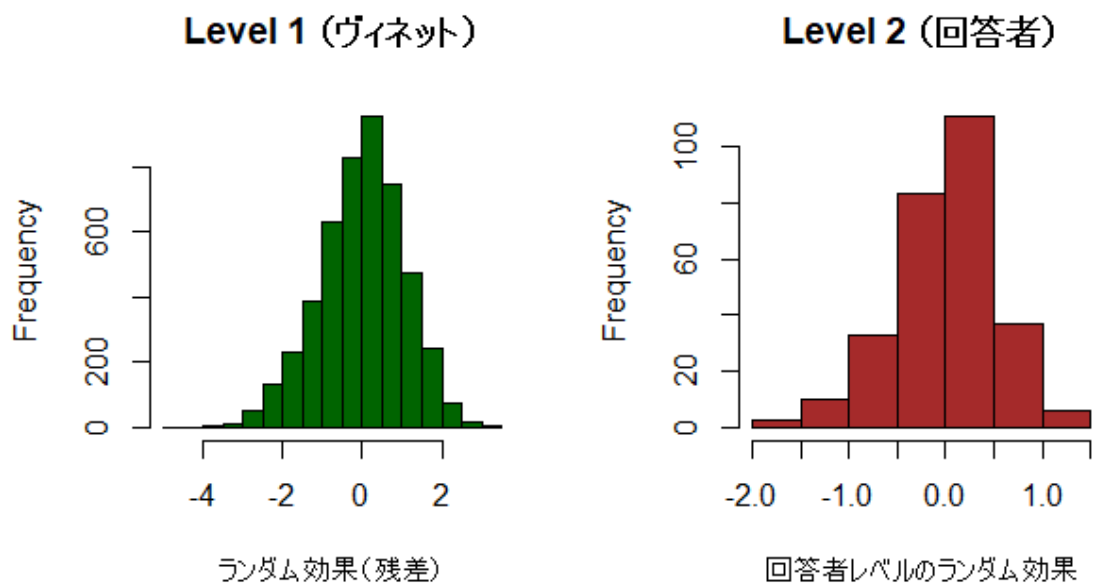


図9 表12 (全体のモデル) のランダム効果のヒストグラム

6 議論

実質的な議論は学生たちの書いた章に譲るが、最後に今後の課題を思いつくまま列挙しておく。

1. 現在、不快感は6択で評価してもらっているが、最頻値はしばしば5（最高の値）をとっており、天井効果によって不快感が正確に測れていない恐れがある。7択や11択にする、あるいは何か別のベンチマークを想起させる、など何らかの工夫が必要かもしれない。
2. 今回のヴィネットは大学で起きるセクハラを想定している。ほとんど学校に来ていない学生にとって、同級生や教員は大した脅威ではない可能性も考えられる。授業への出席率は統制変数として有用かもしれない。

文献

- Auspurg, Katrin and Hinz, Thomas 2015. *Factorial survey experiments* 1st ed., Thousand Oaks: SAGE (Quantitative Applications in the Social Sciences).
- Bates, Douglas, Mächler, Martin, Bolker, Ben and Walker, Steve 2015. Fitting linear mixed-effects models using lme4. *Journal of Statistical Software* 67 : 1–48. doi: [10.18637/jss.v067.i01](https://doi.org/10.18637/jss.v067.i01)
- Fast, Nathanael J. and Chen, Serena 2009. When the boss feels inadequate: Power, incompetence, and aggression. *Psychological Science* 20 : 1406–13. doi: [10.1111/j.1467-9280.2009.02452.x](https://doi.org/10.1111/j.1467-9280.2009.02452.x)

- Halper, Leah R. and Rios, Kimberly 2019. [Feeling powerful but incompetent: Fear of negative evaluation predicts men's sexual harassment of subordinates](#). *Sex Roles* 80 : 247–61.
- Kuznetsova, Alexandra, Brockhoff, Per B. and Christensen, Rune H.B. 2017. lmerTest package: Tests in linear mixed effects models. *Journal of Statistical Software* 82 : 1–26. doi: [10.18637/jss.v082.i13](https://doi.org/10.18637/jss.v082.i13)
- Mooney, Christopher Z., Mooney, Christopher F., Duval, Robert D., Mooney, Christopher L. and Duvall, Robert 1993. *Bootstrapping: A nonparametric approach to statistical inference*, Thousand Oaks: sage.
- 牟田和恵 2013. 『部長, その恋愛はセクハラです!』, 集英社.
- R Core Team 2020. *R: A language and environment for statistical computing*, Vienna, Austria: R Foundation for Statistical Computing.
- 太郎丸博編 2022. 『どんな要因がハラスメントを不快にするのか』, 2021 年度社会調査実習報告書.
- 太郎丸博・横澤翠子・沼田詩暖 2022. 「セクシュアル・ハラスメントにおける不快感の促進要因」『第 72 回 数理社会学会大会報告要旨集』.
- 太郎丸博・張亮. 2023. 「セクシュアル・ハラスメントにおける不快感の抑制要因」『第 74 回数理社会学会大会研究報告要旨集』 37–40.
- Wheeler, Bob 2019. *AlgDesign: Algorithmic experimental design*, R package version 1.2.0.
- whuber 2018. [Unimodality test for discrete distribution](https://stats.stackexchange.com/users/919/whuber). <https://stats.stackexchange.com/users/919/whuber>

女同士のセクハラと男同士のセクハラにおける不快感のちがい

岡田 慶斗

1. 導入

1.1 研究の背景

「セクシャル・ハラスメント」といえば、異性間のセクハラが主要なものと考えられがちであり、同性間のセクハラは見落とされやすい。歴史的にみても、セクハラという言葉は、男性から女性にたいする性的暴力を念頭においていたようである。「女性学事典」の記述（浅倉 2002）によると、セクハラという言葉は、1970年代にアメリカのフェミニズムにより考案・問題化され、92年には、国連の女性差別撤廃委員会により、女性にたいする暴力の一類型であると明言された。

そして、同性間のセクハラについて認識されるようになってきたのは、ごく最近のことであるようである。たとえば、日本の法制度のうえでは、2014年に改正・施行された男女雇用機会均等法において、同性間でもセクハラが起りうるということが初めて記載された（厚生労働省 2013）。

しかし、同性間のセクハラと一言にいても、さまざまなパターンがありえそうで、研究が必要になってくると考えられる。たとえば、おなじ同性間のセクハラといっても、「キスしてくる」「ハグしてくる」といった同性愛的なもの、「(女性が女性に) 彼氏がいるかどうかを尋ねる」「(男性が男性に) 女性との初交について尋ねる」といった異性愛的なものとは、性質や不快感が違ってくるかもしれない。

1.2 このレポートで取りくむ問題・意義

このレポートで検討する問題（リサーチ・クエスチョン）は、セクハラの種類ごとに分けて「女性から女性へのセクハラ」と「男性から男性へのセクハラ」との不快感がどう違うのかということである。これによって、見落とされがちな同性間のセクハラの性質を明らかにすることに貢献できるであろう。

たとえば、「下ネタの冗談を聞かされる」タイプのセクハラにおいては、「女性同士のセクハラ」と「男性同士のセクハラ」との、どちらが不快感は高いのだろうか、といったことをタイプごとに検討していく。

なお、回答者の性別が「その他」の場合については、同性間のセクハラを検討することができなかった。この調査では、加害者を女・男のどちらかとしてしか想定していないからだ。

1.3 仮説

まず、仮説の根拠となる理論について先に述べておくと、それは、セジウィック (1985) が『男同士の絆』で述べた「ホモソーシャル」の概念である。セジウィックによると、家父長制的な社会は、男たちの連帯によって成立しており、この連帯には同性愛的な欲望が入りこんでいる。しかし、男たちは、その同性愛的欲望を隠すために、同性愛者を排除し、女性を交換しあうことで、異性愛者としての主体を形成するという。

この理論どおりなら、すくなくとも家父長的な社会においては、だいたい男性のほうが同性愛を嫌悪しがちであり、逆に、異性愛には積極的であることが許容されるのではないだろうか。たとえば、男性は、お尻を触ってきたり、顔を近づけてきたりした男を、同性愛者として排除したくなり、不快感を感じるかもしれない。しかし、浮気をしたというデマを流されたり、好きな異性について聞かれたりしても、異性愛に積極的であることは許されているので、不快感をいだきにくいかもしれない。

つぎに、この理論や考察を踏まえて、1.2 で挙げたリサーチ・クエスチョンへの仮説を、全体的傾向・セクハラの種類ごとに分けて、箇条書きでまとめる。

仮説 1: 全体的傾向として、男性間のセクハラのほうが不快感は高い。

仮説 2: 同性愛的なセクハラは、男性間のほうが不快感は高い。

質問に用いた項目でいえば、「いやらしい目で見つめられた」「顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られた」「手を握られた」「お尻を触られた」タイプのセクハラである。加害者が被害者に好意をいただいていると思わせかねないようなタイプである。

仮説 3: 異性愛的なセクハラは、男性間のほうが不快感は低い。

質問に用いた項目でいえば、「異性の好みを聞かれた」、「下ネタの冗談を聞かされた」、「既婚者と浮気しているというデマを流された」タイプのセクハラである。異性との恋愛にかんするものであり、加害者が被害者に好意をいただいていると思わせることは無さそうである。もっとも、「下ネタ」といっても様々なタイプがありえて、異性愛的なものとは断言するのは良くないかもしれない。

2. 方法

2.1 使用した質問項目について

まず、このレポートで使った質問項目について述べる。

(1) 「Q1 あなたの性別は？」

選択肢：「1 女」「2 男」「3 その他」

回答者の性別について尋ねた質問である。

(2) 「あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。」

選択肢：「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」

例：a1 あまり親しくない 35 歳の教授（男）に手を握られた

さまざまな種類に分けて、セクハラの不快感をたずねた 68 つの質問群である。一人の回答者は、そのうちの 17 つだけを答えることになっている。セクハラの種類は、以下のような種類に分けられている。

・加害者が女か、男か（2 通り）

・加害者の地位・年齢（5 通り）

「同級生」「35 歳の非常勤講師」「35 歳の教授」「55 歳の非常勤講師」「55 歳の教授」

・加害者と、親しいか、あまり親しくないか（2 通り）

・セクハラの種類（7 通り）

「いやらしい目で見つめられた」「顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られた」

「手を握られた」「お尻を触られた」「異性の好みを聞かれた」「下ネタの冗談を聞かされた」「既婚者と浮気しているというデマを流された」

たとえば、例で挙げた「a1 あまり親しくない 35 歳の教授（男）に手を握られた」という設問で尋ねているのは、性別は男で、年齢・地位は 35 歳の教授の、親しくない加害者からの、手を握られる種類のセクハラにかんする不快度である。

後述するように、このレポートでは、「加害者が女か、男か」「セクハラの種類」の 2 つにしか着目しない。

2.2 質問項目をどのように加工したか

つぎに、データをどのように加工したかについて述べる。

(1) Q1 で答えられた回答者の性別と、各質問における加害者の性別とを照らしあわせ、各質問への回答が「女同士のセクハラ」となるか「男同士のセクハラ」となるか、分類していった。なお、このレポートでは、異性同士のセクハラとなった質問への回答は使用しない。また、1. で述べた理由もあり、回答者の性別が「その他」である回答も使用しない。

(2) 各質問を、セクハラの種類ごとにさらに分類した。分類は、2.1(2)セクハラの種類 (7通り) のままである。

(1) ~ (2) の処理をおこなうと、各分類のデータ数は、表1のようになった。

表1：セクハラの種類ごとにわけた同性間セクハラの数

セクハラの種類	女同士	男同士
異性の好みを聞かれた	980	620
下ネタの冗談を聞かされた	980	620
浮気デマを流された	784	620
いやらしい目で見られた	980	620
顔を接近された	784	620
手を握られた	980	620
尻を触られた	980	620
全体	6448	4340

(3) 不快度についての回答に、整数値を割りあてた。以下の通りである。

- ・「1 とても不快である」には、5
- ・「2 不快である」には、4
- ・「3 どちらかといえば不快」には、3
- ・「4 どちらかといえば不快ではない」には、2
- ・「5 不快ではない」には、1
- ・「6 まったく不快ではない」には、0

たとえば、ある女性の回答者が「a4 親しい35歳の教授(女)に手を握られた」という設問に、「1 とても不快である」と答えた場合、それは、

- (1) 「女同士のセクハラ」で、
- (2) 「顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた」タイプで、
- (3) 不快度として「5」が割り当てられることになる。

いっぽう、その女性回答者が「a6 親しい35歳の非常勤講師(男)に下ネタの冗談を聞かされた」という質問にどう答えていたとしても、(2) 「異性同士のセクハラ」なので、その質問への回答は当レポートでは用いない、ということである。

3. 結果

表 2：同性間セクハラにおける不快感の平均値の差にたいする統計的検定

セクハラの種類	女同士		男同士		t	p
	平均値	SD	平均値	SD		
異性の好みを聞かれた	1.719	1.539	1.770	1.437	-0.341	.733
下ネタの冗談を聞かされた	2.860	1.493	2.094	1.529	4.962	<.001 ***
浮気デマを流された	4.797	0.560	4.472	1.026	3.596	<.001 ***
いやらしい目で見られた	3.627	1.246	3.765	1.250	-1.071	.285
顔を接近された	2.680	1.483	3.368	1.468	-4.324	<.001 ***
手を握られた	2.145	1.601	3.167	1.530	-6.314	<.001 ***
尻を触られた	3.789	1.297	3.962	1.214	-1.341	.181
全体	3.026	1.673	3.224	1.640	-3.052	.002 **

(注) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$ 。有意差がある行は、青色でマークしている。

「女同士のセクハラ」の平均値と「男同士のセクハラ」の平均値とのあいだに統計的に有意な差があるかどうかについて、セクハラの種類ごとに分けて確認する。

t検定の結果、有意水準5%で有意で、不快感の平均値に差があるといえるセクハラの種類は、次の通りだった。

- ・全体。(女同士 < 男同士)
- ・「下ネタの冗談を聞かされた」セクハラ。(女同士 > 男同士)
- ・「既婚者と浮気しているというデマを流された」セクハラ。(女同士 > 男同士)
- ・「顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた」セクハラ。(女同士 < 男同士)
- ・「手を握られた」セクハラ。(女同士 < 男同士)

逆に、有意ではなく、不快感の平均値に差があるといえなかったのは、次の通り。

- ・「異性の好みを聞かれた」セクハラ。
- ・「いやらしい目で見つめられた」セクハラ。
- ・「お尻を触られた」セクハラ。

4. 議論

4.1 分析結果の考察

まず、有意差が出たものについては、だいたい、仮説どおりの結果を得ることができた。「男同士のセクハラ」のほうで不快感が高かったのは、全体、「顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた」、「手を握られた」セクハラである。いっぽう、「女同士セクハラ」のほうで不快感が高かったのは、「下ネタの冗談を聞かされた」、「既婚者と浮気しているというデマを流された」セクハラである。

1.3節でも挙げた理由を振りかえると、基本的に、全体や同性愛的セクハラやそれに近いものについては、男性のほうが同性愛嫌悪を感じやすいため不快感が高くなると考えられる。しかし、異性愛的セクハラについては、男性のほうが異性愛の性に奔放であることが許容されているので、不快感は低くなるのだと考えられる。

有意差が出ず仮説が支持されなかった項目もいくつかあるので、それぞれ理由について考察していく。有意差が出なかったのは、不快感が全体的に高め・低めの項目であるようだ。「異性の好みを聞かれた」セクハラでは、男同士・女同士ともに不快感がそもそも低い。これは、同性同士で異性の好みを話し合うのは、もはやセクハラというより、ただの恋話になるから、両性とも不快とは感じられないのだろう。「お尻を触られた」セクハラでは、男同士・女同士ともに不快感が高い。これは、パーソナルスペースの侵害という点で、もともと両性とも同様に不快なのだろう。また、「いやらしい目で見つめられた」という質問は、「いやらしい」という不快感を示す主観的なワーディングが元からふくまれているので、両性とも同様な不快感になってしまうのではないだろうか。

では、「浮気デマを流される」セクハラでは両方とも不快感が高いのに、どうして有意差が出たのだろうか。これは、このタイプのセクハラにおける女同士のセクハラ標準偏差が他と比べてかなり低いことが原因だろう。おそらく、女性は性に奔放であることが許されにくいという強い規範があるのではないだろうか。

4.2 この研究の意義・今後の課題

この研究では、同性間のセクハラといえども、男性間・女性間で、不快に感じるセクハラに違いがあるということが明らかになった。その違いを鑑みるに、「男性は同性愛嫌悪を感じるので、全体的・同性愛的なセクハラで不快感がより高くなる一方、異性愛には奔放であってもいいので、異性愛的なセクハラでは不快感が下がる」ということが主張できるかもしれない。

今後の課題としては、この主張を厳密な検証するためには、質問を追加しなければならないということである。

たとえば、「既婚者と浮気しているというデマを流された」タイプのセクハラの似たかたちで、「同性同士で浮気しているというデマ」と「異性同士で浮気しているという

デマ」の両方の不快感について尋ねることで、より明確に同性愛嫌悪について測れるかもしれない。

また、「異性愛には奔放であってもいいので、異性愛的なセクハラでは不快感が下がる」という主張をより厳密に検証するためには、「性の奔放さ」という点について尋ねる質問を追加しなければならないと考えられる。なぜなら、同性のなかで比べても、「性に奔放であっても良いかどうか」という意識は、人によって違ってくるだろうからだ。

5. 参考文献リスト

浅倉むつ子, 2002, 「セクシャル・ハラスメント」井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編『岩波 女性学事典』岩波書店, 296-298.

厚生労働省, 2013, 「男女雇用機会均等法施行規則を改正する省令等を公布しました」, (2023年1月15日取得, <http://www.>

<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000033232.html>).

Sedgwick, Eve Kosofsky, 1985, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, New York: Columbia University Press. (上原早苗・亀澤美由紀訳, 2001, 『男同士の絆』名古屋大学出版会)

男女大学生におけるセクハラ不快感の要因の違いをめぐり一考察

DENG YAN

1 研究背景

セクシュアル・ハラスメント（以下は「セクハラ」）とは、性差別の一形態であり、一般的には対価型ハラスメントと環境型ハラスメントという 2 つの行動タイプがある（Welsh 1999）。男女雇用機会均等法によれば、前者では「職場において行われる性的な言動に対するその雇用する労働者の対応により当該労働者がその労働条件につき不利益を受けること」、後者では「当該性的な言動により当該労働者の就業環境が害されること」である²。1970 年代にアメリカで誕生した造語だが、日本では 1986 年の西船橋駅転落事件により上陸し、1989 年福岡裁判を経て世間で広がれ（牟田 2016）、しかも同年の新語・流行語大賞に金賞が受賞された。

セクハラといえば、イメージ的に「女性＝被害者、男性＝加害者」と想定するのは容易だが、実際には男性が被害者となるセクハラや、同性間のセクハラも存在している。法的には、1999 年改正男女雇用機会均等法では初めて「女性労働者に対するセクハラ防止のための配慮」を義務化し、さらに 2007 年には女性だけではなく男性も対象に加えて「男女労働者に対するセクハラ防止の措置義務」に改正した。発生場所としては職場のほか、学校も高発生率場所である。文部科学省の調査によると、平成 30 年度には教育職員へのわいせつ行為等（セクハラを含む）に係る懲戒処分が 282 件ある³。

以上を踏まえて、本稿は男女大学生を調査対象として、セクハラによる不快感の要因の違いを分析する。

2 研究方法

² 厚生労働省、「雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律」、<https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=347AC0000000113>、2023 年 1 月 15 日最終確認。

³ 文部科学省、「わいせつ行為等に係る懲戒処分等の状況（教育職員）（平成 30 年度）」、https://www.mext.go.jp/content/20191224-mxt_zaimu-000003245_20401.pdf、2023 年 1 月 15 日最終確認。

本稿は 2022 年 10 月に京都大学文学部社会学実習授業が大学生を対象に実施したセクハラに関する要因配置調査実験のデータを用いて R 言語で量的分析を行う。

表 1 不快感要因の種類

変数の類別	変数の原始内容		変数の簡略化
加害者の地位 (status)	教授		professor
	非常勤講師		part-time
	同級生		classmate
加害者の性別 (sex.offender)	男性		Mr
	女性		Miss
受け手との親 近度(close)	親しい		close
	あまり親しくない		far
行為のタイプ (type.n) ⁴	性的な内容 の発言関係 (speak)	あなたが既婚者と浮気しているという デマを流された	rumor
		下ネタの冗談を聞かされた	dirty.joke
		異性の好みを聞かれた	preference
	性的な行動 関係 (action)	手を握られた	shake.hand
		いやらしい目で見つめられた	gaze
		お尻を触られた	bum
		顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄 られた	distance

不快度は 6 段階で評価する (表 2)。

⁴ 分類基準は人事院のセクハラに対する解釈に拠る。人事院、「セクシュアル・ハラスメント」、<https://www.jinji.go.jp/sekuhara/1homu.html>、2023 年 1 月 15 日最終確認。

今回に分析する対象は京都大学の在学生(学部生、院生、研究生と聴講生等)を限定し、回答者性別は男性と女性のみであり、有効サンプルは男性 86 人、女性 82 人、総計 168 人である。不快感を起こる要因を加害者の地位、加害者の性別、受け手との親近度、セクハラ行為のタイプという四種類に設置した(表 1)。質問文(ヴィネット)は「親近度+地位+性別+行為タイプ」の形で表す。例えば「あまり親しくない 35 歳の教授(男)に手を握られた」。データフレームをローングフォーマットに変換する。

表 2 不快感の数値化

内容	対応値
1 とても不快である	6
2 不快である	5
3 どちらかといえば不快	4
4 どちらかといえば不快ではない	3
5 不快ではない	2
6 まったく不快ではない	1

結果を帰無仮説で検証する。すなわち、

仮説①男女とも、同性より、異性からのセクハラの不快感は高い；

仮説②男女とも、親しい人より、あまり親しくない人からのセクハラの不快感は高い；

仮説③男女とも、地位の高い方(教授>非常勤>同級生)からのセクハラの不快感は高い；

仮説④男女とも、性的な内容の発言関係の行為より、性的な行動関係からのセクハラの不快感は高い。

3 結果

(1) 平均値の比較

男女大学生の要因別の不快感平均値の比較結果は以下の通りである(図 1~4)。

結果から見れば、セクハラに対して、男性より女性回答者のほうは要因の種類に問わず、全体的に不快感の平均値が高い。

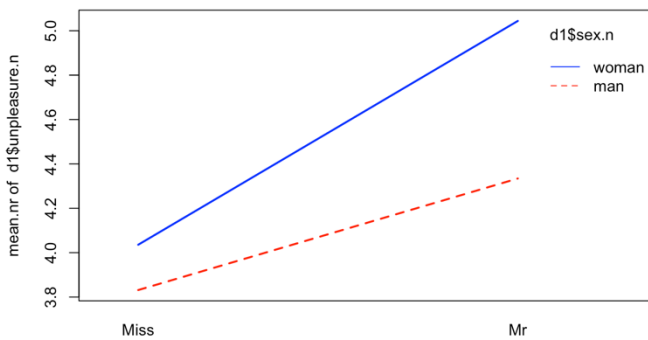


図 1 加害者の性別による不快感の平均値

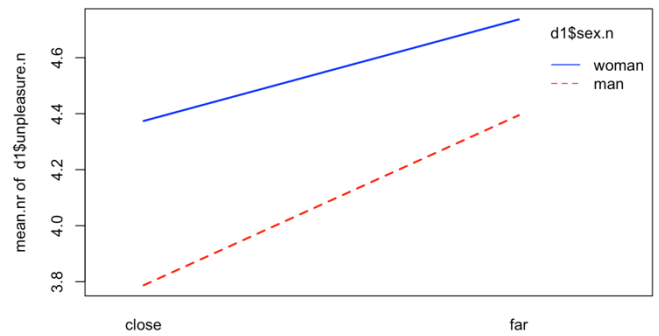


図 2 受け手との親近度による不快感の平均値

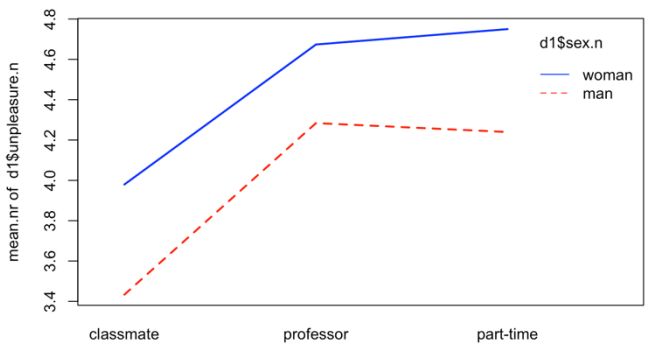


図 3 加害者地位による不快感の平均値

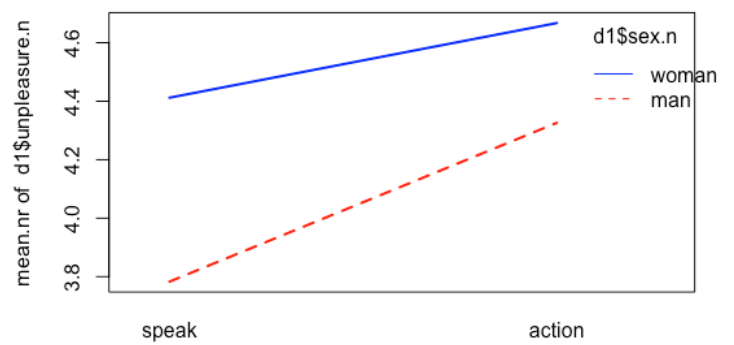


図 4 行為タイプによる不快感の平均値

加害者性別と不快感の関係を比較する際、仮説①と違い、男女回答者とも相手は男性の場合不快感が高い。性別による不快感の変化は、女性の方がより激しいと考えられる。

受け手との親近度の場合、男女とも親しい人より、あまり親しくない人からのセクハラの不快感は高く、すなわち仮説②を支持する。

加害者の地位と不快感の関係について、回答者は女性の場合、加害者の地位による不快感の高い順は「非常勤>教授>同級生」であるが、回答者は男性の場合、結果は「教授>非常勤>同級生」である。すなわち仮説③と相違がある。

行為タイプによる不快感に関して、男女回答者とも性的な内容の発言関係のセクハラより、性的な行動関係のセクハラの方は不快感が高い。すなわち仮説④を支持する。しかし、平均値から見れば、回答者は女性の場合、発言関係と行動関係の平均値の差が小さくないと考えられる。そして具体的な行為タイプでは、男女とも「浮気デマ>お尻を触ら>いやらしい目>顔と顔の距離>下ネタ>手を握られ>異性好み」である(図5)。

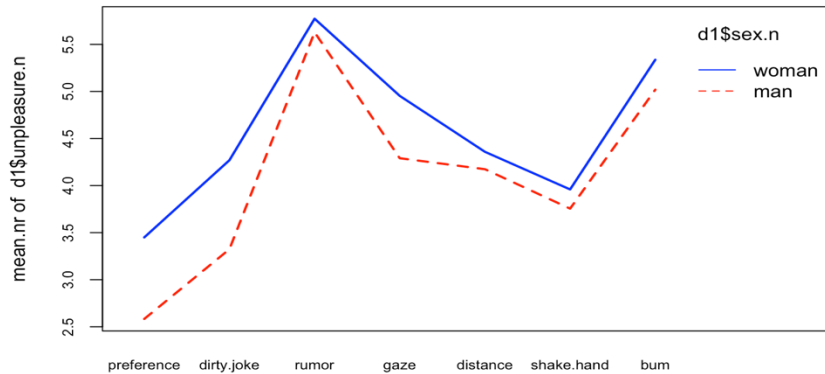


図5 行為タイプによる不快感の平均値

(2) 重回帰分析と係数の検定

平均値を比較するだけでは、要因の区別を説明するのは不十分であろう。実際には、不快感を感じるという結果は、複数の要因が同時に作用したことである。その為、重回帰分析を行う。分析した結果は以下となる。

$$Y_{女} = 3.11 + 0.72 * \text{教授} + 0.78 * \text{非常勤} + 0.39 * \text{親しさ}^5 + 1.00 * \text{性別}^6 + 0.24 * \text{行為タイプ}^7$$

$$Y_{男} = 2.61 + 0.89 * \text{教授} + 0.81 * \text{非常勤} + 0.57 * \text{親しさ} + 0.48 * \text{性別} + 0.48 * \text{行為タイプ}$$

一方、係数の差を検定した結果 (図7)、男女回答者は加害者の性別のみで P value <

	女	男
(Intercept)	3.11 *** (0.15)	2.61 *** (0.17)
statusprofessor	0.72 *** (0.14)	0.89 *** (0.16)
statuspart-time	0.78 *** (0.14)	0.81 *** (0.16)
closefar	0.39 *** (0.11)	0.57 *** (0.12)
sex.offenderMr	1.00 *** (0.10)	0.48 *** (0.12)
type.naction	0.24 * (0.11)	0.48 *** (0.12)
R^2	0.17	0.11
Adj. R^2	0.17	0.11
Num. obs.	698	727

図6 不快感の要因に関する重回帰分析モデル

	differences of coefficients	z.values	p.values	sig
(Intercept)	0.504	2.237	0.025	*
statusprofessor	-0.169	-0.799	0.424	
statuspart-time	-0.035	-0.163	0.870	
closefar	-0.178	-1.109	0.267	
sex.offenderMr	0.526	3.327	0.001	***
type.naction	-0.237	-1.467	0.142	

図7 男女モデルの係数の差の検定

⁵ 親しいときは0、あまり親しくない時は1、下同

⁶ 加害者が女性の場合は0、男性の場合は1、下同

⁷ 発言関係の場合は0、行動関係の場合は1、下同

0.001、つまり性別のレベルで男女モデルには有意差があり、加害者は男性の場合、不快感の増加程度は、男性より女性被害者の方が大きくなると考えられる。

(3) 加害者性別と他の変数の交互作用

加害者性別と地位、親近度、行為タイプの交互作用を検証すると、以下の結果が出来た(図8~10)。つまり、女性回答者に対して、加害者の地位および相手と自分との親近度が加害者性別と不快感変化の関係に及ぼす影響は顕著ではないが、浮気デマを流される場合と嫌らしい目で見つめられた場合が性別と不快感変化の関係に及ぼす影響は顕著である。

	女	男
(Intercept)	3.53 *** (0.16)	2.91 *** (0.18)
sex.offenderMr	0.92 *** (0.23)	1.13 *** (0.27)
statusprofessor	0.58 ** (0.20)	1.30 *** (0.22)
statuspart-time	0.74 *** (0.21)	1.06 *** (0.24)
sex.offenderMr:statusprofessor	0.20 (0.28)	-0.99 ** (0.33)
sex.offenderMr:statuspart-time	-0.02 (0.29)	-0.66 * (0.33)
R ²	0.15	0.07
Adj. R ²	0.14	0.06
Num. obs.	698	727

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

図 8 加害者性別と地位の交互作用

	女	男
(Intercept)	3.75 *** (0.11)	3.57 *** (0.12)
sex.offenderMr	1.19 *** (0.15)	0.42 * (0.17)
closefar	0.56 *** (0.15)	0.52 ** (0.18)
sex.offenderMr:closefar	-0.35 (0.21)	0.17 (0.24)
R ²	0.13	0.06
Adj. R ²	0.13	0.05
Num. obs.	698	727

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

図 9 加害者性別と親近度の交互作用

一方、男性回答者に対して、親近度が加害者性別と不快度への影響は顕著ではないが、加害者地位と嫌らしい目で見つめられた場合、および顔の距離が20cmまで近寄られた場合が加害者性別と不快度への影響は顕著である。

	女	男
(Intercept)	2.82 *** (0.16)	2.59 *** (0.19)
sex.offenderMr	1.27 *** (0.23)	-0.02 (0.26)
typedirty.joke	0.94 *** (0.24)	0.63 * (0.27)
typerumor	2.88 *** (0.26)	3.13 *** (0.29)
typegaze	2.03 *** (0.23)	1.24 *** (0.26)
typedistance	0.73 ** (0.24)	1.03 *** (0.28)
typeshake.hand	0.27 (0.24)	0.80 ** (0.28)
typebum	2.06 *** (0.23)	2.26 *** (0.26)
sex.offenderMr:typedirty.joke	-0.30 (0.33)	0.21 (0.37)
sex.offenderMr:typerumor	-1.15 *** (0.35)	-0.13 (0.39)
sex.offenderMr:typegaze	-1.07 ** (0.33)	0.95 * (0.37)
sex.offenderMr:typedistance	0.28 (0.34)	1.10 ** (0.39)
sex.offenderMr:typeshake.hand	0.44 (0.33)	0.70 (0.38)
sex.offenderMr:typebum	-0.37 (0.33)	0.36 (0.38)
R ²	0.38	0.35
Adj. R ²	0.37	0.33
Num. obs.	698	727

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

図 10 加害者性別と行為タイプの交互作用

4 考察

本稿では、男女大学生に対して、いかなる要因によってセクハラの不快感を影響したかについて量的分析を行った。全体から見れば、男性より、女性回答者の平均的不快感が高い。

帰無仮説を検証した結果、

仮説①では、男女回答者とも加害者は男性の場合は不快度が高く、さらに女性回答者の方は不快度の増加がより激しいと分かる。交互作用を分析した結果、女性回答者の場合では、加害者性別と不快度との関係に関して、加害者地位と親近度の影響が顕著ではないが、行為タイプの「浮気デマ」と「嫌らしい目」の影響が顕著である。女性回答者の場合では、親近度の交互作用が顕著していないが、地位と「嫌らしい目」と「顔距離」のほうが顕著している。

仮説②では、結果として男女ともあまり親しくない人からのセクハラの不快感が高いので、仮説②が成立する。

仮説③では、平均値から見れば女性回答者は「非常勤>教授>同級生」の一方、男性回答者は「教授>非常勤>同級生」である。しかし回帰分析の係数を検定した結果、加害者の地位による不快感の変化に関して、男女モデルの相違は顕著ではない。すなわち、男女とも地位の高い方（教授 \geq 非常勤講師>同級生）からのセクハラの不快感が高い。仮説③が成立する。

仮説④では、男女回答者とも性的な行動関係のセクハラの方は不快度が高い。行為タイプ順では、男女とも「浮気デマ>お尻を触ら>いやらしい目>顔と顔の距離>下ネタ>手を握られ>異性好み」である。つまり仮説④が成立する。しかし平均値の数値から見れば、男性回答者は、「下ネタ」や「異性好み」や「嫌らしい目」のセクハラに関しては、女性よりも不快感が大きく低いと分かる。それは日常生活の中に、男性はよく下ネタ等をするに関連しているかもしれない。すなわち、女性の性恥ずかしさと「女性が性的対象物、男性が性的主導者」という社会的文化構造が分析結果にも反映したようだ。

不足点としては、今回に対象とするサンプリング量は168人で、あまり多くないので、普遍性が弱いと考えられる。しかも今回の回答者を文系と理系に区分できず、回答者自身の特質からの不快感に対する影響を分析しなかった。今後にはサンプルを拡大してデータを取得してからさらに厳密な分析を行う必要があると考えている。

参考文献

- Welsh, S. (1999). Gender and sexual harassment. *Annual review of sociology*, 169-190.
- 前川尚澄. (2018). 「愛国・排外意識とジェンダーの関連の検討—JGSS-2008 の分析から—」『JGSS 公募論文優秀論文』
- 牟田和恵. (2016). 「セクハラ問題から見るジェンダー平等への道 問題化の歴史を振り返って」『法社会学』 2016(82), 111-122.

セクシャル・ハラスメントに対する男女大学生間の 認識の違い セクハラ調査を用いた分散分析

孫 ヨウヒ

1.背景

近年のセクシャル・ハラスメントへの関心の高まりと共に、日本においてもセクシャル・ハラスメントの社会学的な研究がなされるようになった。村松（2000）によると、セクシャル・ハラスメント（以下はセクハラと略記）とは「相手の意に反する性的な言動(言葉,視線,行為など)を指す」とされ、人権侵害行為のひとつである。また、セクハラは非常に幅広い性的侵害行為を表しているが、その侵害行為の程度に対する認識は個人の認知によって左右されるところが大きい。つまり、一般的にセクハラとされる行為であっても、被調査者の認知によって、セクハラではないと認識することもある。

さらに、セクハラに対するイメージは常に「加害者である男性—被害者である女性」という構図が世の中に認識されている。でも、この構図がどのように世の中に暗黙され、人々の認識に定着するのか。生物学的な視座からみれば、一部の原因としては男女間の身体能力の差があるため、女性より男性が比較的男女やり取りのプロセスにこの身体能力の差を生かして、女性をやり取りの不利な位置に置かれる。この原因についてはさしておき、筆者は男女がセクハラに対する認知の差の視点から、「加害者である男性—被害者である女性」という構図が生じる原因を探究する。つまり、男女間にセクハラ行為に対する認識の違いによって、男性は自分の行為がセクハラ行為ではないと考えるまま、女性とやり取りをしていることがある。しかし、この場合では女性は男性がセクハラ行為をしていると認識している。これによって、男性が無意識のうちに女性にセクハラす

ることが多発する。では、本当にこのようなセクハラ行為が発生しているのか、本稿はこれから「セクハラ調査」のデータに基づいて分析を行う。

2. データと方法

2.1 データ

本稿では、2022年に大学生（学部生と院生）を対象に実施した要因配置調査実験「セクハラ調査」のデータを用いて量的分析を行う。有効的な回答総数は329人であり、そのうち女性と回答する方は198人であり、男性と回答する方は127人であり、その他と回答する方は4人である。

表1 調査参加者の基本属性

属性		人数	合計人数
性別	男性	127	329
	女性	198	
	その他	4	
学年	大学一年生	26	329
	大学二年生	35	
	大学三年生	122	
	大学四年生	66	
	大学院生	60	
	研究生・聴講生	15	
	大学には在籍していない	5	

2.2 仮説

男女がセクハラに対する認知の差の存在を検証するために、筆者は以下の二つの仮説を提出する。

Q1：男女の間にセクハラ行為に対する不快感の差が存在し、しかも、男性より女性のほうがその不快感が高い。

Q2：セクハラ行為のタイプによって、男女の間に不快感の違いがあり、女性が不快を感じるとしても、男性が不快ではないと感じる場合があります。

2.3データの処理

本稿では、データをロングフォーマットに変換し、質問文からいくつかの要素を抽出し、ヴィネットとして、いくつかの説明変数を作った。そして、セクハラ行為に対する不快感を従属変数に設定した。さらに従属変数である「セクハラ行為に対する不快感」を「0全く不快ではない」から「5とても不快である」まで6つのレベルに分けて、0から5の順序変数と変換した。設定した説明変数と従属変数は以下の表2のように示している。

表2 説明変数と従属変数

説明変数	種類
セクハラ行為のタイプ	異性の好みを聞かれた
	下ネタの冗談を聞かされた
	あなたが既婚者と浮気しているというデマを流された
	いやらしい目で見つめられた
	顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた
	手を握られた
従属変数	不快感の程度
セクハラ行為に対する不快感	0全く不快ではない
	1不快ではない

	2どちらかと言えば不快ではない
	3どちらかといえば不快
	4不快である
	5とても不快である

3.結果

3.1 平均値の比較

表3 男女別の全体的な不快感の平均値

	男性	女性
不快感の平均値	3.1	3.6

表4 項目ごとの男女別の不快感の平均値

セクハラ行為	男性の平均値	女性の平均値	全体の平均値
異性の好みを聞かれた	1.7	2.3	2.1
下ネタの冗談を聞かされた	2.2	3.4	2.9
あなたが既婚者と浮気しているというデマを流された	4.6	4.8	4.7
いやらしい目で見つめられた	3.3	3.9	3.7
顔と顔の距離が20cm	3.1	3.4	3.3

のところまで近寄られた			
手を握られた	2.9	3.0	3.0
お尻を触られた	3.8	4.3	4.1

本稿の説明変数のセクハラ行為に対する不快感を見ると、不快感の値が3以上になると不快感であると認識できる。まず、表3を見ると、男性がセクハラ行為に対する不快感の平均値が3.1であり、女性の平均値の3.6よりやや低い。次に、表4の平均値の通り、男女が共に不快感ではない行為は「異性の好みを聞かれた」ことである。そして、男性が不快ではない、女性が不快である行為は「手を握られた」ことである。残りの他のセクハラ行為のタイプでは、男女問わずその行為に対する不快感があり、しかも、男性より女性の不快感が高い。

3.2 平均値差の検定

分散分析で男女のセクハラ行為に対する不快感の平均値差を検定した結果が、下記の表5になる。表5によれば、全体的な不快感、異性の好みを聞かれた、下ネタの冗談を聞かされた、あなたが既婚者と浮気しているというデマを流された、いやらしい目で見つめられた、顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた、お尻を触られたという七つの変数の不満感の平均値差の顕著性がある。

表5 男女不快感の平均値差の分散分析

	Df	Sum Sq	Mean Sq	F value	Pr(>F)
全体的な不快感	1	292	291.5	115	<2e-16 ***
異性の好みを聞かれた	1	59	58.5	24.6	8.9e-07 ***
下ネタの冗談を聞か	1	223	222.8	97.2	<2e-16 ***

された					
あなたが既婚者と浮気しているというデマを流された	1	7.1	7.12	13.8	0.00022 ***
いやらしい目で見つめられた	1	49	49.3	30	6e-08 ***
顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた	1	14	14.39	7.03	0.0082 **
手を握られた	1	4	1.87	0.68	0.51
お尻を触られた	1	51	50.9	34.5	6.8e-09 ***

3.4 結論

以上の結果から、前述の仮説を回答できる。まず、「Q1：男女の間にセクハラ行為に対する不快感の差が存在し、しかも、男性より女性のほうがその不快感が高い。」の仮説を回答すると、男女間に全体的な不快感平均値の差は統計的な顕著性がある。その平均値は女性が男性より0.5点高い。つまり、同じセクハラ行為に対して、普通は女性が男性よりその不快感が高い。次に、「Q2：セクハラ行為のタイプによって、男女の間に不快感の違いがあり、女性が不快を感じるとしても、男性が不快ではないと感じる場合があります。」の仮説を回答すると、「異性の好みを聞かれた」から「お尻を触られた」までこの七つのセクハラ行為に対して、その不快感の平均値は全部が男性より女性の方が高い。「手を握られた」という行為を除き、他の六つの行為が統計的な顕著性がない。しかし、「異性の好みを聞かれた」の行為に対して、男性問わず3点に達していない、つまり、男女にもかかわらず「異性の好みを聞かれた」という行為がセクハラ行為とは思わない。そして、「下ネタの冗談を聞かされた」の行為

に対する不快感平均値分析の結果、女性と男性の不快感平均値の差の統計的な顕著性があり、しかも、女性の不快感平均値が3.4、男性が2.2である。つまり、「下ネタの冗談を聞かされた」というセクハラ行為を受けた場合、普通は男性が不快ではなく、女性が不快である。

4. 議論

男女間にセクハラに対する意識の格差があるから、異性間のセクハラ問題が多発する原因の一つであると考えられる。つまり、男性が自分の行動がセクハラではないと認識し、気づかないまま女性とやり取りしている一方、女性が男性の行動が不適切でセクハラと認識していることが数多く存在しているだろう。本来セクハラはジェンダーに関わらず存在すると考えられるが、男女間にセクハラ行為に対する認識の差が存在しているため、今後は、セクハラの実態についてのさらなる研究や、男性から女性に対して起こりやすいという一般認識を変容できるようなアプローチについての検討が求められる。

参考文献：

- (1) 金谷美由紀. "セクシャル・ハラスメントの認知と性役割態度の関連." 研究紀要. 人文科学・自然科学篇 46 (2005): 69-85.
- (2) 中澤、同性愛に対する意識：JGSS を用いた規定要因分析と要因分解. 日本版総合的
社会調査共同研究拠点研究論文集. 2021,19:115-126 ;
- (3) 村松泰子 2000 セクシュアル・ハラスメント 久世敏雄・齋藤耕二(監修),福富譲・
二宮克美・高木秀明・大野久・白井利明(編者)青年心理学事典福村出版
- (4) 武田悠衣, and 中田友貴. "発言者と被発言者の性別が第三者のセクシュアル・ハ

ラスメント認識に与える影響." 日本心理学会大会発表論文集 日本心理学会第 83 回
大会. 公益社団法人 日本心理学会, 2019.

同調的・感情抑制的な規範意識がセクシュアル・ハラスメント被害における不快感の感じやすさに与える影響の考察

伊庭 達哉

1. 問題設定

本稿では他者に対して同調的・感情抑制的な規範意識がセクシュアル・ハラスメント被害における不快感の感じやすさに与える影響を考察する。

性被害では被害者が被害を過小に評価し、拒否の意思を示すことができないことで問題を広げてしまうことが多い。もちろん、そこには社会の抱えるジェンダー秩序の不均衡が深く関わっている。

小西らが1999年に実施した「大学生の性被害に関する調査報告 - 警察への通報および求められる援助の分析を中心に - 」では、ほとんどの性被害が通報されておらず、「大したことではないと思ったから」と「通報しても仕方がないと思ったから」といった理由が最も多かった(小西ほか2000)。被害者が被害を過小に評価する心理が事件の発覚を妨げているのである。

牟田和恵は、嫌がっていることに加害者が気づかない事例が多いことを指摘し、その原因として、以下の理由を指摘している。

- ・断ることで起こる報復を恐れている。
- ・沈黙で拒否の意思を表そうとしている。
- ・重要な人間関係だからこその信頼からセクハラであることを認識できない。
- ・相手のことを配慮しながら、ことをうまく収めようとしている。

そして牟田はマッキノンを引用しながら(MacKinnon 1979)、女性が拒否の意思をはっきりと示すことができないのは、女性が置かれた社会状況の反映であり、また、男性が加害に鈍感なのは、女性蔑視が構造的に組み込まれているからだと述べる。加害者の地位の高さや被害者の加害者に対する信頼などの権力差が性被害の誘因になるのである。

牟田は、セクハラがしばしば、被害者自身、被害を受けている最中はセクハラかどうか判断ができず、事後的に被害を受けていたことに気づくというグレーゾーンのケースを強調している。被害者の加害者への親しみや尊敬の念が被害感情を鈍らせる。そうしたケースでは加害がエスカレートしたり、加害者に幻滅するなどのきっかけを経て被害を認識し、問題が顕在化する可能性が大いにあるのだという。

被害者が不快感を感じられない・感じることを抑制してしまうことが被害を大きくする。そしてそこには被害者自身の持つ不快感を感じにくい習慣・気質(ジェンダー秩序の影響を強く受ける)、加害者との信頼関係の強さが深く関わっている。

齋藤梓と大竹裕子は「望まない性交」において、「エントラップメント型」が最も典型的にみられるプロセスだと指摘している。「エントラップメント型」では、加害者は普通の会話の中で上下関係を作り出し、逆らうことができない状態に追い込んだ後、逃げ道を遮断して性交を強要している。元々顔見知りで上下関係がある場合に限らず、社会的な上下関係がない、一見すると対等な関係でも、加害者は日ごろから被害者を下に見る言動をされて上下関係を作り上げられて性暴力加害に及ぶ場合もある。性暴力加害の前の段階で、日常会話の中に「彼氏いるの?」といったプライベートな領域の質問や、「セックスさせろ」といった性的な要求を挟みこむ場合が多く見られるという。加害者が自分の地位の高さ、被害者の自分への信頼や尊敬、好意を利用して上下関係を作り上げる過程で、セクハラ・モラハラが行われている。セクハラ・モラハラを断れない関係が常態化したところで性暴力に及ぶのである。こうした性暴力の

前段階に上下関係を作り上げる過程で行われる加害者の行動を齋藤らは「予兆的行動」と呼んでいる。

本稿では、不快感の感じづらさをジェンダー・被害者の規範意識や習慣などから分析していく。

2. 使用データ

使用したデータは京都大学を中心に大学生を対象に行われた質問紙調査「セクハラ調査 2022」である。サンプルサイズは 329 である。

2.1 従属変数

従属変数はヴィネットに対する六点尺度の回答を、"1 とても不快であるを 5、"2 不快であるを 4、"3 どちらかといえば不快を 3、"4 どちらかといえば不快ではないを 2、"5 不快ではないを 1、"6 まったく不快ではないを 0 と割り当てて、使用した。

2.2 独立変数

ヴィネットの因子変数から以下のものを使用し、独立変数とした。

- ・ close 加害者と親しい場合は 1、あまり親しくない場合は 0 を取るダミー変数。
- ・ sex.offender 加害者の性別が男の場合は 1、女の場合は 0 を取るダミー変数。
- ・ status 加害者の地位が同級生の場合を基準カテゴリとした。同級生以外の因子は、35 歳非常勤講師、55 歳非常勤講師、35 歳教授、55 歳教授の四つ。

また、本研究では、質問紙から以下の質問項目を使用した。

一つ目は、「次のような意見についてどう思いますか。選択肢の中から一番あなたの考えに近いものを選んでください。」という質問項目(以下「問4」とする)で、以下の五項目について"1 そう思う"、"2 どちらかといえばそう思う"、"3 どちらかといえばそう思わない"、"4 そう思わない"の四点尺度で回答が設定されている。

[不快感が顔に出ないように気をつけるべきだ]

[不快なことや腹がたつことがあっても、目上の人には言うべきではない]

[周りの人が楽しそうにしているときは、自分が楽しくなくても周りに合わせて楽しそうにすべきだ]

[ネガティブな感情を持たないように普段から気をつけるべきだ]

[自分自身の気持ちに正直であるべきだ]

四点尺度については、"1 そう思う"と回答した場合を3、"2 どちらかといえばそう思う"と回答した場合を2、"3 どちらかといえばそう思わない"と回答した場合を1、"4 そう思わない"と回答した場合を0と割り当てた。

二つ目は、「次のような事柄はあなたにどの程度あてはまりますか」という質問項目(以下「問5」とする)で、以下の四項目について、"1 あてはまる"、"2 ややあてはまる"、"3 ややあてはまらない"、"4 あてはまらない"の四点尺度で回答が設定されている。

[1 不快なことがあっても、自分の気持ちをうまく人に伝えられない]

[2 否定的な感情は表に出さないようにしている]

[3 カツとなってつい大きな声を出してしまうことがあることがある]

[4 気持ちが高ぶって人前で涙を流してしまうことがある]

四点尺度については、「1 あてはまる」と回答した場合を3、「2 ややあてはまる」と回答した場合を2、「3 ややあてはまらない」と回答した場合を1、「4 あてはまらない」と回答した場合を0と割り当てた。

3. 分析結果

3.1 被害の感じやすさについての規範意識や習慣の男女の平均値比較

「問4」「問5」の各項目について男女で平均値の差を検定した。エラーバーは95%信頼区間である。

問4の男女の平均値比較

図 1-4-1 不快感が顔に出る

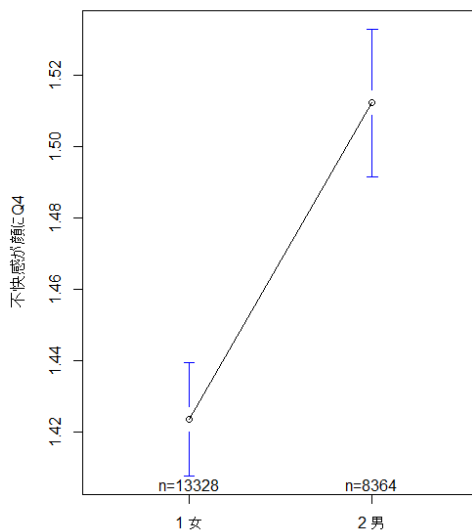
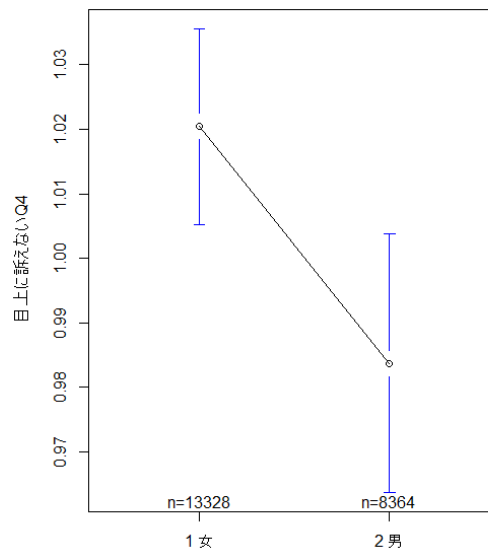
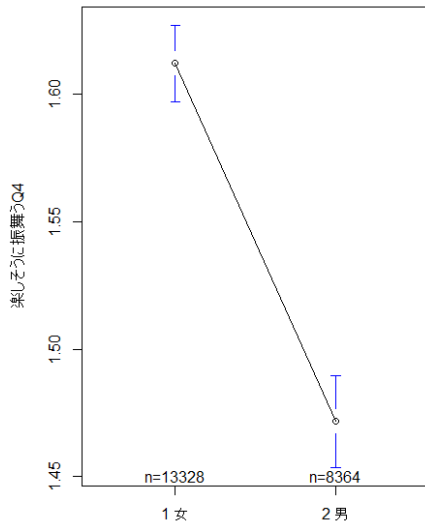


図 1-4-2 目上に訴えない

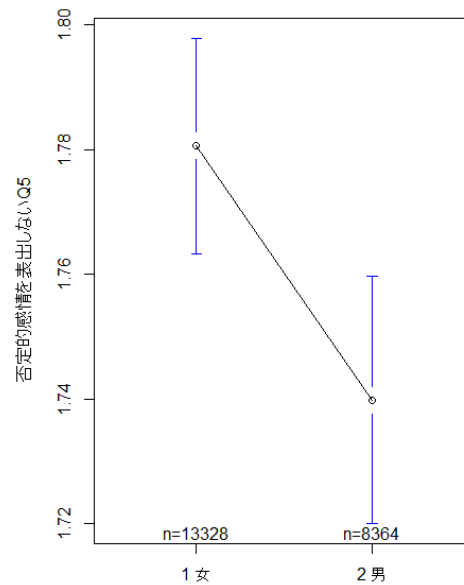
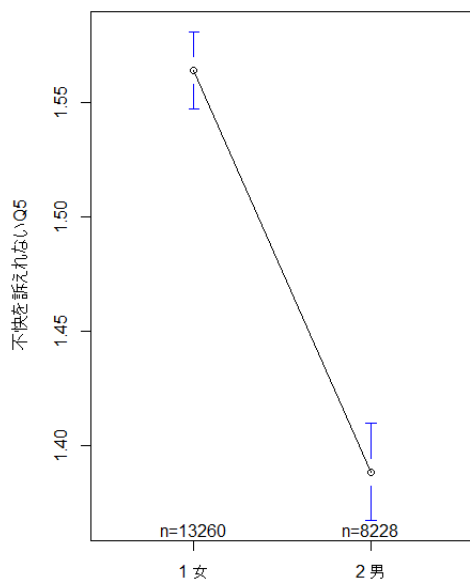




問5の男女の平均値比較

図 1-5-1 不快感を訴えない

図 1-5-2 否定的感情を表出しない



問4については、[不快感が顔に出ないように気をつけるべきだ]については有意に男性の方が高く、[不快なことや腹がたつことがあっても、目上の人には言うべきではない]、[周りの人が楽しそうにしているときは、自分が楽しくなくても周りに合わせて

楽しそうにすべきだ]、[ネガティブな感情を持たないように普段から気をつけるべきだ]については有意に女性の方が高い結果となった。[自分自身の気持ちに正直であるべきだ]については有意な差は認めることができなかった。

問5については、[3 カツとなってつい大きな声を出してしまうことがあることがある]については、有意に男性の方が高く、[1 不快なことがあっても、自分の気持ちをうまく人に伝えられない]、[2 否定的な感情は表に出さないようにしている]、[4 気持ちが高ぶって人前で涙を流してしまうことがある]については有意に女性の方が高い結果となった。

3.2 被害の不快感についての回帰分析

表1. 被害の不快感についての回帰分析の結果

	モデル1	モデル2 女	モデル2 男
(Intercept)	2.66 *** (0.12)	3.03 *** (0.14)	2.38 *** (0.20)
親しい	-0.57 *** (0.04)	-0.58 *** (0.05)	-0.57 *** (0.07)
加害者ダミー	0.83 *** (0.04)	1.08 *** (0.05)	0.43 *** (0.07)
35歳教授ダミー	0.66 *** (0.06)	0.57 *** (0.08)	0.80 *** (0.11)
35歳非常勤ダミー	0.63 *** (0.06)	0.59 *** (0.08)	0.71 *** (0.11)
55歳教授ダミー	0.94 *** (0.06)	0.80 *** (0.08)	1.16 *** (0.11)
55歳非常勤ダミー	0.92 *** (0.06)	0.84 *** (0.08)	1.06 *** (0.11)
不快感が顔に Q4	-0.08 **	-0.08 **	0.04

	(0.03)	(0.03)	(0.04)
目上に訴えない Q4	0.05	0.07 *	0.03
	(0.03)	(0.03)	(0.04)
楽しそうに	-0.11 ***	-0.13 ***	-0.16 **
振舞う Q4	(0.03)	(0.03)	(0.05)
否定的感情を	0.01	0.02	0.02
抑制 Q4	(0.02)	(0.03)	(0.04)
気持ちに正直 Q4	0.02	0.04	0.00
	(0.03)	(0.04)	(0.06)
不快を	0.15 ***	0.12 ***	0.10 *
訴えれない Q5	(0.02)	(0.03)	(0.04)
否定的感情を	-0.09 ***	-0.09 **	-0.10 *
表出しない Q5	(0.02)	(0.03)	(0.05)
カッとなる Q5	-0.09 ***	-0.10 ***	0.02
	(0.02)	(0.03)	(0.04)
涙を流す Q5	0.10 ***	-0.06 *	0.11 **
	(0.02)	(0.02)	(0.04)

R ²	0.16	0.21	0.12
Adj. R ²	0.16	0.21	0.11
Num. obs.	5368	3287	2013

=====
 *** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

加害者が親しいことが不快感に対して負の効果を持ち、同級生よりも教授や非常勤講師の方が明確に有意に正の効果を持っていた。

男女差が顕著にみられたのは三つの項目で、[不快感が顔に出ないように気をつけるべきだ]、[4 気持ちが高ぶって人前で涙を流してしまうことがある]については、女性は負の効果、男性は性の効果を有意に持っていた。 [3 カッとなってつい大きな声

を出してしまうことがあることがある]も男性は有意な効果が見られないのに対し、女性が有意に負の効果を持っていた。

[周りの人が楽しそうにしているときは、自分が楽しくなくても周りに合わせて楽しそうにすべきだ]、[2 否定的な感情は表に出さないようにしている]が男女ともに負の効果を持っていた。

4. まとめ

問4の男女間での平均値の比較について、[不快感が顔に出ないよう気をつけるべきだ]については男性の我慢強さを尊ぶ家父長制的な規範の影響が伺える。また、[不快なことや腹がたつことがあっても、目上の人には言うべきではない]、[周りの人が楽しそうにしているときは、自分が楽しくなくても周りに合わせて楽しそうにすべきだ]については、女性が相手のことを配慮しながら、ことをうまく収めようとしてしまうような構造が社会に埋め込まれているという牟田の指摘を支持する結果となった。[ネガティブな感情を持たないように普段から気をつけるべきだ]については女性が感情労働を求められがちな社会の状況を反映したものとみることができるかもしれない。

問5の男女間での平均値についても、牟田の指摘するような女性は自分が相手のことを配慮しながらことをうまく収めようとする傾向が反映されている。[3 カットとなつてつい大きな声を出してしまうことがあることがある]は男性の方が有意に高いが、カットとなって大きな声を出すというのはモラハラに繋がりがねない行動である。齋藤らはセクハラ・モラハラなどの「予兆的行動」から上下関係を作り上げたうえで性暴力加害が発生すると分析しているが、男性の方が加害リスクが高いことを示す結果であ

ろう。男性が自らの権力を利用した加害に鈍感な傾向があるという牟田の指摘を裏付ける結果となった。

加害者が親しいことが不快感に対して負の効果を持つという結果は、牟田や齋藤らの加害者に対する信頼が被害を認識させづらくするという指摘を支持する結果となった。同級生よりも教授や非常勤講師の方が明確に有意に正の効果を持っているのも、調査に回答した対象者が大学生であり、教授や非常勤よりも同級生の方が身近で親しい存在として想像しやすかったからではないかと考えることができる。

[周りの人が楽しそうにしているときは、自分が楽しくなくても周りに合わせて楽しそうにすべきだ]、[2 否定的な感情は表に出さないようにしている]が男女ともに負の効果を持った。この二つは女性の方が有意に平均値が高く、女性が相手のことを配慮しながら、ことをうまく収めようとする傾向が強く、しばしば被害の認識ができないことがあるという牟田の指摘を裏付ける結果となった。

[不快感が顔に出ないよう気をつけるべきだ]については、女性は負の効果、男性は性の効果を有意に持つという、男女で不快感に対して現れる影響が全く逆の結果となった。この調査だけでは判断できないが、[不快なことや腹がたつことがあっても、目上の人には言うべきではない]、[周りの人が楽しそうにしているときは、自分が楽しくなくても周りに合わせて楽しそうにすべきだ]、[ネガティブな感情を持たないように普段から気をつけるべきだ]の三項目は女性の方が平均値が有意に高かったのに対し、[不快感が顔に出ないよう気をつけるべきだ]の項目だけ男性の方が有意に高い結果になったことと合わせて検討する必要があるかもしれない。

[3 カッとなってつい大きな声を出してしまうことがあることがある]も男性は有意な効果が見られないのに対し、女性が有意に負の効果を持っており、男性の方が平均値が有意に高かったことと相関があるのかもしれない。男性優位の社会構造が影響している可能性がある。さらなる調査と研究が待たれる。

文献

小西吉呂・名嘉 幸一・和氣則江・石津宏, 2000, 「大学生の性被害に関する調査報告——警察への通報および求められる援助の分析を中心に」『こころの健康』15(2): 62-71.

牟田和恵, 2013, 『部長、その恋愛はセクハラです!』集英社.

齋藤梓・大竹裕子編著, 2020, 『性暴力被害の実際——被害はどのように起き、どう回復するのか』金剛出版.

MacKinnon, Catharine A, 1979, *Sexual Harassment of Working Women: A Case of Sex Discrimination*, New Haven, CT: Yale University Press.

下ネタに対する認識の違い

梶野 寿太郎

1. 導入

1-1. 背景

近年、「セクハラ」という言葉が話題になることが多い。映画プロデューサーのハーヴェイ・ワインスタインによるセクハラ(セクシュアルハラスメント)に端を発し、世界中で女性への性暴力への抗議活動である「#MeToo」運動が起こった。日本においても、政治家や経営者のセクハラが後を絶たない。これは、教育機関である大学でも例外ではない。断りにくさを利用した教員と学生間だけでなく、学生間でも「キャンパス・セクハラ」が起きている(三成 2019)。セクハラは決して許されることのない人権侵害であり、解決することは重要な社会課題であるといえる。しかし、セクシュアルハラスメントは親しい間柄で個人的に交わされるコミュニケーションの一形態にすぎないと認識している人が多いのが事実である(佐々木 2018)。特に、主に言動によるもの(ここでは、下ネタ)はセクハラとしての認識が希薄であるように感じる。これは、芸能人やインフルエンサーなどの影響力がある人がテレビや YouTube でそういった発言をしていることや、飲み会や同性同士の会話では話題の一つとして捉えられていることが原因であると推測できる。

本稿では、他のセクハラタイプと比べて「下ネタによるセクハラ」(以下、単に「下ネタ」と記載)がどの程度不快感を高めるのか、また、加害者や被害者の性別によりどのように認識が変化するかについて検討する。そして、「下ネタ」はセクハラの一つ

であるという言説を広く流布し、セクハラ防止につなげることを目的とする。

ここで、「下ネタ」という言葉を用いているが、厳密に定義があるわけではないので、便宜上、「排泄・性的な話題」としておく。本質問紙調査では、「下ネタの冗談」という記述があるので、発言者の意図としては笑いを誘うものであったということに注意しておきたい。

1-2. 仮説

以上のことから、本稿では、次のような仮説を立てる。

- ①「下ネタ」は他のタイプのセクハラに比べて不快感が低い。
- ②セクハラタイプが「下ネタ」の時、被害者(回答者)が女性より男性の方が、不快感は低くなる。
- ③セクハラタイプが「下ネタ」の時、異性同士より同性同士の方が、不快感は低くなる。

2. 方法

2-1. データの処理

本研究では、まず、元のデータを、不快感を従属変数とするロングフォーマットに変換した。次に、選択肢のうち、「1 とても不快である」には5、「2 不快である」には4、「3 どちらかといえば不快」には3、「4 どちらかといえば不快ではない」には2、「5 不快ではない」には1、「6 まったく不快ではない」には0を割り当てた。これにより、不快感に関して数値による評価を可能とした。セクハラタイプ(type)は「下ネタの冗談を聞かされた」、「あなたが既婚者と浮気しているというデマを流された」、「顔と顔の距離が20 cmのところまで近寄られた」、「手を握られた」、「お尻を触られた」、「異性の好みを聞かれた」の7つであるが、それぞれ、「下ネタ」、「浮気デマ」、「いやらしい目」、「顔20 cm」、「手握られ」、「お尻」、「異性好み」と表した。

2-2. 質問項目

他のセクハラタイプと比較するため、不快度を尋ねるすべての質問項目を用いた。被害者(回答者)の性別に関しては、「Q1 あなたの性別は？」に対する結果、「1 女」、または、「2 男」を用いた。また、性別間の違いを検討するため、回答者の性別が「その他」である回答は除外した。

2-3. 分析方法

以上のデータ処理の後、①に対しては、セクハラタイプ別の平均不快度の比較を行った。②に対しては、被害者の男女別でマルチレベル・モデルによる推定を行った。また、係数の差の検定も実行した。さらに、③では、②で用いたモデルを加害者の性別で分けることで、「女性から女性へのセクハラ(女→女)」、「男性から女性へのセクハラ(男→女)」、「男性から男性へのセクハラ(男→男)」、「女性から男性へのセクハラ(女→男)」の4つのモデルをこちらも、マルチレベル・モデルで推定した。

3. 結果

セクハラタイプ別の平均不快度は図1の通りである。図1によると、セクハラタイプにより平均不快度に違いがあることが分かる。「浮気デマ」が非常に平均不快度の高いものになっているが、これは、セクハラ以上に倫理的問題が介在していることによる可能性がある。「お尻」は、体の接触を伴うため、セクハラとしての認識が強く、抵抗感がある人が多いようである。一方、「下ネタ」に関しては、相対的には平均不快度は低いということが分かる。

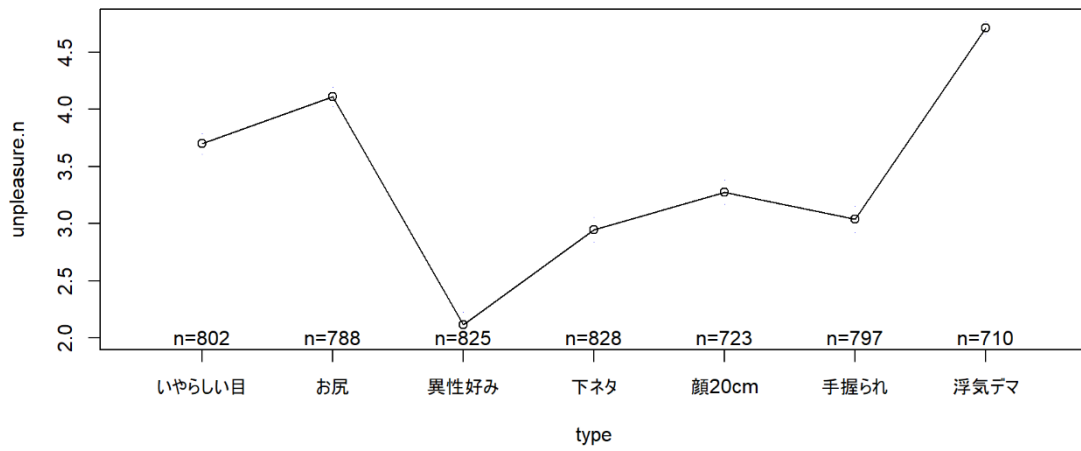


図 1: タイプ別の平均不快感

続いて、表 1 は被害者の性別ごとのマルチレベル・モデルによる推定である。

表1: 回帰分析(マルチレベル・モデル)

	女	男
(Intercept)	2.30 ^{***} (0.07)	1.75 ^{***} (0.09)
type下ネタ	1.09 ^{***} (0.08)	0.47 ^{***} (0.10)
type浮気デマ	2.55 ^{***} (0.08)	2.81 ^{***} (0.11)
typeいやらしい目	1.64 ^{***} (0.08)	1.60 ^{***} (0.10)
type顔20cm	1.12 ^{***} (0.08)	1.31 ^{***} (0.10)
type手握られ	0.79 ^{***} (0.08)	1.06 ^{***} (0.10)
typeお尻	2.03 ^{***} (0.08)	1.93 ^{***} (0.10)
Num. obs.	3321	2084
Num. groups: id	196	124
Var: id (Intercept)	0.36	0.47
Var: Residual	1.48	1.54

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

「下ネタ」だけでなく全体として、被害者が女性の方が平均不快感は有意に高くなる
 ことが分かる。また、係数の差については表2で示す。

	differences of coefficients	z.values	p.values	sig
(Intercept)	0.553	4.692	0.000	***
type下ネタ	0.625	4.923	0.000	***
type浮気デマ	-0.260	-1.945	0.052	
typeいやらしい目	0.035	0.272	0.786	
type顔20cm	-0.187	-1.432	0.152	
type手握られ	-0.263	-2.022	0.043	*
typeお尻	0.095	0.729	0.466	

「下ネタ」の場合、女性の場合の係数(1.09)と男性の場合の係数(0.47)の差(0.625)は有意であった。この結果から、仮説②の被害者(回答者)が女性より男性の方が、不快度は低くなるということが示された。

続いて表3は、被害者と加害者の性別により分けられたモデルのマルチレベル・モデルによる推定である。

表3: 回帰分析(マルチレベル・モデル)

	女→女	男→女	男→男	女→男
(Intercept)	1.69 ^{***} (0.09)	2.93 ^{***} (0.07)	1.79 ^{***} (0.11)	1.67 ^{***} (0.12)
type下ネタ	1.20 ^{***} (0.11)	1.00 ^{***} (0.08)	0.30 [*] (0.13)	0.71 ^{***} (0.14)
type浮気デマ	3.10 ^{***} (0.12)	1.86 ^{***} (0.08)	2.70 ^{***} (0.14)	2.89 ^{***} (0.16)
typeいやらしい目	1.95 ^{***} (0.11)	1.28 ^{***} (0.08)	1.98 ^{***} (0.14)	1.25 ^{***} (0.14)
type顔20cm	1.00 ^{***} (0.11)	1.08 ^{***} (0.08)	1.56 ^{***} (0.14)	1.04 ^{***} (0.15)
type手握られ	0.44 ^{***} (0.11)	1.14 ^{***} (0.08)	1.34 ^{***} (0.14)	0.85 ^{***} (0.15)
typeお尻	2.11 ^{***} (0.11)	1.88 ^{***} (0.08)	2.14 ^{***} (0.14)	1.75 ^{***} (0.15)
Num. obs.	1594	1727	1096	988
Num. groups: id	196	196	124	124
Var: id (Intercept)	0.56	0.29	0.45	0.55
Var: Residual	1.33	0.84	1.41	1.51

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

非常にばらつきのある結果となった。全体としては、不快度が高い方から、「男→女」、「男→男」、「女→女」、「女→男」となった。また、「下ネタ」の場合、「女→女」、「男→女」、「女→男」、「男→男」となった。「男→男」の場合のみ、極めて平均不快度

が低くなることから、男性間では、下ネタが話題の一つとして捉えているということは支持されそうである。しかし、その他の結果については、仮説③と適合的ではない部分が多い。

4. 考察

以上のような分析を全面的に信頼することはできない。回答者のほとんどが京大生であったからである。教養を持つ人が多いことから、セクハラへの認識にも影響できそうである。また、母集団が小さいこともあげられる。より詳細に分析するためには、さらなるサンプル数が必要であろう。

しかし、これらの結果から、仮説の①と②はおおよそ支持されることが分かった。また、③については、必ずしも適合的ではないことが分かった。特に、「女→女」の場合が一番、「下ネタ」に対する不快感が高かったことは意外であった。女性の場合は、話題の一つという認識は特にないということから、同性間でも不快感が高くなっているのであろうか。これについては、新たな調査が必要である。

「下ネタ」への不快感は単純なものではなく、加害者の地位や親しさにも影響できそうである。さらに、ここでは、話題の一つとしての下ネタを想定していたが、どんな関係性でも話題になりえるはずはなく、さらに多様な要素を考慮する必要があるそうである。そもそも、セクハラ自体が多く要素が絡み合って不快感に影響を与えているわけであり、重要なのは自身の言動が不快感を与えうるのだという視点を常にもつことである。「無知や想像力の欠如」(牟田 2013)をなくすためにも、セクハラに関する情報は多く流布されるべきである。セクハラに対する認識が深まり、不快感を感じたり、不利益を被ることがない社会の実現は今後の課題である。

文献

三成美保・笹沼朋子・立石直子・谷田川知恵, 2019, 『ジェンダー法学入門第 3 版』

法律文化社.

牟田和恵, 2013, 『部長, その恋愛はセクハラです!』 集英社.

佐々木恵理, 2018, 「「セクハラ」をめぐる言説を再考する：ことばの歪みの源泉をたどる」『ことば』 39, 17-35.

旧帝大とその他の大学によるセクハラを受け取り方の違いについて

佐藤 珠希

1 はじめに

現在、「セクハラ」という言葉自体は世に広く浸透している。厚生労働省は、職場におけるセクシャルハラスメントを「『職場』において行われる『労働者』の意に反する『性的な言動』により、労働者が労働条件について不利益を受けたり、就業環境が害されること」と定義づけている。しかし、その言葉の広まりに対し、セクハラ判断基準は不明確である。その一因として、セクハラと判断するかどうかが行為を受けた者の主観によって左右されることが挙げられる。京都大学は、被害を受ける者の性的指向や性自認にかかわらず、相手を不快にさせる性的な言動であれば対象となり得る、と述べており、被害者が不快だと思えばそれはセクハラとなりうるのである。

それでは、どういった人がよりセクハラをセクハラと認識することができるのだろうか。その答えの1つとして、セクハラに対する知識が挙げられる。セクハラについての知識がない子供が、自身が受けている行いをセクハラと気づけないように、セクハラに対する知識が十分でない人は、セクハラをセクハラと認識することができない。

では、私たちはどこでセクハラについての知識を得ることができるだろうか。教育機関や職場などでセクハラについて学ぶこともあるだろうが、1つの事例として、全国ダイバーシティネットワークを挙げる。全国ダイバーシティネットワークは、ダイバーシティ促進を目的として、2018年に設立された。全国の185機関が参画

しており、旧帝大7大学を含む24大学が幹事大学を務めている。その取り組みの一例として、ハラスメントセミナーなどがある。よって、旧帝大のような学歴の高い大学のほうが、よりハラスメントに対する意識が高く、講義やセミナーなどセクハラについての知識を与える場を提供していると考えられる。

そこで、本レポートでは、回答者を旧帝大生とその他の大学に分類し、セクハラに対する平均不快感を比較することで、セクハラ知識とセクハラ認識の関連性を調べる。この関連性が証明されれば、セクハラ知識を教えることで、より多くの人がセクハラ被害にあったときにそれをセクハラと認識し声をあげられるようになり、セクハラ被害を減らすことができるといえる。セクハラ防止につながるという点でこの調査は有意義である。

セクハラ認識について、「体を触られた」といった身体的なセクハラは明らかにセクハラと認識できる一方で、「彼氏がいるか聞かれた」といった言葉によるセクハラは、セクハラについての知識がなければそれをセクハラだと認識できない可能性がある。よって、本レポートでは以下の2つの仮説を検証する。

- ① 身体的なセクハラの場合、旧帝大生とその他の大学生の不快感は同じである
- ② 言葉によるセクハラの場合、旧帝大生のほうがその他の大学生よりも不快感が高い

2 方法

分析に使用するデータは、2022年度社会学実習の授業で実施した「セクハラ調査 2022 ABCD」である。データの概要については本レポートの与件外であるため割愛する。

それぞれの項目について回答してもらった「とても不快である」「不快である」

「どちらかといえば不快」「どちらかといえば不快ではない」「不快ではない」「全く不快ではない」について、それぞれ5～0の数値を与えた。

セクハラの種類（異性の好みを聞かれた、下ネタの冗談を聞かされた、あなたが既婚者と浮気しているというデマをながされた、いやらしい目で見つめられた、顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた、手を握られた、お尻を触られた）、親密度（親しい、親しくない）、加害者の立場（同級生、35歳の教授、35歳の非常勤講師、55歳の教授、55歳の非常勤講師）、加害者の性別（男、女）、回答者の所属大学（旧帝大、その他の大学）の5つを変数として作成した。ここで、旧帝大とは京都大学、大阪大学、東京大学、名古屋大学、北海道大学、九州大学、東北大学の7大学を指す（回答者に東北大学の学生はいなかった）。

セクハラの種類のうち、「異性の好みを聞かれた」「下ネタの冗談を聞かされた」「あなたが既婚者と浮気しているというデマをながされた」の3つを言葉によるセクハラとし、「いやらしい目で見つめられた」「顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた」「手を握られた」「お尻を触られた」の4つを身体的なセクハラとした。ここでは、自身の身体を性的に見られている可能性があるものを身体的なセクハラとしている。（以下では、それぞれの文言を省略して「異性好み」「下ネタ」「浮気デマ」「いやらしい目」「顔20cm」「手握られ」「お尻」と表記する。）

回答者329名のうち、大学名を答えていなかった39名と、外国の大学に所属していた1名を除いた289名を分析対象とした。表1は、回答者の大学と性別の分布を示す。

表1：回答者の大学と性別の分布

	旧帝大	その他の大学	合計

女	71	93	164
男	34	87	121
その他	1	3	4
合計	106	183	289

分析の手順としては、まず、セクハラの種類（7項目）による旧帝大とその他の大学の平均不快度を比較した。次に、セクハラの種類を身体的なセクハラと言葉によるセクハラの2種類に分け、旧帝大とその他の大学の平均不快度を比較した。最後に、有意差を確かめるために回帰分析を行った。

3 結果

図1は、セクハラの種類による旧帝大・その他の大学の平均不快度を示したものである。図1より、「いやらしい目」「お尻」「異性好み」「浮気デマ」は、旧帝大とその他の大学で平均不快度はほぼ変わらなかった。ただ、「下ネタ」「顔20cm」「手握られ」は、旧帝大よりもその他の大学のほうが、平均不快度が高くなっていた。

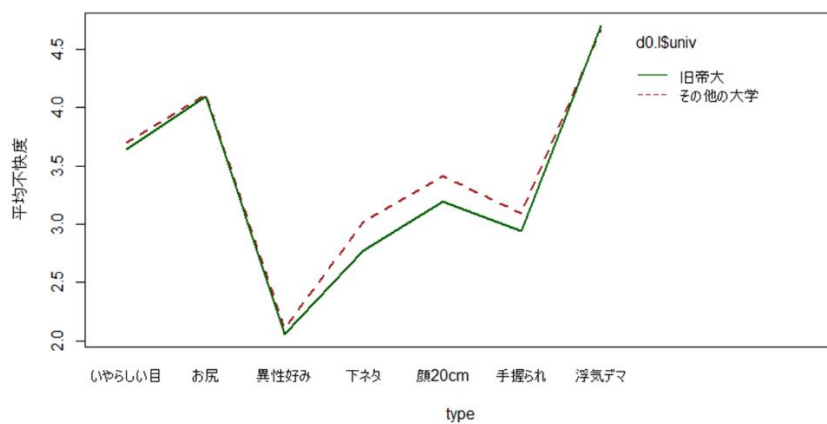


図1：セクハラの種類による旧帝大・その他の大学の平均不快度

次に、セクハラの種類7項目を、身体的なセクハラと言葉によるセクハラの2種類に分けて分析を行った。図2は、セクハラの種類による旧帝大・その他の大学の平均不快感を示す。図2より、旧帝大もその他の大学も、身体的なセクハラのほうが言葉によるセクハラよりも平均不快感が高かった。また、身体的なセクハラでも言葉によるセクハラでも、その他の大学のほうが旧帝大よりも平均不快感が高かった。

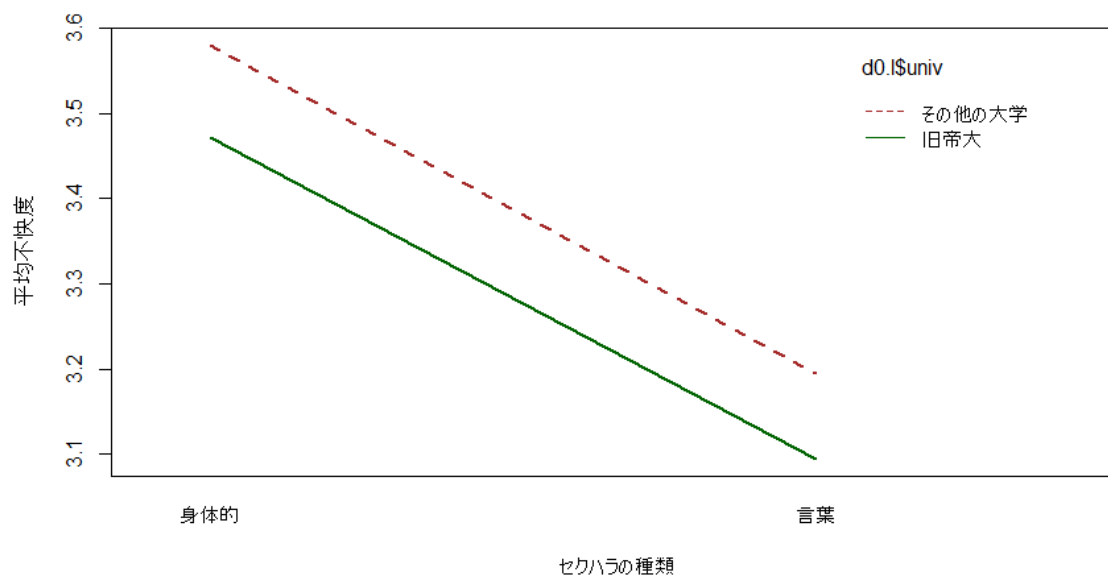


図2：セクハラの種類による旧帝大・その他の大学の平均不快感

最後に、有意差を確かめるために回帰分析を行った。表2は回帰分析の結果を示す。表2より、「35歳非常勤」「旧帝大」以外は $p < 0.001$ であったため、有意差があるといえるが、「35歳非常勤」と「旧帝大」は有意差があるとは言えない。

表2：回帰分析の結果

```

=====
                        Model 1
-----
(Intercept)           3.28 ***
                       (0.07)
close親しくない        0.49 ***
                       (0.04)
status35歳非常勤      0.05
                       (0.06)
status55歳教授        0.23 ***
                       (0.06)
status55歳非常勤      0.21 ***
                       (0.06)
status同級生          -0.68 ***
                       (0.06)
sex.offender男        0.74 ***
                       (0.04)
typeお尻              0.40 ***
                       (0.07)
type異性好み         -1.51 ***
                       (0.07)
type下ネタ           -0.73 ***
                       (0.07)
type顔20cm           -0.38 ***
                       (0.07)
type手握られ         -0.69 ***
                       (0.07)
type浮気デマ         1.01 ***
                       (0.07)
sex2 男               -0.54 ***
                       (0.04)
sex3 その他           0.53 ***
                       (0.16)
univ旧帝大           -0.02
                       (0.04)
-----
RA2                   0.38
Adj. RA2              0.38
Num. obs.             4890
=====
*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

```

4 考察

結果より、身体的なセクハラの場合も言葉によるセクハラの場合も、その他の大学の

ほうが旧帝大より平均不快感が高かった。そのため、仮説①も仮説②も支持されなかった。また、「旧帝大」の有意差があるとは言えなかったため、セクハラを感じ方に大学による差があるとは言えない。

仮説①について、身体的なセクハラはセクハラ知識を問わずセクハラと認識され、不快に感じると考えていたため、平均不快感に差が出たのが驚きだった。また、仮説②についても、仮説とは真逆に結果になってしまい驚いた。

このような結果になった理由としては、セクハラ知識量の測り方にあると考える。今回は、学歴が高い旧帝大をセクハラ知識があるとみなした。しかし、アンケートの中で「彼氏がいるか尋ねるのは、セクハラであると思いますか」といった、回答者のセクハラ知識やセクハラに対する認識を測る質問はなかった。旧帝大の中にも、文系学部から理系学部まで幅広く存在しており、旧帝大だからといってセクハラ知識があるとは言えず、逆にその他の大学だからといってセクハラ知識が少ないとは言えない。

今後の課題としては、セクハラ知識やセクハラに対する認識を測る質問をして、回答者をセクハラ知識がある群とない群に分けて分析を行うことが挙げられる。

参考文献

京都大学, 2022, 「京都大学におけるハラスメントの防止と対応について」, (2023年1月15日取得, [2204 booklet.j-5fe8ee345a7520f9c92070dce18b9fbb.pdf \(kyoto-u.ac.jp\)](https://booklet.j-5fe8ee345a7520f9c92070dce18b9fbb.pdf)).

厚生労働省, 「セクハラに関してまとめたページ」, (2023年1月15日取得, <https://kokoro.mhlw.go.jp/sexual-harassment/>).

全国ダイバーシティネットワーク, 「全国ダイバーシティネットワーク取組事例集2019」, (2023年1月15日取得, https://opened.network/wp-content/uploads/2021/03/OPENeD_initiatives2019_link.pdf).

セクシャルハラスメントの不快感と非サポート感の 関係性

三浦 よもぎ

1. はじめに

日本で初めてセクシャルハラスメントに関する民事裁判が行われたのは、1989年である。以降、セクシャルハラスメントという言葉が広く認知されるようになるとともにその対策も進んできた。これは、男女雇用機会均等法において、1997年の改正でセクシャルハラスメントに対する事業主の配慮義務が、2006年の改正で措置義務が定められたことから明白である。それと同時に、大学教育の現場においてもセクシャルハラスメントに対する対策は進んだ。京都大学においては、2005年に「京都大学におけるハラスメントの防止等に関する規定」が制定された。この第8条には「教職員及び学生等は、当該部局の相談窓口及び全学の相談窓口相談等を行うことができる」との記載がある。

なお、企業や大学においてセクシャルハラスメントへの対策が進んでいるものの、具体的に行われているのは、相談窓口の設置であることがほとんどである。確かに、相談窓口の設置は被害に遭った事後のサポートや似たような被害の再発防止になくてはならないと推察できる。一方でこの状況から考えると、相談窓口は当事者が被害に遭った後にのみ初めて機能しており、被害に遭っている最中の当事者の心理に効果的に機能するものではないのではないかという疑問が浮かぶ。また、組織以外の対応としては、家族や友人が相談を持ち掛けてきた被害者を責めるような言葉をかけるなどして、被害者をさらに傷つけるセカンドハラスメントが問題となっている。もちろ

ん、セクシャルハラスメントそのものがないのが理想の社会である。しかしその実現が難しい現状を鑑みると、相談窓口は事後対策のための組織に甘んじていてはいけな
いだろう。また、家族や友人もセカンドハラスメントを生まないことはもちろん、も
しものときに彼らの不快感を軽減できるような関係性作りをすることが必要である。

したがって本稿では、ある集団からのサポートが得られなさそうであると感じる場
合に、それを「非サポート感」と定義し、非サポート感とセクシャルハラスメントの
不快感の関係性について分析する。具体的には、「家族や友人からのサポートが得られ
ないと考えている（家族や友人の非サポート感が高い）人ほど、セクシャルハラスメ
ントに対する不快感が大きい、大学のセクシャルハラスメント相談窓口をサポート
が得られるかと不快感の間に有意な関係性はない」という仮説を立て、その真偽を明
らかにすることを試みる。同時に、この仮説について性別や大学ごとに違いはあるの
かについても検証する。これらを通して、事後対応にとどまらない効果的なセクシャ
ルハラスメント対策について考える。

2. 方法

2-1. データ

大学生を対象に実施した質問紙調査「セクハラ調査」を用いる（有効回答数 329）。

2-2. 変数

2-2-1. 従属変数

本稿では、データをロングフォーマットに変換した。また、各行為に対する回答者
の回答を、表 1 のように不快に感じているほど数値が大きくなるように変換した。そ
してこれを「不快感」(unpleasure.n) とし、従属変数とした。

表 1 不快感

変換前	変換後
1 とても不快である	5
2 不快である	4
3 どちらかといえば不快	3
4 どちらかといえば不快ではない	2
5 不快ではない	1
6 まったく不快ではない	0

2-2-2. 独立変数

独立変数としては、Q3 被害時のサポートに関する質問(もしもあなたがハラスメント被害にあったら、次の人たちの中に、あなたの話を親身に聞いたり、援助したりしてくれる人がいると思いますか)に対する回答を用いる。変数名と質問内容は表 2 に示す通りである。

表 2 変数名と質問内容

変数名	質問内容
q3x1n	あなたの家族の中
q3x2n	あなたの友人の中
q3x3n	あなたの大学の先生たちの中
q3x4n	あなたの大学のセクハラ対応窓口

また、これに対する回答は表 3 のように数値に変換した。また、これらの総称を「非サポート感」とし、各変数を独立変数として用いる。

表 3 非サポート感

変換前	変換後
1 いると思う	1
2 多分いると思う	2
3 どちらともいえない	3
4 たぶんいないと思う	4

5 いないと思う	5
----------	---

2-3. 分析方法

まず初めに、属性別の非サポート感と不快感との関係性について平均値の比較を行う。次に、これらについて重回帰分析を行う。この際、性別や大学、学年ごとにも分析を行い、効果の違いを検討する。

3. 分析結果

3-1. 平均値の比較

各変数について平均値の比較を行った結果、図1~4のようになった。

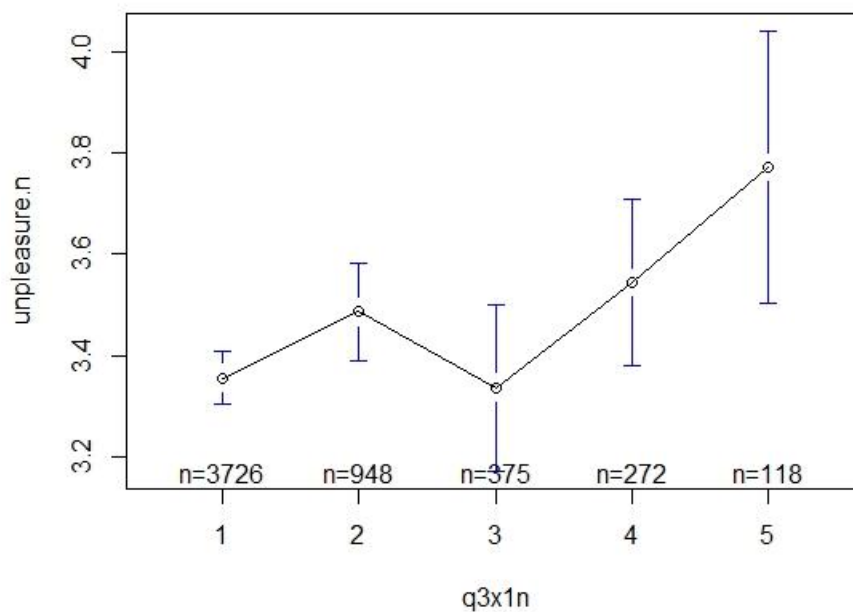


図1 家族の非サポート感と不快感

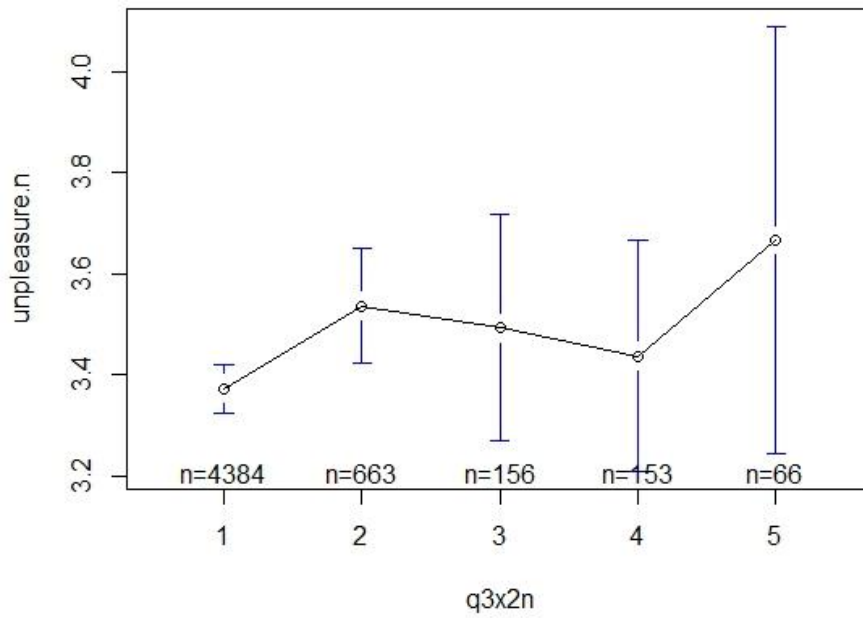
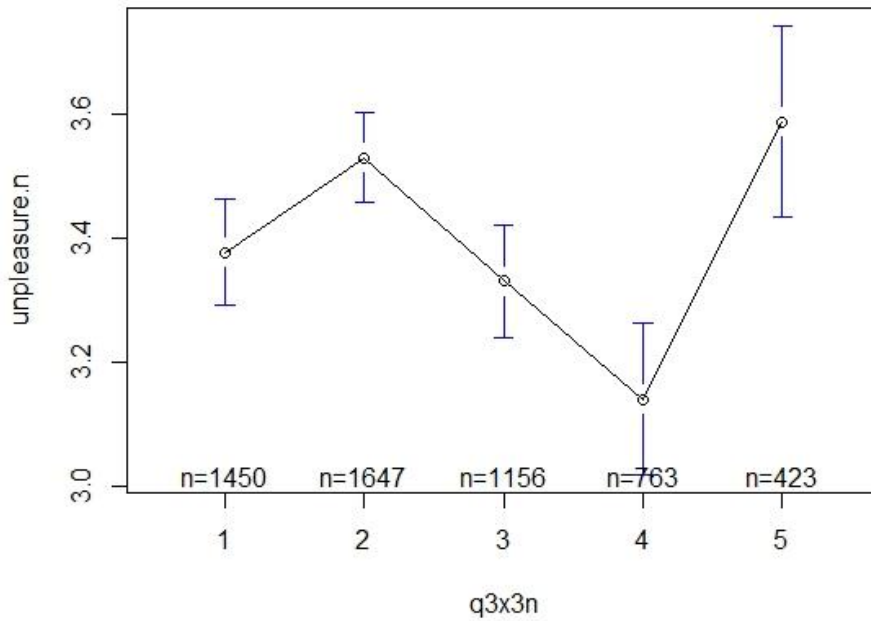


図2 友人の非サポート感と不快感

図3 大学の先生の非サポート感と不快感



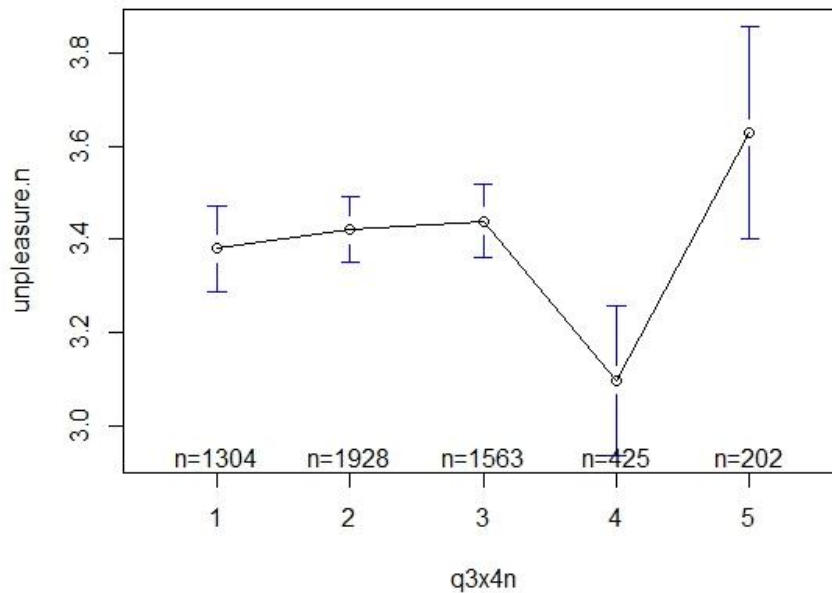


図4 大学のセクハラ対応窓口の非サポート感と不快感

以上の平均値の比較より、特に家族からのサポートがあると感じている人ほど、不快感が低く、サポートがないと感じている人ほど不快感が高い傾向にあることがわかった。一方で、大学の先生や大学のセクハラ窓口のサポートに関しては、不快感との関係性が明瞭ではない。この結果は、仮説を支持する。しかし、平均値の比較だけでは、それぞれが不快感に与える効果を比較することができない。したがって、次に重回帰分析を行う。

3-2. 重回帰分析

まずは、全体について重回帰分析を行った。その結果が表4である。これより、サポートする人の属性にかかわらず、非サポート感とセクシャルハラスメントの間には有意な関連がないことがわかった。

表4 非サポート感と不快感に関する回帰分析

	係数 (標準誤差)
(定数)	3.41*** (0.07)
q3x1n	0.05 (0.05)
q3x2n	0.03 (0.07)
q3x3n	-0.02 (0.04)
q3x4n	-0.01 (0.05)
度数	5405
ID数	320

***p<0.001; **p<0.01; *p<0.05

次に、男女別に回帰分析を行った。その結果が表5である。これより、女性においてのみ、友人からの非サポート感が高ければ高いほど、不快感も有意に高まるという結果が得られた。

表5 男女別の非サポート感と不快感に関する回帰分析

	係数 (標準誤差)	
	女	男
(定数)	3.57*** (0.08)	3.15*** (0.13)
q3x1n	-0.00 (0.06)	0.14 (0.10)
q3x2n	0.20* (0.09)	0.01 (0.10)
q3x3n	0.00 (0.05)	-0.04 (0.07)
q3x4n	-0.02 (0.06)	-0.09 (0.08)
度数	3321	2016
ID数	196	120

*** $p < 0.001$; ** $p < 0.01$; * $p < 0.05$

次に、大学別に回帰分析を行った。なお本稿では、京都大学の学生とその他の大学の学生に分類した。その結果が表6である。これより、京都大学においては、家族からの非サポート感が高ければ高いほど、不快感が有意に高まるという結果が得られた。

表6 大学別の非サポート感と不快感に関する回帰分析

	係数 (標準誤差)	
	京都大学	その他の大学
(定数)	3.25*** (0.11)	3.55*** (0.10)
q3x1n	0.19* (0.08)	-0.09 (0.07)
q3x2n	-0.07 (0.09)	0.16 (0.11)
q3x3n	-0.01 (0.06)	-0.04 (0.06)
q3x4n	-0.01 (0.07)	0.01 (0.06)
度数	2817	2588
ID数	167	153

*** $p < 0.001$; ** $p < 0.01$; * $p < 0.05$

最後に、学年別に回帰分析を行った。なお本稿では、1, 2年生、3, 4年生、聴講生など、大学院生の4つに学年を分類した。その結果が表7である。これより、学年ごとに見た場合、非サポート感と不快感に有意な関係性は見られなかった。

表7 学年別の非サポート感と不快感に関する回帰分析

	係数 (標準誤差)			
	1,2年	3,4年	研究生等	院生
(定数)	3.27*** (0.18)	3.50*** (0.10)	3.17*** (0.28)	3.30*** (0.17)
q3x1n	-0.06 (0.17)	0.09 (0.08)	0.25 (0.14)	-0.03 (0.10)
q3x2n	0.38 (0.21)	-0.04 (0.09)	-0.09 (0.13)	0.05 (0.15)
q3x3n	-0.01 (0.12)	-0.07 (0.05)	0.21 (0.14)	0.06 (0.10)
q3x4n	0.09 (0.12)	-0.03 (0.06)	0.04 (0.20)	-0.05 (0.14)
度数	1019	3132	255	999
ID数	60	186	15	59

***p<0.001; **p<0.01; *p<0.05

4. 議論

4-1. 考察

分析の結果、「家族や友人からのサポートが得られないと考えている人ほど、セクシャルハラスメントに対する不快感が大きい」が、大学のセクシャルハラスメント相談窓口でサポートが得られるかと不快感の間に有意な関係性はない」という仮説は、女性、そして京都大学の学生においては一部支持されたと言える。なお女性において友人からのサポートが得られないことが不快感に有意な影響を与えるという結果には、男子大学生の友人関係は手段的・道具的な関係性が特徴であるのに対し、女子大学生の友人関係は、自己開示や集団への所属を含んだ情緒的な関係性が特徴である（丹野

2008) ことが関係しているのではないだろうか。心の拠り所としての友人の存在が大きいため、それを頼りにできないことが潜在的にであれ不快感に影響を与えていると考えられる。

一方、大学別に分析した結果、京都大学の学生においてのみ、家族からの非サポート感と不快感の間に有意な関係がある背景については疑問が残る。先ほどの女性における友人での議論を適用すると、京都大学の学生にとって家族が拠り所となっていることも考えられるが、これを明らかにするにはさらなる調査が必要だろう。

4-2. まとめ

本稿の分析を通して、逆説的にはなるが、被害に遭っている最中の当事者心理に対するセクシャルハラスメントの対応窓口の相対的な効果の低さが示された。したがって今後は、事後対応にとどまらず、日常的な信頼関係の構築し、それを認識させるための活動を行うことが必要であると考えられる。また、女性や京都大学の学生などの結果を鑑みると、家族や友人間においても日頃からサポートしあう関係性を構築し、それをお互いに認識することこそが、いざというときに不快感を軽減する有効な対策となり得るといえる。

文献

株式会社リベルタス・コンサルティング、「『大学教育改革の実態把握及び分析等に関する調査研究』～大学におけるハラスメント対応の現状と課題に関する調査研究～」

https://www.mext.go.jp/content/20200915-mxt_gaigakuc3-000009913_1.pdf

(2023年1月17日)

京都大学、「京都大学におけるハラスメントの防止等に関する規定」

https://www.kyoto-u.ac.jp/uni_int/kitei/reiki_honbun/w002RG00000993.html

(2023年1月17日)

丹野宏昭、「大学生の内的適応に果たす友人関係機能」、『青年心理学研究』第20巻、
2008年、55-69頁

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsyap/20/0/20_KJ00008133572/_pdf

(2023年1月17日)

東京海上日動リスクコンサルティング株式会社、「職場のハラスメントに関する実態調査報告書（概要版）」

<https://www.mhlw.go.jp/content/11200000/000783140.pdf>

(2023年1月17日)

セクハラ加害者・被害者の性別による不快感の違い

緒方 初芽

1. はじめに

1-1. 問題意識

近年、社会全体においてセクハラへの意識は高まっている。「セクハラ」と聞くと男性から女性への性的なからかいなどが想起されやすく、実際に女性の方が被害を受けやすい傾向にある。平成 19 年度から 26 年度の都道府県労働局雇用均等室に寄せられたセクハラ相談件数のうち過半数は女性労働者からの相談である(男女共同参画局, 2015)ほか、2020 年に実施された調査でも、過去 3 年間の勤務中にセクハラを受けた女性の割合は男性よりも高かった(厚生労働省, 2021)。しかし、セクハラは加害者・被害者ともに性別が限定されるものではない。厚生労働省は、セクハラについて「男性も女性も行為者になり得るほか、異性に対するものだけでなく、同性に対するものも該当します」(厚生労働省ホームページ)と明記しており、男性から女性への場合のみならずさまざまな性別の組み合わせを想定して理解を深める必要がある。そこで本稿では、セクハラ加害者・被害者の性別による不快感の違いについて検討する。これにより、全ての人々が関わり得る社会問題としてのセクハラを多角的に理解したい。

1-2. 仮説

本稿では、回帰分析を用いて以下の 2 つの仮説を検証する。

仮説 1：同性間のセクハラの場合、身体接触・接近を伴うものは女性同士よりも男性同士の方が不快感が高いが、伴わないものは男女差がない。

仮説 2：異性間のセクハラの場合、身体接触の有無にかかわらず、女性から男性へのセ

クハラよりも男性から女性へのセクハラの方が不快感が高い。

仮説1を立てた理由としては、同性同士の身体接触に対する抵抗感の男女差が挙げられる。女性は男性に比べて同性間での身体接触に不快感や抵抗感を持たない(羽成他, 2015)ため、セクハラにおいても同様の結果が得られるのではないかと考えた。

仮説2に関しては、前述のとおり男性より女性の方が被害を受けやすい傾向にあるため、女性の方がセクハラ行為に対して敏感に反応し、より強い不快感を示すのではないかと考えた。また、社会的地位や身体面における一般的な男女差を踏まえると、加害者が女性の場合より男性の場合の方が抵抗しにくいいため、不快感が強まると考えてこのような仮説を設定した。

2. 方法

2-1. データの処理

はじめに、大学生(大学院生、聴講生・研究生を含む)を対象とした調査であるため、Q2で「大学生ではない」を選択した回答は除外した。また、「Q1 あなたの性別は？」について、「3 その他」を選択した回答を分析対象から除外した。これは、後述するセクハラ加害者・被害者の性別の組み合わせを単純化するためである。よって、分析対象となる回答数は男性124、女性196、合計320件である。

また、セクハラの不快感を尋ねるa1からd17までの質問項目においては、セクハラ加害者の性別、セクハラの種類についての因子変数をそれぞれ作成した。セクハラ加害者の性別は「男」、「女」の2種類である。セクハラの種類は、以下の通りである。

- ・手を握られた
- ・お尻を触られた

- ・顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られた
- ・あなたが既婚者と浮気しているというデマを流された
- ・下ネタの冗談を聞かされた
- ・いやらしい目で見つめられた
- ・異性の好みを聞かれた

これらを、「手握られ」「お尻」「顔 20cm」「浮気デマ」「下ネタ」「いやらしい目」「異性好み」として処理した。この項目の回答については、不快度が高いほど度数が高くなるように数値化した。具体的には、「1 とても不快である」は 5、「2 不快である」は 4、「3 どちらかといえば不快」は 3、「4 どちらか といえば不快ではない」は 2、「5 不快ではない」は 1、「6 まったく不快ではない」は 0 として処理している。

さらに、セクハラ加害者・被害者の性別の組み合わせによる不快度の違いを検討するため、a1 から d17 までの 68 項目におけるセクハラ加害者の性別と回答者の性別を組み合わせた因子変数を作成し、「女から女」「男から女」「女から男」「男から男」と分類した。

2-2. 分析方法

今回の分析では、加害者・回答者の性別組み合わせごとに、セクハラの種類を独立変数、不快度を従属変数とした回帰モデル 1~4（表 1 参照）を作成した。モデル 1 から順に「女から女」、「男から男」、「男から女」、「女から男」の回答になっている。同性間のセクハラであるモデル 1 と 2、異性間のセクハラであるモデル 3 と 4 において回帰係数をそれぞれ比較することにより、前述の仮説の検証を行う。

表1 モデル1～4の回帰分析の結果

	Model 1	Model 2	Model 3	Model 4
(Intercept)	3.63 *** (0.09)	3.76 *** (0.11)	4.22*** (0.07)	2.87*** (0.12)
typeお尻	0.16 (0.13)	0.20 (0.15)	0.60*** (0.10)	0.62*** (0.17)
type異性好み	-1.91*** (0.12)	-1.99*** (0.15)	-1.27*** (0.10)	-1.15*** (0.16)
type下ネタ	-0.77*** (0.13)	-1.67*** (0.15)	-0.28** (0.10)	-0.58*** (0.16)
type顔20cm	-0.95*** (0.13)	-0.40* (0.16)	-0.20* (0.10)	-0.24 (0.17)
type手握られ	-1.48*** (0.13)	-0.60*** (0.16)	-0.17 (0.10)	-0.24 (0.17)
type浮気デマ	1.17*** (0.13)	0.71*** (0.15)	0.61*** (0.10)	1.76*** (0.18)
R ²	0.33	0.32	0.24	0.25
Adj. R ²	0.32	0.31	0.24	0.24
Num.obs.	1594	1096	1727	988

***p<0.001; **p<0.01; *p<0.05

3. 分析結果

まずは、同性間のモデルについて検証する。表2は、モデル1とモデル2の回帰係数の比較結果である。

表2 モデル1・2の回帰係数の比較結果

	differences of coefficients	z.values	p.values	sig
(Intercept)	-0.138	-0.978	0.328	
typeお尻	-0.035	-0.174	0.861	
type異性好み	0.087	0.443	0.658	
type下ネタ	0.904	4.559	0.000	***
type顔20cm	-0.550	-2.693	0.007	**
type手握られ	-0.884	-4.415	0.000	***
type浮気デマ	0.463	2.273	0.023	*

表2より、「下ネタ」、「浮気デマ」は「男から男」よりも「女から女」の場合の方が不快度が高く、その差は順に0.1%水準、5%水準で有意である。また、「顔20cm」、「手握られ」については「女から女」よりも「男から男」の方が不快度が高く、順に1%水準、0.1%水準で有意差が見られた。

続いて、異性間のモデルについて検証する。表3は、モデル3とモデル4の回帰係数の比較結果である。

表3 モデル3・4の回帰係数の比較結果

	differences of coefficients	z.values	p.values	sig
(Intercept)	1.351	10.109	0.000	***
typeお尻	-0.021	-0.110	0.912	
type異性好み	-0.120	-0.634	0.526	
type下ネタ	0.301	1.608	0.108	
type顔20cm	0.038	0.190	0.849	
type手握られ	0.070	0.367	0.714	
type浮気デマ	-1.150	-5.656	0.000	***

表3より、「いやらしい目」では0.1%水準で有意差が見られ、「女から男」よりも「男から女」の方が不快度が高いという結果になった。また、「浮気デマ」でも0.1%水準で有意差が見られたが、こちらは「男から女」よりも「女から男」の方が不快度が高かつ

た。

4. 考察

まず、同性間セクハラに関する仮説である仮説1の検証では、「手を握られた」「顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた」については女性同士の方が不快感が低かったため、仮説の通りの結果となった。一方で、「お尻を触られた」に対する不快感に関しては、男女で有意差は見られなかった。よって仮説は一部の場合において支持されたとと言える。セクハラの種類で身体接触・接近のあるもののうち「お尻を触られた」のみが仮説と異なる結果になったのは、お尻がプライベートゾーンであることと関連していると考えられる。自分のプライベートゾーンを触られることは手を握られるよりも性的な意味合いが強く感じられるため、たとえ同性間の身体接触に対する抵抗感が低い女性であっても不快に感じるのではないだろうか。

また、「下ネタの冗談を聞かされた」「あなたが既婚者と浮気しているというデマを流された」について、男性同士よりも女性同士の方が不快感が高く、仮説とは異なる結果になっていた。特に「下ネタ」では全種類の中で最も回帰係数の差が大きい。男性はホモソーシャルな関係の中で下ネタに触れる頻度が多いことや、女性が性の話をすることは下品であるという風潮が影響しているのではないかと考える。

続いて異性間セクハラに関する仮説2の検証では、有意差があるのは7種類のうち2種類のみで、その中でも「あなたが既婚者と浮気しているというデマを流された」については「男から女」よりも「女から男」の場合の方が不快感が高いという結果になった。よって仮説は支持されなかったと結論付けられる。実際の件数としては女性被害者が圧倒的に多くても、それらの行動に対する感覚に男女差があるわけではないということが分かった。

なお、仮説と直接の関係はないが、「浮気デマ」は同性間では女性回答者の方が不快

度が高く、異性間では男性回答者の方が不快感が高いという興味深い結果が得られた。しかし、「浮気デマ」の不快感は全てのモデルで高くなっていることが表 1 から分かるが、そもそもこの項目の不快感については、性的な言動に対する不快感というよりも、デマによって社会的信用を失うことに対する不快感や相手に裏切られたという不信感が強く反映されているのではないだろうか。そのため、この項目に関してはさらなる調査や検討が必要であると考えられる。

本稿では、セクハラ相談件数の性差が不快感の性差と関連しているのか検討する必要があるとして、同性間・異性間の場合に分けて検証した。今後の課題としては、今回は言及しなかった親密さや年齢など、性別以外の要素とも組み合わせて不快感への影響を分析することが挙げられる。また、セクハラの種類についても、身体接触の有無からさらに細分化して検討する必要がある。

参考文献

男女共同参画局, 2015, 「男女共同参画白書 平成 27 年度版」
https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h27/zentai/index.html (最終閲覧日 2023.1.16)

羽成隆司・河野和明・伊藤君男・石垣舞子, 2015, 「日本人大学生における性的身体接触経験と抵抗感の性差」『椙山女学園大学文化情報学部紀要』 15: 117-123.

厚生労働省ホームページ, 「職場におけるハラスメントの防止のために (セクシュアルハラスメント/妊娠・出産・育児休業等に関するハラスメント/パワーハラスメント)」
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyoukintou/seisaku06/index.html (最終閲覧日 2023.1.16)

厚生労働省, 東京海上日動リスクコンサルティング株式会社, 2021, 「職場のハラスメントに関する実態調査報告書」
<https://www.mhlw.go.jp/content/11910000/000775799.pdf> (最終閲覧日 2023.1.16)

加害者との年齢差が被害者の不快感に与える影響について

小柳 由文

1. はじめに

日常を送る中で、われわれは人とコミュニケーションを取って生きている。また、その内容は多岐にわたり、他愛もない世間話から趣味の話、真剣な悩みまでさまざまである。時には性的な話題にもなるだろう。しかし、性的な話題は非常に個人のプライベートな部分に踏み込んだものであり、無神経に投げかけてよいものではない。実際、性的な言動あるいは行動などで精神的苦痛を受ける事例は多くあり、セクシュアル・ハラスメントとして幅広く認知されるに至っている。では、セクシュアル・ハラスメントとはどのような概念なのだろうか。国家公務員の人事管理を担当する人事院によると、人事院規則一〇一一〇において次のように定義されている。

他の者を不快にさせる職場における性的な言動及び職員が他の職員を不快にさせる職場外における性的な言動（人事院 1998）

この定義からは、他者を不快にさせた、つまり被害者が不快に感じたかどうかに重点が置かれていることがわかる。しかし、これは1998年のものであり、当時はセクシュアル・ハラスメント概念が今ほど認知されていなかったこともあり、詳細は定められていない。そこで、2020年に人事院規則一〇一一〇の運用について改正された資料を参照すると、次のような記載があった。

「性的な言動」とは、性的な関心や欲求に基づく言動をいい、性別により役割を分担すべきとする意識又は性的指向若しくは性自認に関する偏見に基づく言動も含まれる。（人事院 2020）

性的な言動として 2 種類が挙げられているが、ここで注目したいのは性的な関心や欲求に基づく言動である。一般的に、若者の性的な関心は同年代に対して向けられることが多く、また、性的な欲求は成人して以降年齢を重ねるごとに減退していくと知られている。よって、大学生が被害者である場合、年齢差のある相手からの性的な言動や行動について、被害者の視点では自分に性的関心・欲求を抱いているとは想像しづらいため、年齢の近い相手からの性的な言動や行動に比べると不快に感じづらいのではないかと考えられる。また、年齢差が不快度を与える影響について明らかにすることは、セクシュアル・ハラスメントを未然に防ぐための人事配置などに活かせると考えられる。よって、本論文では、「加害者と被害者の年齢が離れているほど不快度は低くなる」という仮説の検証を目的とする。

2. 方法

「35 歳 or 55 歳の A が B をした」という形式で A の言動あるいは行動を表した質問文について、A の言動が不快だと思うかどうかを 6 段階（1. とても不快である、2. 不快である、3. どちらかといえば不快、4. どちらかといえば不快ではない、5. 不快ではない、6. まったく不快ではない）の回答で求めた。そして、不快度が強い順に、5 点、4 点、3 点、2 点、1 点、0 点と点数化した。

3. 結果

「35 歳の A が B した」という事例の不快度平均と「55 歳の A が B した」という事例の不快度平均を比較した結果、以下のグラフのようになった。

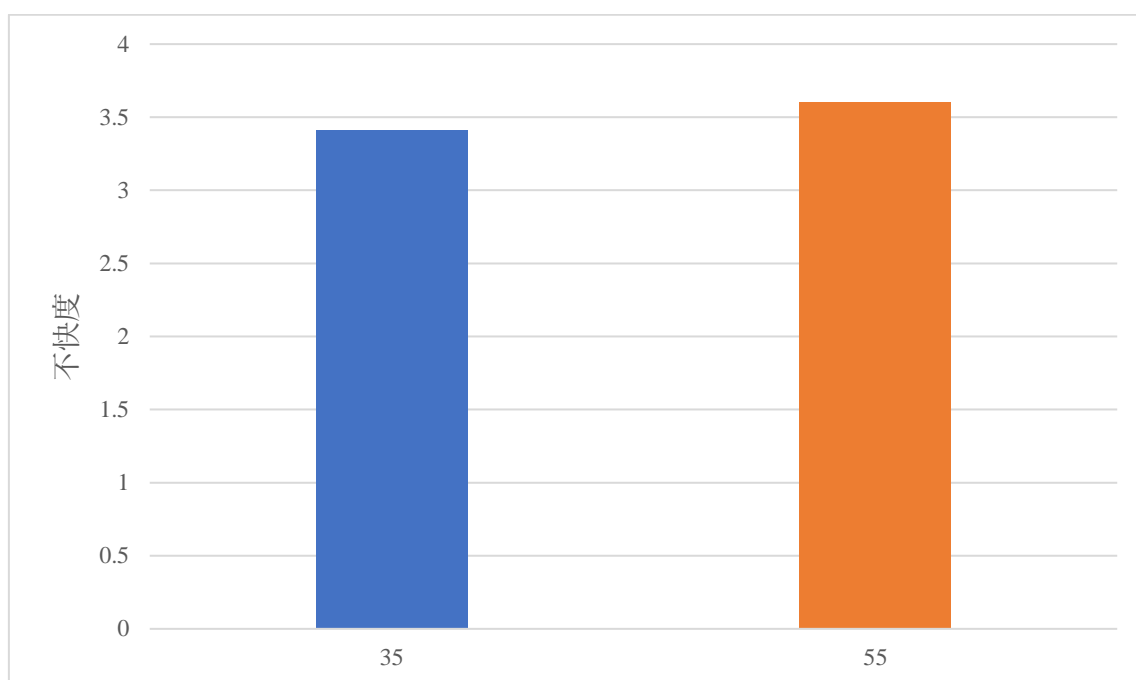


図 1 加害者の年齢別の不快度比較

加害者が 35 歳の場合の不快度平均は 3.407、加害者が 55 歳であった場合の不快度平均は 3.602 であった。仮説とは逆に、加害者と被害者に年齢差がある方が、わずかながら不快度は高くなることがわかった。

4. 考察

本論文では「加害者と被害者の年齢が離れているほど不快度は低くなる」という仮説を立てていたが、分析の結果、仮説とは逆に加害者と被害者の年齢が離れている方が不快度は高くなることがわかった。その原因についてはどのようなものが考えられるだろうか。ひとつ考えられるのは、「自分が加害者の性的関心・欲求の対象だと想像していなかったからこそより不快に感じた」という可能性である。人は思いがけない事象が起きたとき、事前に予想していた場合と比べて感情の揺れ幅は大きくなるものであり、それがセクシュアル・ハラスメントを受けた際の不快度にも表れたのではないだろうか。

最後に、本論文によって示された内容が、より詳細なセクシュアル・ハラスメントの不快

度を規定する要因を探る研究、セクシュアル・ハラスメントを予防するための人事配置などの一助になれば幸いである。

参考文献

人事院, 1998, 『人事院規則一〇一一〇 (セクシュアル・ハラスメントの防止等)』 (2022年1月16日取得, <https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=410RJNJ10010000>)

人事院, 2020, 『人事院規則一〇一一〇 (セクシュアル・ハラスメントの防止等) の運用について』 (2022年1月16日取得, https://www.jinji.go.jp/kisoku/tsuuchi/10_nouritu/1032000_H10shokufuku442.html)

「下ネタ」に関する大学生の不快感の考察

赤澤 翔希

1. はじめに

寄席に起源をもつ「下ネタ」は一般的に排泄や性的な話題によって笑いを得る手法として広く認知されており、現代では友人間の世間話からテレビやラジオなどのメディアまで幅広い場面で話されている。「下ネタ」により笑いが生まれることで人間関係が円滑になるという良い面がある一方、行き過ぎた内容や場面を誤った場合には聞き手を不快にさせセクシャルハラスメントになってしまうこともある。こうした「下ネタ」によって人々はどの程度不快感を抱くのであろうか。その問いについてデータをもとに考察していき、どういった状況で不快感が増すのかについて確かめ、原因を考察していきたいと思う。また、それによる社会的な意義は以下のことが考えられる

1. どういった性別や立場、地位の人の下ネタがより不快感を与えるかを明らかにすることで不快感を与えやすい条件の人の下ネタが不快感を与えることに対する対策を立てやすくなり、下ネタによるセクシャルハラスメントや不快感を減らすことができる。

2. 性別による下ネタの不快感の差の原因をデータに基づいて考察することにより下ネタをいう人の性別や立場、地位と与える不快感の関係のメカニズムを明らかにし、1で述べた対策をより強固なものにし効果を大きくすることができる。

3. 労働や教育の場での下ネタのセクシャルハラスメントは法整備や企業の対策によって抑制されつつあるが、日常にも応用可能な下ネタの不快感のメカニズムを明らかにすることで規制しづらい日常における人々の下ネタの不快感を減らすことができる点においてこの問題を社会学で扱う意義がある。

2. 分析方法

使用するデータは 2022 年 10 月に大学生対象に google form によって行われたアンケートである。下ネタによる不快度の比較の指標として、以下の質問項目を使用した。

- 1.a6 親しい 35 歳の非常勤講師.男.到下ネタの冗談を聞かされた
- 2.b12 親しい同級生.女.到下ネタの冗談を聞かされた
- 3.b17 親しい 55 歳の教授.男.到下ネタの冗談を聞かせられた
- 4.c3 あまり親しくない同級生.男.到下ネタの冗談を聞かされた
- 5.c12 親しい 35 歳の教授.女.到下ネタの冗談を聞かされた
- 6.d1 親しい 35 歳の非常勤講師.女.到下ネタの冗談を聞かせられた
- 7.d6 親しい 55 歳の非常勤講師.男.到下ネタの冗談を聞かされた
- 8.d17 あまり親しくない 35 歳の教授.男.到下ネタの冗談を聞かされた

質問項目の関しては 6 点尺度であり、0 に近づくほど不快度が低く 5 に近づくほど不快度が高いとした。また、変数として以下のようなものを設定した。

- ①close: 「親しさ」
- ②status: 「下ネタ」を言う人のステータス
- ③sex: 性別

3. 分析結果

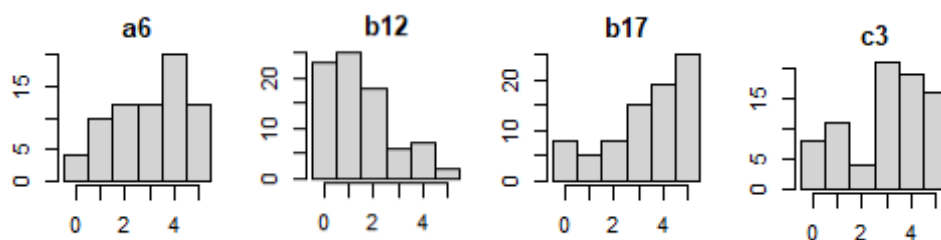
- ・平均値のデータは以下の通りである。

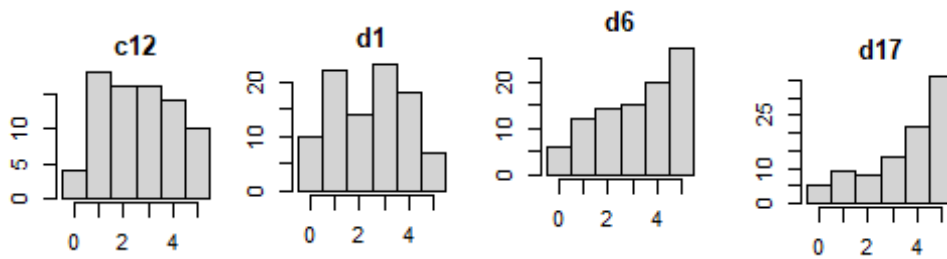
表 1

Q.No	close	status	sex	平均
a6	親しい	35歳非常勤講師	男	3
b12	親しい	同級生	女	1.444
b17	親しい	55歳教授	男	3.337
c3	あまり親しくない	同級生	男	3.013
c12	親しい	35歳教授	女	2.615
d1	親しい	35歳非常勤講師	女	3.479
d6	親しい	35歳非常勤講師	男	3.191
d17	あまり親しくない	35歳教授	男	3.57

・各質問のヒストグラムは以下のとおりである。

表2





・表1から以下のことが読み取れる。

①sexの変数に関してd1とd6を比較するとd6の方が平均値が高く、男性が下ネタをいう方が女性が下ネタをいうより不快感が高いということが考察できる。

②statusの変数に関してa6とb17を比較するとb17の方が平均値が高く、35歳の非常勤講師よりも55歳の教授の下ネタの方が不快感が高いことが考察できる。また、c3とd17を比較するとd17の方が平均が高く、同級生よりも35歳教授の下ネタの方が不快感が高いと考察できる。C12とd1を比較するとd1の方が平均値が高く、35歳教授よりも35歳非常勤講師の方が不快感が高いと考察できる。

4. 議論

4-1 考察

下ネタの不快感の原因は数、状況の2つの要素が考えられ、その要素をもとに性差による不快感の差の原因とそれを実証するために必要な調査について考察する。

性別に関してはデータから女性の下ネタよりも男性の下ネタの方が不快感が高いことが分かったが、原因の考察として以下の論点から考察していく。

- ① 下ネタをいう数の多さに男女差はあるか、あるとすればそれがどのように影響するか。
- ② 下ネタを言う状況に男女差はあるか、あるとすればそれがどのように影響するか。

1. 男女の下ネタの数の差について

男性の方が女性より下ネタを多く言うとは仮定する。男性が下ネタをいう状況は女性が言う状況よりもイメージしやすくなるといえる。また、今までの経験的に女性より男性から下ネタを言われた経験の方が多くなり、不快感を感じた回数が後者の方が多くなる。ゆえに、男女の下ネタの数の差があり男性の方が多い場合、経験からの印象やイメージのしやすさから数による男女の不快感の差が生じると考えられる。これを実証するためには男性が女性よりも下ネタを言う（もしくは男性に言われた経験の方が多）というデータおよびそのデータと不快感のデータの相関を調べる必要がある。

2. 男女の下ネタをいう状況の差

大学生が同級生及び教授から下ネタを聞く状況は4つに分類できる。

- ① 授業や部活動等公共性のある場でのかかわり
- ② 休み時間やサークルの飲み会など場所に公共性はないが社会的な関係性が維持される環境内でのかかわり
- ③ 通学中の会話や休日に遊びに出かけたりといったプライベートのかかわり
- ④ SNSなどのネット上のかかわり

女性はプライベートの関係において下ネタを言う傾向にあり、男性はパブリックな環境において下ネタをいう傾向にあると仮定する。「環境において関係性を維持する強制力」がある状況、つまり下ネタなどによって不快な思いをしても関係を続けなければならない状況ほど不快感が増すと考えられるため、パブリックな環境で下ネタを言う傾向にある「男性」ほど不快感を与えやすいと考えられる。これを実証するためには男女の下ネタをいう状況と公共性の関連を示すデータおよび下ネタを言われる場所の公共性と不快感の相関を調べる必要がある。

4-2 本稿の意義と課題

大学生が下ネタを聞くときに感じる不快感という問題に対し、性差など不快感に影響する要因の原因を考察することを通じて問題に対する新たなアプローチを生み出すことにつながるという点に本稿の意義があると思われる。課題に関して以下のことがあげられる。

1. 平均値によるデータの比較では相関性の証明が不確実であり、相関係数を求めるなどより相関をはっきり示すデータを用いることができるよう統計技術を高める必要がある。
2. 原因の考察に関しては今後調査を行って仮説の検証を行うべきものであり、現状机上の空論である。

5. 参考文献

- ・大塚郁夫・谷忠邦「ユーモアと社会心理学的変数との関連についての基礎的研究」(2008)

加害者の地位・年齢・被害者との親しさがセクハラ の不快感に与える影響

大山 真之介

1. はじめに

1-1 問題

今日の日本においてセクシュアル・ハラスメント、いわゆる「セクハラ」という言葉は広く定着しており、近年では#metoo 運動に代表されるようにセクハラに関する問題がより一層社会的に注目されるようになってきている。

牟田(2004)によれば、日本においてセクハラ問題が広く知られるきっかけとなったのは1989年夏、セクハラ被害の損害賠償を求めた福岡での事件が新聞やテレビで広く報じられたことである。その後、時を置かず「セクハラ」の語が誕生してその年の「流行語大賞」を受賞すると「セクハラ」は日常語として定着するに至り、その後の調査により多くの女性たちの被害経験が明らかになったことで、セクハラという言葉のみならずセクシュアル・ハラスメントという概念が日本において急速に拡大していくこととなった。

その後、93年には当時の労働省がセクシュアル・ハラスメント防止のためのガイドラインを示し、1999年には男女雇用機会均等法や人事院規則の改正により企業主のみならず職員にもセクシュアル・ハラスメント防止に配慮する義務が課されるようになった。同時に文部省により国立学校向けにセクシュアル・ハラスメント防止の訓令が課されると、職場のみならず大学でもセクハラ防止や問題解決のための取り組みが始まっていくこととなる。

牟田(2004)は日本におけるこうしたセクハラ対応のための法制度の制定は極めて速やかであったと評価する一方、その性急さゆえに法的な議論の蓄積が不十分であり、何をセクハラと捉えるかには混乱が見られると指摘している。

厚生労働省は職場におけるセクシュアルハラスメントを「職場において行われる、労働者の意に反する性的な言動に対する労働者の対応によりその労働者が労働条件に付いて不利益を受けたり、性的な言動により就業環境が害されること」と定義したう

えで、以下のように補足している。

- ・事業主、上司、同僚に限らず、取引先、顧客、患者、学校における生徒などもセクシュアルハラスメントの行為者になり得るものであり、男性も女性も加害者にも被害者にもなり得ます。

- ・職場におけるセクシュアルハラスメントには、同性に対するものも含まれます。また、被害を受ける者の性的指向や性自認に関わらず、「性的な言動」であれば、セクシュアルハラスメントに該当します。

このように見てみると、セクハラに加害者の属性は極めて多様であり、またセクハラと定義される内容（＝性的な言動）も被害者側の受け取り方や主観的不快感に大きく依存するということが分かる。セクハラを明確化するには、どういった属性の加害者のどういった発言が、どの程度被害者に不快感を与え、セクハラと認定されるのかを明らかにしていく必要があるだろう。したがって本レポートでは、加害者の属性として「地位」「年齢」「被害者との親しさ」に着目し、それら加害者の属性によりセクハラの不快感がどのように変化するのか分析・考察する。

1-2. 仮説

前節でも述べたように、本レポートではセクハラ加害者の属性に着目する。

セクハラ被害者の属性として、第一に「権力」に着目した。佐々木(2018)は先述の厚生労働省によるセクハラを踏まえて「セクシュアルハラスメントは……職場や労働の場の階層的な人間関係がある中で、「加害者が、被害者に対する権力を有して、その立場を利用して行う行為」であり、加害者と被害者との関係性が重要なカギとなる。」と述べている。また、柴田ら(2019)も「セクハラは、その多くが地位の高い加害者と相対的に地位の低い被害者との間に起こるものであることから、加害者側の特徴に焦点をあてた研究が必要である」と指摘している。

セクハラが加害者から被害者に向けて一方的・強制的に行われる行為であることを踏まえると、その背後に権力関係を想定することは十分に妥当性があると思われる。また、加害者と被害者の権力の差が大きくなるほど被害者は加害者の影響力や報復を恐れて抵抗することが難しくなるため、セクハラの不快感が増すことが考えられる。今回の調査では大学内が舞台として想定されており、加害者の地位カテゴリは「同級

生・非常勤講師・教授」の3つである。継続雇用である教授に対して非常勤講師はパートタイムの仕事であることを踏まえると、同級生<非常勤講師<教授の順に権力が高く、セクハラの不快感もその順に高くなると想定できる(仮説[1])。

また、大学においては一般的に年齢が高い教員ほど学界において多くの業績を上げており、したがって大きな権力を持つ人が多いことが想定される。今回の調査における加害者の年齢カテゴリは「同級生・35歳・55歳」の3つであるから、同級生<35歳<55歳の順にセクハラの不快感が高くなることが想定できる(仮説[1])。

一方で、セクハラであるとされる「性的な言動」も様々なものが想定されることが指摘されている。伊藤(2009)は「公的場面で女らしさを期待する行為は必ずしもそのすべてが「性的」なものではない。たとえば、酒席での酌やサービスの強要、容貌に関わる「冗談」などは直接に性的なものではないし、また、身体接触を伴わないことも多いのである。しかし、重要なことは、これらの行為が今や多くの女性に不快感を与えていると同時に、事実上セクハラと認識されている」ことであると指摘している。このように被害者に「セクハラ」として認定される行為としては身体的接触のみならず容貌に関わる冗談など様々なものが想定される。しかし、もちろんそうした冗談を親しくない人から言われた場合には高確率で不快な「セクハラ」として認定されるであろうが、そうした冗談を親しい人から言われた場合、被害者側の価値観によってはコミュニケーションの一種として許せる「冗談」として捉えられ、不快な「セクハラ」としては認定されないかもしれない。つまり、セクハラの不快感は加害者と被害者の親しさにも規定されるのではないかと考えられるのである。したがって、被害者と親しい人より親しくない人からセクハラを受ける方が不快感が強い(仮説[2])ことが考えられる。

さらに被害者と加害者の地位や年齢が近いほど気心の知れた話し相手になれる確率が高まり、「性的な言動」を冗談やスキンシップとして許容できる度合いが高まると考えると、その逆として、加害者の地位/年齢が高くなるほど、加害者と被害者の親しさが不快感を抑制しにくくなる(仮説[3])ことが想定される。

以上を踏まえ、本レポートでは以下の仮説を検証する。

仮説[1] 加害者の「年齢/地位」が高くなるほどセクハラの不快感が強い

仮説[2] 加害者が被害者と「親しい」場合よりも「親しくない」場合の方がセクハラの不快感が強い

仮説[3] 加害者の「年齢/地位」が高くなるほど、加害者と被害者の「親しさ」がセク

ハラの不快感を抑制しにくくなる

2. 方法

2-1. データ概要

本レポートで使用したデータの質問項目は、性別、学年、大学名といった基本属性の他、以下（１）～（５）の項目の要素を組み合わせた内容のヴィネットであった。

- （１）加害者との親しさ（親しい/あまり親しくない）
- （２）加害者の年齢（35歳/55歳/同級生）
- （３）加害者の地位（教授/非常勤講師/同級生）
- （４）加害者の性別（男性/女性）
- （５）セクハラ行為の内容（手を握られた/お尻を触られた/顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた/いやらしい目で見つめられた/異性の好みを聞かれた/下ネタの冗談を聞かされた/あなたが既婚者と浮気しているというデマを流された）

ヴィネットの具体例としては、例えば「あまり親しくない55歳の教授(女)に異性の好みを聞かれた」といったものであり、各ヴィネットに対して「とても不快である」

「不快である」「どちらかといえば不快」「どちらかといえば不快ではない」「不快ではない」「まったく不快ではない」の6尺度で回答を求めた。

2-2. 変数

データを分析するにあたり以下のようにデータを処理・数値化し、変数を設定した。

(i) ロングフォーマットへの変換

ワイドフォーマットで読み込んだ調査データを、ロングフォーマットへと変換した。

(ii) 回答者の限定

本レポートでは調査対象者を大学生に限定するため、「大学には在籍していない」と回答した人のデータを削除した。

(iii) 「不快感」の数値化

各ヴィネットへの回答における選択肢「とても不快である」に5、「不快である」に4、「どちらかといえば不快」に3、「どちらかといえば不快ではない」に2、「不快ではない」に1、「まったく不快ではない」に0といったように数字を割り当て、この数字を「不快感」と呼称する。5は最も不快感が高く、0は最も不快感が低いことになる。

(iv)変数の設定

回答者の属性や加害者の属性、不快感をカテゴリー分けするため、以下のように変数を設定した(表1)。

表1 設定した変数の一覧表

変数名	意味	内訳
timestamp	回答日時	
sex	回答者の性別	男/女/その他
gakunen	回答者の学年	1～4年/研究生等/院生
birthmonth	回答者の誕生日	1～12月
id	回答者に振り分けたid	
unpleasure.n	不快感	0～5
close	被害者との親しさ	親/非親
age	加害者の年齢	同級生/35歳/55歳
sta	加害者の地位	同級生/非常勤/教授
sex.offender	加害者の性別	男/女
type.e	セクハラの内容	異性/下ネタ/デマ/目/顔/手/お尻 ^{※1}

※1

それぞれ、

- ①異性…「異性の好みを聞かれた」
- ②下ネタ…「下ネタの冗談を聞かされた」
- ③デマ…「あなたが既婚者と浮気しているというデマを流された」

- ④目…「いやらしい目で見つめられた」
 - ⑤顔…「顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られた」
 - ⑥手…「手を握られた」
 - ⑦お尻…「お尻を触られた」
- を表す。

2-3. 分析の手順

本研究では加害者の年齢・地位および被害者との親しさがセクハラの不快感にいかなる影響を及ぼすか調査する。まず、加害者の年齢・地位・被害者との親しさごとの不快感の平均値を図示して差を比較し、必要に応じて平均値の差の有意性の検定を行った。続いて「加害者の年齢・地位」「被害者との親しさ」を独立変数、「セクハラの不快感」を従属変数とした重回帰分析を行い、主効果及び交互作用効果の有意性を調べた。

3. 分析結果

3-1. 仮説[1]の検証

本節では仮説[1]「加害者の「年齢/地位」が高くなるほどセクハラの不快感が強い」を検証するため、加害者の「年齢/地位」ごとの不快感の平均値を図示し、必要に応じてその差の有意性を調べる検定を行った。

まず初めに、加害者の年齢ごとの不快感の平均値を図示して比較した。図1は加害者の年齢ごとの不快感の平均値を示したものである。

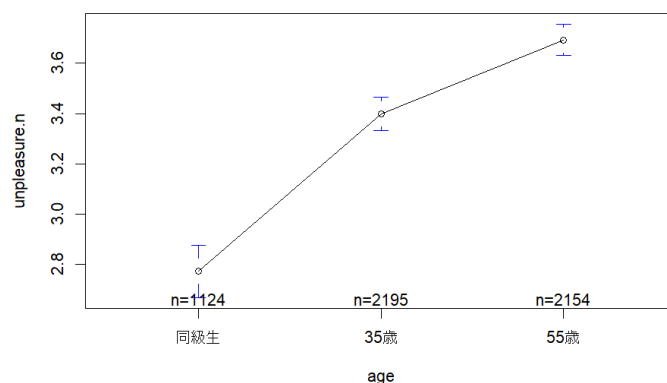


図1 加害者の年齢ごとの不快感の平均値

図1より、セクハラを受けた際の不快感の平均値は加害者が「同級生」<「35歳」<「55歳」の順に高くなっていることが分かる。平均値の95%信頼区間を示す青いエラーバーが重なっていないため、平均値に有意差があることは明白である。

続いて、加害者の地位ごとの不快感の平均値を図示して比較した。図2は加害者の地位ごとの不快感の平均値を示したものである。

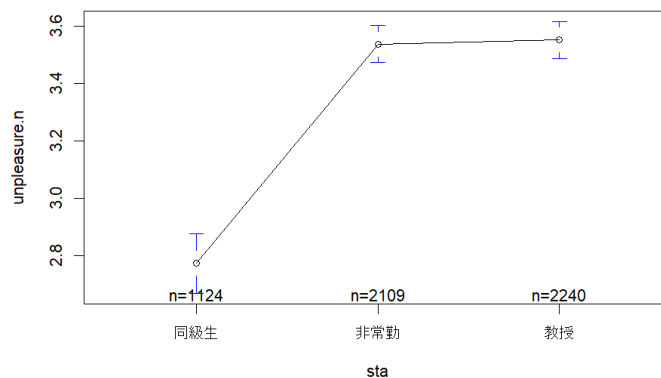


図2 加害者の地位ごとの不快感の平均値

図2より、加害者が「同級生」である場合には「非常勤」「教授」の場合よりも不快感の平均値がかなり低くなっていることが分かる。一方で、加害者が「非常勤」である場合と「教授」である場合とでは、平均値の95%信頼区間を示す青いエラーバー

が重なっており、両者の平均値に有意な差は無いように見える。「非常勤」を基準カテゴリとして平均値の差の検定を行った結果、以下のようになった(表 2)。

表 2 加害者の地位ごとの不快感の平均値の差の検定

```
Call:
lm(formula = unpleasure.n ~ sta, data = d0.long)

Residuals:
    Min       1Q   Median       3Q      Max
-3.5509 -1.5372  0.4491  1.4491  2.2278

Coefficients:
            Estimate Std. Error t value Pr(>|t|)
(Intercept)  3.53722    0.03450 102.539  <2e-16 ***
sta同級生   -0.76498    0.05851 -13.075  <2e-16 ***
sta教授      0.01367    0.04807   0.284   0.776
---
Signif. codes:  0 '***' 0.001 '**' 0.01 '*' 0.05 '.' 0.1 ' ' 1

Residual standard error: 1.584 on 5470 degrees of freedom
( 16559 個の観測値が欠損のため削除されました )
Multiple R-squared:  0.03734,    Adjusted R-squared:  0.03699
F-statistic: 106.1 on 2 and 5470 DF,  p-value: < 2.2e-16
```

表 2 の Estimate から基準カテゴリ「非常勤」の平均不快感は約 3.54 であり、加害者が「非常勤」の場合よりも「同級生」の場合には平均不快感が約 0.76 低くなるが、一方で「教授」の場合には約 0.01 と、ごくわずかにしか高くないということが分かる。また、Pr(>|t|)を見ると、「同級生」の p 値は「<2e-16(=2×10⁻¹⁶)」であり 5% 水準で有意である一方で、「教授」の p 値は「約 0.78」であり、5%水準において有意ではない。また、「3つの水準の平均値はすべて等しい」という帰無仮説を検定した「F-statistic: 106.1 on 2 and 5470 DF, p-value: < 2.2e-16」では p 値が「<2.2e-16(=2.2×10⁻¹⁶)」となり、有意水準 5%において有意となっているが、これは実質的に「同級生」と「非常勤/教授」という 2 カテゴリ間の平均値の差が有意であることを示しているにすぎないと考えられる。

したがって、加害者の地位ごとの不快感の平均値を調べると、「同級生」と「非常勤/教授」の間では不快感に有意な差があるが、「非常勤」と「教授」の間では不快感に有意な差はないと結論付けられる。

3-2. 仮説[1]の考察

以上、仮説[1]「加害者の年齢/地位が高くなるほどセクハラの不快感が強い」を検証するため、「加害者の年齢/地位」ごとの不快感の平均値を図示し、その差の有意性を調べる検定を行った。

「加害者の年齢」に関しては、図から加害者が「同級生」<「35歳」<「55歳」の場合の順に不快感の平均値が高くなっていることが明確に見て取れ、検定の結果からも年齢カテゴリ間の平均値の差がすべて有意であることが示された。一方、「加害者の地位」に関しては、図から加害者が「同級生」の場合は「非常勤/教授」の場合よりも不快感の平均値が低いことは読み取れたが、加害者が「非常勤」の場合と「教授」の場合では両者の不快感の平均値にほぼ差が無かった。検定の結果、「同級生」と「非常勤/教授」の間では不快感の平均値の差は有意であったが、「非常勤」と「教授」の間では有意でないことが分かった。

したがって上記の分析より、仮説1のうち「加害者の年齢が高くなるほどセクハラの不快感が強い」については支持されたものの、「加害者の地位が高くなるほどセクハラの不快感が強い」については「非常勤」と「教授」で不快感の平均値がほぼ同じであったことから一部支持されなかった。

本レポートでは「セクハラは加害者と被害者の権力関係に基づいて行われる」という先行研究を踏まえ、「加害者と被害者の権力の差が大きくなるほど被害者は加害者の影響力や報復を恐れて抵抗することが難しくなり、セクハラの不快感が増すのではないか」という仮定、そして「大学内では年齢が高いほど、そして地位が高いほど権力を持っているため、セクハラの不快感が増すのではないか」という仮定に基づいて仮説を立てた。しかし今回の分析で加害者が「非常勤」の場合と「教授」の場合で不快感の平均値に有意な差が無かったことを踏まえると、単に加害者の名目上の権力が大きくなるにつれてセクハラの不快感が高くなるのではなく、「教師と生徒」「若者と中高年」という立場上・外見上の差異がセクハラの不快感の強さを規定すると考えられる。

3-3. 仮説[2]の検証

続いて、本節では仮説[2]「加害者が被害者と「親しい」場合よりも「親しくない」場合の方がセクハラの不快感が強い」を検証するため、「被害者との親しさ」ごとの不快感の平均値を図示し、その差を調べた。図3は被害者との親しさごとの不快感の平均値を示したものである。

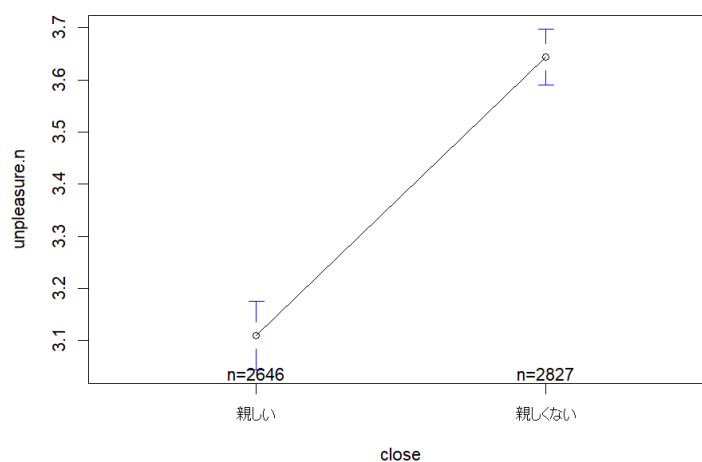


図3 被害者との親しさごとの不快感の平均値

図3より、セクハラを受けた際の不快感の平均値は被害者と「親しくない」場合の方が「親しい」場合よりも高くなっていることが分かる。平均値の95%信頼区間を示す青いエラーバーが重なっていないため、平均値に有意差があるのは明白である。「

3-4. 仮説[2]の考察

仮説[2]「加害者が被害者と「親しい」場合よりも「親しくない」場合の方がセクハラの不快感が強い」を検証するため、「被害者との親しさ」ごとの不快感の平均値を図示し、その差を調べた。その結果、セクハラを受けた際の不快感の平均値は被害者と「親しくない」場合の方が「親しい」場合よりも高くなっていることが明確に見て取れ、両者の平均値の差が有意であることが示された。

この結果は、親しい間柄ではコミュニケーションやスキンシップの一種として捉えられるような行為でも、親しくない人にそのような行為をされた場合はセクハラであると感じられることがあるだろうという仮説を裏付けるものである。図4は被害者との親しさとセクハラの内容別の不快感の平均値を示したものである。

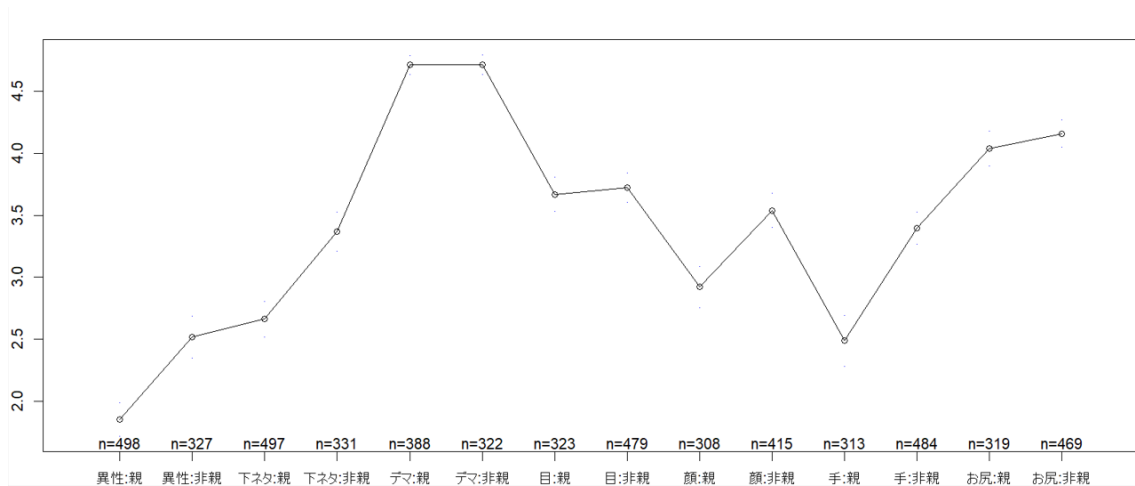


図4 被害者との親しさとセクハラの内容別の不快感の平均値

図4から、「異性の好みを聞かれた」「下ネタの冗談を聞かされた」「手を握られた」「顔を近づけられた」などの行為については加害者が被害者と「親しい」場合の不快感が「親しくない」場合より著しく低くなっていることが分かる。こうした行為は加害者が被害者と親しい間柄の場合にはスキンシップやコミュニケーションとして、親しくない間柄の場合にはセクハラとして捉えられる流動的な行為であり、こうした行為が加害者が被害者と「親しい」場合の不快感の平均値を低下させていると考えられる。

3-5. 仮説[3]の検証

本節では、仮説[3]「加害者の「年齢/地位」が高くなるほど、加害者と被害者の「親しさ」がセクハラの不快感を抑制しにくくなる」を検証するため、「年齢：親しさ」「地位：親しさ」を組み合わせ、不快感の平均値の差を比較した。また、年齢・地位・親しさを独立変数、不快感を従属変数とした重回帰分析を行い、主効果及び交互作用効果の有意性を調べた。

まず、「年齢：親しさ」と不快感の関係について調べる。「年齢：親しさ」の組み合わせごとの不快感の平均値を図示すると以下のようになった。

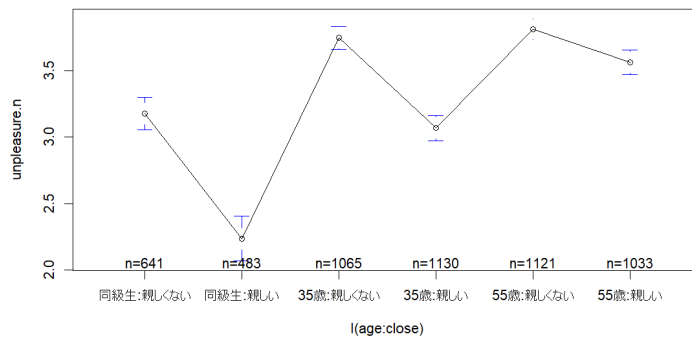


図5 「年齢：親しさ」の組み合わせごとの不快感の平均値

図5から、仮説通り同級生<35歳<55歳の順に「親しくない」と「親しい」の不快感の平均値の差が小さくなっていることが分かる。

続いて、「年齢」「親しさ」それぞれの主効果および「年齢：親しさ」の組み合わせによる交互作用効果の有意性を調べるため、重回帰分析を行った。以下がその結果である(表3)。

表3 「年齢：親しさ」の重回帰分析

	Model 1	Model 2
(Intercept)	3.01 *** (0.05)	3.18 *** (0.06)
age35歳	0.67 *** (0.06)	0.57 *** (0.08)
age55歳	0.95 *** (0.06)	0.64 *** (0.08)
close親しい	-0.56 *** (0.04)	-0.94 *** (0.09)
age35歳:close親しい		0.26 * (0.11)
age55歳:close親しい		0.69 *** (0.11)
R ²	0.07	0.08
Adj. R ²	0.07	0.08
Num. obs.	5473	5473

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

各 Model に表示されている数字は係数と標準誤差(かっこ内)であり、Num. obs. は観測数、R² は決定係数、Adj. R² は調整済み決定係数を表す。主効果のみのモ

デルが Model11、交互作用効果付きのモデルが Model12 である。Model12 は Model11 に比べて調整済み決定係数の値が増加しており、交互作用効果を仮定することで回帰式の説明力が増していることが分かる。

主効果を推定した Model11 より、「同級生」を基準とすると「35 歳」「55 歳」が有意に不快感を高め、「親しい」が有意に不快感を低下させることが分かる。また、交互作用効果を推定した Model12 より、「35 歳：親しい」の交互作用効果が 0.26 であり 5%水準で有意なのに対して、「55 歳：親しい」の交互作用効果は 0.69 と 0.1%水準で有意であり、その有意性が増加していることが分かる。したがって、「親しい」が「35 歳/55 歳」の不快感を低下させるのみならず、「35 歳/55 歳」が「親しい」の不快感を増加させる働きをし、結果的に「35 歳/55 歳：親しい」の組み合わせの不快感が有意に増加していることが分かる。また、「35 歳」よりも「55 歳」の方が「親しい」の不快感を大きく増加させているため、「35 歳：親しい」よりも「55 歳：親しい」の交互作用効果の方がより有意に不快感が増加していることが分かる。したがって、「同級生」<「35 歳」<「55 歳」の順に「親しさ」がセクハラの不快感を抑制しにくくなると結論付けられる。

続いて、「地位：親しさ」と不快感の関係について調べる。「地位：親しさ」の組み合わせごとの不快感の平均値を図示すると以下のようなになった(図 6)。

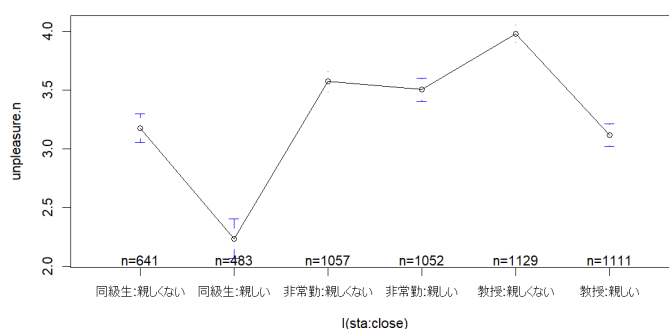


図 6 「地位：親しさ」の組み合わせごとの不快感の平均値

図 6 から、同級生<教授<非常勤の順に「親しくない」と「親しい」の不快感の平均値の差が小さくなっていることが分かる。仮説[3]では地位が高い順、つまり同級生<非常勤<教授の順に「親しい」と「親しくない」の不快感の平均値の差が小さく

なると予想していたが、実際は教授よりも非常勤の方が「親しくない」と「親しい」の不快感の平均値の差が小さくなっていることが分かった。

続いて、「地位」「親しさ」それぞれの主効果および「地位：親しさ」の組み合わせによる交互作用効果の有意性を調べるため、重回帰分析を行った。以下がその結果である(表4)。

表4 「地位：親しさ」の重回帰分析

	Model 1	Model 2
(Intercept)	3.02 *** (0.05)	3.18 *** (0.06)
sta非常勤	0.80 *** (0.06)	0.40 *** (0.08)
sta教授	0.82 *** (0.06)	0.80 *** (0.08)
close親しい	-0.57 *** (0.04)	-0.94 *** (0.09)
sta非常勤:close親しい		0.87 *** (0.11)
sta教授:close親しい		0.08 (0.11)
R ²	0.07	0.08
Adj. R ²	0.07	0.08
Num. obs.	5473	5473

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

主効果を推定した Model1 より、「同級生」を基準とすると「非常勤」「教授」が有意に不快感を高め、「親しい」が有意に不快感を低下させることが分かる。また、交互作用効果を推定した Model2 より、「教授：親しい」の交互作用効果が 0.08 で有意でないのに対して、「非常勤：親しい」の交互作用効果は 0.87 で有意である。従って、「親しい」が「非常勤」の不快感を低下させるだけでなく、「非常勤」が「親しい」の不快感を増加させる働きをすることで、「非常勤：親しい」の組み合わせの不快感が有意に増加していることが分かる。したがって、「同級生」<「教授」<「非常勤」の順に、「親しさ」がセクハラの不快感を抑制しにくくなると結論付けられる。

3-6. 仮説[3]の考察

以上、「仮説[3]「加害者の「年齢/地位」が高くなるほど、加害者と被害者の「親しさ」がセクハラの不快感を抑制しにくくなる」を検証するため、「加害者の年齢/地位」

と「加害者との親しさ」の組み合わせごとの不快感の平均値を図示し、「加害者の年齢/地位/親しさ」を独立変数、「不快感」を従属変数とした重回帰分析を行った。

まず、加害者の年齢に着目すると、同級生<35歳<55歳の順に「親しくない」と「親しい」の不快感の平均値の差が小さくなっており、「55歳：親しい」の組み合わせに強い正の交互作用効果があることが分かった。分析の結果、仮説通り年齢が高い順、すなわち同級生<35歳<55歳の順に「親しくない」と「親しい」の不快感の差が小さくなったため、加害者の年齢が高くなるほど加害者と被害者の「親しさ」がセクハラの不快感を抑制しにくくなるという仮説が支持された。

続いて、加害者の地位に着目すると、同級生<教授<非常勤の順に「親しくない」と「親しい」の不快感の平均値の差が小さくなっており、「非常勤：親しい」の組み合わせに強い正の交互作用効果があることが分かった。当初の仮説では地位が高い順、すなわち同級生<非常勤<教授の順に「親しくない」と「親しい」の不快感の差が小さくなると推定していたので、分析の結果として教授よりも非常勤の方が不快感の平均値の差が小さくなった点は仮説と異なるものの、「親しさ」がセクハラの不快感に及ぼす影響が加害者の地位により変化することが示された。

以上より、加害者が同級生<教授<非常勤の順に、また同級生<35歳<55歳の順に加害者と被害者の「親しさ」がセクハラの不快感を抑制しにくくなると結論付けられる。加害者の年齢に関しては、加害者が「同級生」である場合や「35歳」である場合には「加害者と被害者が親しい」関係の場合、セクハラの一部が冗談やスキンシップとして許容されることで不快感が抑制される可能性がある。一方で加害者が「55歳」である場合には、たとえ親しい関係であってもそれが性的な言動である限りは「セクハラ」として捉えられ、不快感がほぼ抑制されないと考えられる。

次に、加害者の地位に関してであるが、単純に地位が高い順、つまり同級生<非常勤<教授の順ではなく、同級生<教授<非常勤の順に「親しさ」がセクハラの不快感を抑制しにくくなるという分析結果が出たことは興味深い。この理由として、大学生からすれば教授よりも非常勤講師の方が「関わりが薄い」他者としてイメージされやすいという点が考えられる。一般的に、大学生が「教授」として想定するのは研究や卒業論文執筆における指導教員のことであると考えられ、長期的な指導や研究室での交流・行事を通じて、多少の言動なら許せる気心の知れた話し相手として「教授」と親密な関係になることも十分に想像できる。一方で大学生にとって「非常勤講師」とは授業をする教師以上の何者でもなく、その関係は授業内での一時的・表面的なもの

に過ぎないだろう。「非常勤講師」は他の大学に籍を置いている場合も多く、授業以外の場で「非常勤講師」と話す機会もそうないであろうから、そもそも「教授」に比べて話し相手になったり親密な関係を結ぶことが極めて難しく、イメージされにくい。つまり大学生にとってより「他者」性が強く親密な関係をイメージしにくいのは「教授」よりも「非常勤講師」であり、それゆえに「教授」よりも「非常勤」の方で「親しさ」がセクハラの不快感を抑制しにくくなるという分析結果が出たと考えられる。

4. 議論と今後の課題

以上の通り本レポートでは、仮説[1]「加害者の「年齢/地位」が高くなるほどセクハラの不快感が強い」、仮説[2]「加害者が被害者と「親しい」場合よりも「親しくない」場合の方がセクハラの不快感が強い」、仮説[3]「加害者の「年齢/地位」が高くなるほど、加害者と被害者の「親しさ」がセクハラの不快感を抑制しにくくなる」という3つの仮説を立て、平均値の差の比較や検定、および重回帰分析の手法を用いてその真偽を検証した。

仮説[1]は、加害者の年齢に関しては同級生<35歳<55歳の順に不快感の平均値が高くなり支持されたものの、加害者の地位に関しては同級生<教授<非常勤の順に不快感の平均値が高くなり、一部仮説と反する結果が出た。仮説[2]に関しては、加害者が親しい人よりも親しくない人の場合の方が不快感の平均値が高くなり、支持された。仮説[3]は、加害者の年齢に関しては同級生<35歳<55歳の順に「親しさ」が不快感を抑制しにくくなるという結果が出たものの、加害者の地位に関しては同級生<教授<非常勤の順に「親しさ」が不快感を抑制しにくくなるという結果になり、こちらも一部仮説と反する結果が出た。

意外であったのは、単純に加害者の地位が高い順、すなわち「同級生<非常勤<教授」ではなく「同級生<教授<非常勤」の順に不快感の平均値が高くなり、かつ「親しさ」が不快感を抑制しにくくなるという点であった。先行研究ではセクハラの後方に「地位の高い加害者と相対的に地位の低い被害者」の「権力関係」や「階層関係」を想定した研究が多い。しかし、加害者の名目上の地位が高いほど不快感が高まるわけではないという今回の分析結果を踏まえると、単に加害者-被害者間の上下関係に着目するのみならず、加害者と被害者のコミュニケーション機会の多さや両者の年齢差

など、より包括的に加害者と被害者との関係性・差異に着目した研究が求められるのではないだろうか。

本レポートでは「同級生<非常勤<教授」ではなく「同級生<教授<非常勤」の順に不快感の平均値が高くなり、かつ「親しさ」が不快感を抑制しにくくなるという結果を解釈するにあたり、教授よりも非常勤講師の方がコミュニケーションをとる機会が少なく、それゆえにある程度の性的な言動を冗談として許容できる親密な関係に発展することをイメージしにくいという仮定に基づいて考察したが、このような「加害者と被害者のコミュニケーション機会の多さ」が不快感にどの程度影響するのかということや、「どこまでを冗談、どこまでをセクハラと見なすのかという基準」が人によりどのように異なるかについては、それらの項目を尋ねるさらなる調査をしなければわからないというのが実情である。セクハラの不快感を規定する要因を特定し、セクハラの予防に繋げるためには、今後そうした加害者と被害者との関係性や被害者の価値観に焦点を当てた研究が必要となるだろう。

5. 参考文献

「セクシュアル・ハラスメントに対する女性の態度について ―異文化コミュニケーション論の視点から―」伊藤明美，藤女子大学紀要第 I 部 46 巻，p. 1-15，2009.

<https://core.ac.uk/download/72757465.pdf>

「職場におけるハラスメント対策マニュアル」厚生労働省

<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000181888.pdf>

「「セクハラ」をめぐる言説を再考する：ことばの歪みの源泉をたどる」佐々木恵理，現代日本語研究会「ことば」 39，p. 17-35，2018.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/kotoba/39/0/39_17/_pdf/-char/ja

「セクハラ加害者の地位が被害者非難に与える影響」柴田 侑秀，中谷内一也，日本心理学会大会発表論文集/日本心理学会第 83 回大会，p. 426，2019 年.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/pacjpa/83/0/83_1D-036/_pdf/-char/ja

「「縮減」される意味と問題：セクシュアル・ハラスメントと法・制度」，牟田和恵，フォーラム現代社会学 3 巻 p. 29-41，2004 年

https://www.jstage.jst.go.jp/article/ksr/3/0/3_KJ00008433507/_pdf/-char/ja

大学生が感じるセクシュアル・ハラスメントに対する不快感についての調査

—加害者との親しさが不快感に及ぼす効果—

大坪 敏朗

1. はじめに

1.1 背景と目的

今の日本においてはセクシュアル・ハラスメント(セクハラ)は反社会的行為であるという認識は概ね共有されているように思えるが、大学においてセクハラについての議論が活発化したのはいつ頃からであろうか。中川(2020)によれば、1992年に行われた日本初のセクハラ裁判がきっかけとなり、大学においても同様の問題が生じていることが広く世の中に知られるようになったようである。なお、京都大学においては「京都大学におけるハラスメントの防止等に関する規程」の第2条において、セクシュアル・ハラスメントは以下のとおり定義されている。

教職員が他の教職員、学生等又は関係者を不快にさせる性的な言動、学生等が教職員、他の学生等又は関係者を不快にさせる性的な言動及び関係者が教職員又は学生等を不快にさせる性的な言動 (京都大学 2005)

ところが、他者から受けた行為を「不快にさせる性的な言動」と感じるかどうかについては個人差が大きいように思える。実際、園井(2003)は大学でのセクハラ問題を考える際には大学固有の要因である教員と学生の力関係の差に加えて、いかなる行為がセクハラに該当するのかについての個人の認識の仕方の差異という一般的要因も考慮されるべきこと指摘している。園井(2003)の研究は九州の一国立大学における全大学院生を対象とし自記式質問紙法にて実施されたものであるが、セクハラ認識の仕方に男女差があり女性の方がセクハラを広く認識するという仮説は成立しないとの結果を得ている。

山田ほか(2015)も大学におけるセクハラに関する報告であり、属性の異なる学生が

セクハラ行為に対して感じる不快感の差異についての検討を行っている。対象者は大学の学部生と大学院生であり回答者の学年と加害者との関係性（同級生か、先輩か、あるいは教職員）がセクハラ行為に対する不快性に与える影響について分散分析の手法を用いた解析をしている。セクハラ行為に関してはその内容により感じる不快性に有意な差が出ること、加害者との関係の主効果が有意で「教職員」の不快得点が最も高く、次いで「先輩」となり「同級生」の得点が最も低くいと結論を得ている。一方で、学年の主効果は有意ではないとの結果であった。

以上の先行研究を踏まえて、本研究においては学部生、大学院生および研究生・聴講生といった大学で学ぶ立場の学生がセクハラ行為を受けた場合に感じる不快感が加害者との親密性によってどう変わるのかについての情報を得ることを目的とする。

1.2 作業仮説の設定

加害者との親密性は園井(2003)および山田ほか(2015)のいずれにおいても検討されていない要因である。そこで、親しくない相手と相対する場合にはより緊張感が高まった状態なり、相手の行為に対して過剰に反応することを仮定する。そうすると自分にネガティブな行為が加えられた場合には、それがどのようなハラスメントであったとしても受けるストレスは増幅されると考えることにはある程度の説得性があるように思える。そこで、本研究においては以下のような仮説を立てて妥当性を検討するものとした。

仮説1.

加害者と親しくない方が親しい場合よりも受けたセクハラ行為に対する不快感が高くなる。

仮説2.

加害者の地位はセクハラに対する不快感に影響を与えるが、加害者と親密な場合とそうでない場合で、どの地位の加害者に一層不快感を感じるのかについての差はない。

仮説3.

受けたセクハラ行為により不快感の程度は異なり、それは行為者との親密度の影響も受ける。

2. 分析方法

2.1 検討に利用したデータ

大学の学部生、大学院生および聴講生・研究生に対して実施したセクハラへの不快度を尋ねるヴィネット調査の回答を用いた。

2.2 分析に用いる変数

今回の調査では親密性、地位、加害者性別、セクハラタイプの4種の次元を組み込んだ68種の質問(ヴィネット)に対する回答を加工して従属変数とした。具体的には回答「1 とても不快である」には5点を、「2不快である」には4点を、「3どちらかといえば不快」には3点を、「4どちらかといえば不快ではない」には2点を、「5不快ではない」には1点を、「6全く不快ではない」には点0を与え「不快度」とした。したがって、この従属変数は最小値が0、最大値が5になり、不快に感じるほど値が高くなる順序尺度である。

なお、ヴィネットに組み込まれた4つの次元とは、加害者との親しさの程度を示す「親密性」、大学において加害者と被害者の関係性を示す「地位」、加害者の性別を示す「加害者性別」、そしてどのような行為をされたかに関する「セクハラタイプ」である。「親密性」は<親密である>と<親密でない>からなり、「地位」は<35歳教授>、<35歳非常勤>、<55歳教授>、<55歳非常勤>および<同級生>から構成されている。また「加害者性別」は<男>か<女>であり、「セクハラタイプ」は<お尻を触られた>、<異性の好みを聞かれた>、<下ネタの冗談を聞かされた>、<顔の距離20cmまで近寄られた>、<嫌らしい目で見られた>、<手を握られた>と<既婚者とのデマを流された>の7カテゴリである。

2.2 各仮説を検証するためのモデル

ヴィネットのすべての次元と「回答者の性別」、「回答者の学年」および回答者の「在籍大学」を独立変数としたモデル(モデル1)を組み通常最小二乗法(OLS)で推定した。なお、「回答者の性別」は<女>、<男>、<その他>の3カテゴリから成っており、その度数分布は<女>が198人、<男>が127人、<その他>が4人であった。また表1に示す回答者の学年別の度数分布を基に「回答者の学年」を4つのカテゴリに分けた。すなわち、大学の1年生と2年生を合わせた<学部1・2年生>、3年生と4年生をまとめた<学部3・4年生>と<研究生・聴講生>および<大学院生>である。なお、<研究生・聴講生>は人数が15人と少ない。しかし、学部生とも大学院生とも比較的異なる人の集団と考えられるので、独立のカテゴリとした。

表1. アンケート回答者学年別の度数分布(人)

1年生	2年生	3年生	4年生	研究生・ 聴講生など	大学院生
26	35	122	66	15	60

「在籍大学」に関しては回答者の所属する大学が京都大学か否かでカテゴリー分けを行った。なお調査票の質問形式が、京都大学生である場合には「京都大学」にマークをし、それ以外の大学の場合には「その他」にマークをした上で自由回答欄に大学名を記入する方式であった。そのため、自由回答欄の中にも京都大学に該当する記述があるどうかを調べ、そのような記述は無かったことを確認している。結果的に「京都大学」該当者は 169 名で、「その他」と見なした回答者は 155 名であった。

次いで、加害者との親密度の影響をより詳しく検討するためのモデル(モデル 2)を組み、通常の最小二乗法 (OLS)で推定を行った。具体的には加害者への親密度に関して「親しい」場合の質問に対する回答と「親しくない」場合の回答に分割し、それぞれに対して、ヴィネットの「親密性」以外の 3 つの次元および、「回答者の性別」、「回答者の学年」および「在籍大学」を独立変数とした分析と実施した。そして、「親しい」と「親しくない」のそれぞれのケースで得られた回帰係数の差の有意性を検定した。

3. 結果

表2にモデル1およびモデル2の回帰分析の結果をまとめた。モデル1の「親密性」については、「親しくない」場合の回帰係数は有意で値が 0.48 と正であることから、加害者が親しい場合に比較して親しくない方がセクハラ行為を受けた場合の不快感が高くなることが分かった。

ついでモデル1における「地位」に関しては「35歳教授」に対して「35歳非常勤」は有意な差がないものの、「55歳教授」および「55歳非常勤講師」である場合に不快感が有意に高くなり、「同級生」である場合には逆に不快感は有意に低下した。また、モデル2では「親しい」場合と「親しくない」場合で結果は異なり、前者の場合には「55歳教授」が加害者のケースで不快感が高まり、「同級生」の場合には低くなるのに対して、後者の場合「同級生」に対する不快感は同様に低くなるが、不快感が有意に高くなるのは「55歳非常勤」の場合であった。

「セクハラタイプ」についてはモデル1では「お尻を触られた」に対して有意に不快感が高くなるのは「既婚者とのデマを流された」場合であり、その他のケースについては全て不

快度が有意に低下した。一方モデル2では<親しくない場合>の回帰係数はモデル1と同様に全て有意で各値の符号(正負)もモデル1と同じであったが、<親しい>場合には<嫌らしい目で見られた>ケースの不快感は<お尻を触られた>場合と有意な差はない結果となった。

加害者の性別に関してはモデル1において男性の方が有意に不快感を高める結果を得ているが、モデル2についても同様の結果を得た。「回答者の学年」については、<親しい>場合にのみモデル1と同様に<学部1.2年生>よりも<研究生・聴講生>の方が有意に不快感は高くなった。しかし、研究生・聴講生は15名と人数が少ない点に注意をする必要がある。表3の結果、「親密度」の違いで不快感の感じ方に有意な違いが表れたのは、切片および「地位」における<55歳教授>、「セクハラタイプ」における<異性の好みを聞かれた>と<下ネタの冗談を聞かされた>および<手を握られた>の4ケースであった。

4. 考察

モデル1の結果より、全体としては加害者と親しくない方が親しいよりも不快感を高く感じる事が分かったので、仮説1は支持されたといえる。やはり日頃から距離間の遠い人から受けた行為に対してはよりストレスが溜まったネガティブな反応をするという事なのかもしれない。

また、モデル1からは加害者の地位で受けたセクハラに対する不快感が異なることが分かった。一方モデル2では<親しい>場合と<親しくない>場合に有意になるカテゴリーに違いがあることが分かった。したがって仮説2の前半部分、すなわち「加害者の地位はセクハラに対する不快感に影響を与える」は支持されるが、後半部の「加害者と親密な場合とそうでない場合でどの地位の加害者に一層不快感を感じるのかについての差はない」については、棄却される結果となった。モデル2における<55歳教授>の場合の回帰係数の差(0.266)が有意であることから、このケースでは親しい加害者の中で比較した方が親しくない加害者内で比較した場合よりも<55歳教授>に対する不快感が高いことを意味するが、何故そうなっているのかに関しては現時点では不明で今後の検討課題としたい。同じくモデル2において<親しくない>場合の<55歳教授>の係数が有意ではなく、一方で<55歳非常勤>の場合には<親しい>場合には係数が有意ではなくなる原因についても今回の検討からは導き出せないが、いずれの場合においても「親しい」という語句が多義的であることに関係しているのかもしれない。例えば同級生に対する「親しさ」と大学職員に対する「親しさ」は違うように思える。加えてそれぞれのカテゴリーに役職の要因と年齢の要因が組み込まれているので、より詳細な検討のためにはこの二つの要因を分けた上での評価が必要になると考えられた。

表2 各モデルにおける回帰分析の結果

		モデル 1	モデル 2	
			親しい	親しくない
(Intercept)		3.69 *** (0.08)	3.78 *** (0.11)	4.18 *** (0.1)
親密性	親しくない	0.49 *** (0.04)		
地位	35歳非常勤	0.05 (0.06)	-0.02 (0.09)	0 (0.09)
	55歳教授	0.23 *** (0.06)	0.33 *** (0.08)	0.06 (0.08)
	55歳非常勤	0.21 *** (0.06)	0.12 (0.1)	0.20 * (0.08)
	同級生	-0.68 *** (0.06)	-0.73 *** (0.09)	-0.71 *** (0.08)
加害者性別	男	0.75 *** -0.04	0.74 *** -0.06	0.76 *** -0.05
セクハラタイプ	異性の好みを聞かれた	-1.91 *** (0.07)	-2.06 *** (0.1)	-1.74 *** (0.1)
	下ネタの冗談を聞かされた	-1.12 *** (0.07)	-1.28 *** (0.10)	-0.91 *** (0.09)
	顔の距離20cmまで近寄られた	-0.78 *** (0.07)	-0.89 *** (0.11)	-0.71 *** (0.09)
	嫌らしい目で見つめられた	-0.40 *** (0.07)	-0.2 (0.11)	-0.53 *** (0.09)
	手を握られた	-1.08 *** (0.07)	-1.44 *** (0.11)	-0.86 *** (0.09)
	既婚者との浮気デマを流された	0.62 *** (0.07)	0.72 *** (0.10)	0.46 *** (0.10)
回答者の性別	男	-0.53 *** (0.04)	-0.53 *** (0.06)	-0.53 *** (0.05)
	その他	0.53 *** (0.16)	0.62 ** (0.24)	0.46 * (0.21)
回答者の学年	学部3・4年生	-0.04 (0.05)	-0.04 (0.07)	-0.04 (0.06)
	研究生・聴講生	0.26 ** (0.09)	0.28 * (0.13)	0.24 (0.13)
	大学院生	-0.07 (0.06)	-0.05 (0.09)	-0.08 (0.08)
在籍大学	京都大学	-0.02 (0.04)	-0.01 (0.06)	-0.03 (0.05)
	R ²	0.39	0.44	0.3
	Adj. R ²	0.38	0.43	0.3
	Num. obs.	4907	2380	2527

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

表3 モデル2における回帰係数の差(親しい vs 親しくない)の検定結果

		differences of coefficients	z.values	p.values
	(Intercept)	-0.400	-2.59	0.009**
地位	35歳非常勤	-0.022	-0.18	0.860
	55歳教授	0.266	2.29	0.022*
	55歳非常勤	-0.081	-0.65	0.518
	同級生	-0.026	-0.22	0.824
加害者性別	男	-0.021	-0.26	0.795
セクハラタイプ	異性の好みを聞かれた	-0.319	-2.32	0.021*
	下ネタの冗談を聞かされた	-0.369	-2.69	0.007**
	顔の距離20cmまで近寄られた	-0.185	-1.30	0.194
	嫌らしい目で見つめられた	0.322	2.30	0.020*
	手を握られた	-0.586	-4.16	0.000***
	既婚者との浮気デマを流された	0.265	1.87	0.061
	回答者の性別	男	-0.002	-0.03
	その他	0.153	0.49	0.627
回答者の学年	学部3・4年生	-0.002	-0.02	0.983
	研究生・聴講生	0.039	0.21	0.833
	大学院生	0.029	0.24	0.810
在籍大学	京都大学	0.022	0.28	0.780

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

モデル1の「セクハラタイプ」では全ての回帰係数が有意を持ち、＜既婚者との浮気デマを流された＞場合の値が正(0.63)であり、それ以外のカテゴリーで負になることも踏まえて、受けたセクハラの種類により不快感は変わると考えられる。またモデル2において、＜嫌らしい目で見つめられた＞場合に相手が親しくない場合に限り回帰係数が有意になったことより、受けたセクハラ行為により不快感の程度は相手との親密度の影響を受けると考えられる。したがって仮説3は支持される。また、「セクハラタイプ」に関連して、＜嫌らしい目で見つめられた＞場合の回帰係数の差(0.322)がプラスで有意であることより、加害者と親しい場合の方が＜お尻に触れる＞行為よりも＜嫌らしい目で見つめられた＞行為に対して不快に感じる程度が高いと言える。一方で、＜異性の好みを聞かれた＞と＜下ネタの冗談を聞かされた＞という行為と＜手を握られた＞行為に対しては、加害者と親しくない方が＜お尻に触れる＞行為よりも不快感が高くなる結果である。ただ、この違いを生んでいる要因を今回の検討結果だけから見出すことは困難である。おそらく、この結果自体がセクハラを感じ方が個人で変わることを示唆しているのではなかろうか。

親しさとセクハラの関係性を考えた場合に、今回は考慮していない加害者から被害者への親しさの要素も考慮する必要があると思える。したがって、親しさの意味しているものをより明確にした上で加害者側の視点も考慮すれば、より実態に近い評価が可能になるものと考えられる。

5. 文献

- 京都大学, 2005, 「京都大学におけるハラスメントの防止等に関する規程:達示第 66 号」
(2023. 1. 9 取得, https://www.kyoto-u.ac.jp/uni_int/kitei/reiki_honbun/w002RG00000993.html) .
- 中川純子, 2020, 「<報告>大学におけるハラスメントの多様化」『京都大学学生総合支援センター紀要』 49:63-67.
- 園井ゆり, 2003, 「大学におけるセクシュアル・ハラスメントの生起き過程:計量分析を通して」
『人間科学共生社会学』 3:39-52.
- 山田智・中道圭人・黒川みどり, 2015, 「教員養成系の大学生におけるハラスメントに関する意識と現状:大学でのハラスメントを防止するために」『静岡大学教育実践総合センター紀要』 24:15-24.

回答者のジェンダーとセクハラの不快感の関係

中村 萌愛

1 初めに

1.1 目的

近年、男性の性暴力被害が可視化されつつある。NHK が性暴力被害についてのアンケートを行ったところ、寄せられた 38383 件の回答のうち、437 件（全体の 1.1%）が男性の回答であった。男性は性暴力の被害を受けたとしても、それを訴えることが難しい傾向にあることが指摘されている。その理由として、「ばかにされる」ことへの心配や「規範的男性像と、自分が受けた性被害の事実や被害後の心身に対する影響が一致しない」ことが挙げられていた（NHK 2022）。ホモソーシャリティを体内化していることが、男性自身を苦しめることにつながっていると言えるだろう。性暴力被害と同様に、セクハラも被害を受けるのは女性だけではない。しかし、性暴力被害と同様に、依然として、女性「の」問題として認識されているように思われる。このような認識が広まっている状況では、男性はセクハラ被害に遭ったとしても、その被害を被害として受け止められず葛藤する可能性があるのではないだろうか。一方で、近年の大学生は、大学のオリエンテーションでセクハラについて説明を受ける機会があり、学生がセクハラは身近に起きうるものであるという認識をある程度持っていることは予想できるし、大学では、ジェンダーに関するテーマを取り上げた講義も増えてきていて、そこで得た学びが実生活に結びつき、それまでは仲間同士のいじりとしてしか捉えていなかったよ

うな他者の行為に対する認識にも変化が生じ、ホモソーシャルな関係に基づくコミュニケーションにも違和感を抱いている可能性はある。「現代社会の社会成員の間には、言動や態度や能力等において観察しうる『男らしさ』や『女らしさ』」（江原 2021:4）は存在するが、だからといって、それに変化が見られないわけではない。規範的な男性性や『男らしさ』も、これまでのフェミニズムの議論の蓄積によって位置が移っている可能性がある。本稿では、回答者(被害者)がどのようなジェンダーに属しているとしても、セクハラに該当する行為に対して示す不快感に共通する要素があるのかを検討する。

1.2 仮説

上述のことから、以下を仮説とし、検証する。

回答者のジェンダー問わず、同じ種類のセクハラを受けたら、同じ程度不快感を示す。

2 方法

2.1 データの処理の仕方

本稿では、先に紹介をされている、セクハラの不快感に関するアンケートの結果を使用する。「あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか」という形式で質問をし得られた不快感「まったく不快ではない」「不快ではない」「どちらかといえば不快ではない」「どちらかといえば不快」「不快である」「とても不快である」に0~5の数値を割り振って分析をする。

2.2 変数

- 回答者の性別

主要変数である回答者のジェンダーの分布は以下のとおりである。

表 1：ジェンダーの分布

女	男	その他
196	124	4

自身の性別を「その他」で回答したのは4名のみで、十分な分析が行うことが難しいため、比較を行う際は男女の結果のみを用いる。

● セクハラの種類

本稿で使用するアンケート使用したセクハラの種類は「手を握られる」「お尻を触られる」「いやらしい目で見つめられる」「顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られる」「既婚者と浮気をしているというデマを流される」「下ネタの冗談を聞かされる」「異性の好みを聞かれる」の7つである。

身体的な接触がある場合、行為がエスカレートする危険性などが考えられ、その時に被害者が感じる不快感は恐怖心に近いものであることが予想され、身体的な接触がある場合とない場合では「不快」が意味する内容が違ふということが考えられる。また、直接の接触はなくとも、「いやらしい目で見つめられる」「顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られる」も同様に、行為の発展が想像されるので、身体的な接触が全くないものとして扱いにくい。従って、これらを、身体への接触がある「手を握られる」「お尻を触られる」は「接触あり」、身体への接触はないものの身体的な知覚で行為を認識する「いやらしい目で見つめられる」「顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られる」は「関係あり」、身体への接触はなく加害者の発話行為による「既婚者と浮気をしているというデマを流される」「下ネタの冗談を聞かされる」「異性の好みを聞かれる」は「接触なし」に分類する。

● 加害者の分類

本稿で使用するアンケート使用した加害者の年齢と地位は、同級生、35 歳

非常勤教師、35歳教授、55歳非常勤講師、55歳教授の5つであるが、これらを年齢のみで分け、「同級生」、「35歳教員」、「55歳教員」に分類する。また加害者の性別も「女性」と「男性」で分類をする。

3 分析

セクハラの種類ごとに男女それぞれの不快感の平均値を表したグラフが以下の図1、図2である。これらの図の青色のエラーバーは95%信頼区間を示している。

図1：身体接触の程度と不快感(女性)

図2：身体接触の程度と不快感(男性)

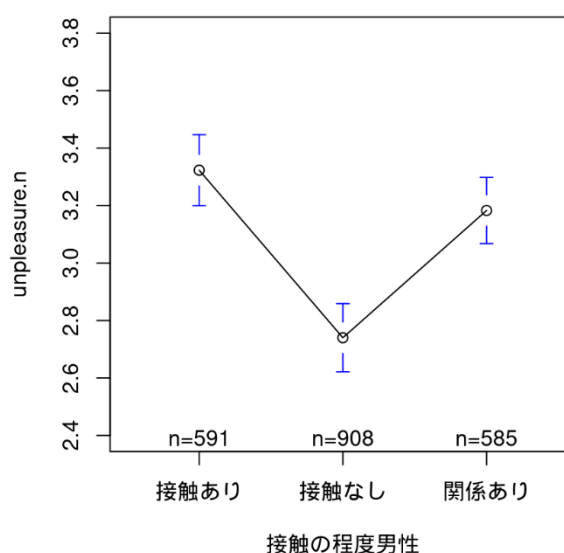
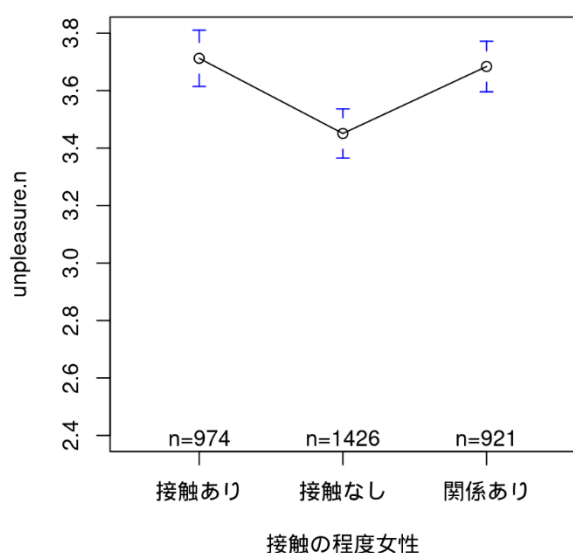


表2：不快感に関する回帰分析(主効果のみ)

	回答者全体	回答者女性	回答者男性
切片	3.66 *** (0.18)	2.96 *** (0.05)	2.65 *** (0.07)
接触あり ：接触なしが基準	0.40 *** (0.05)	0.28 *** (0.06)	0.61 *** (0.08)

関係あり	0.35 *** (0.05)	0.26 *** (0.06)	0.50 *** (0.08)
55 歳教員 : 35 歳教員が基準	0.21 *** (0.05)	0.22 *** (0.06)	0.21 * (0.09)
同級生	-0.71 *** (0.05)	-0.61 *** (0.06)	-0.87 *** (0.09)
回答者 女 : 性別その他が基準	-0.60 *** (0.18)		
回答者 男	-1.17 *** (0.18)		
加害者 男 : 女が基準	0.82 *** (0.04)	1.08 *** (0.05)	0.39 *** (0.07)

R ²	0.15	0.16	0.09
Adj. R ²	0.15	0.16	0.09
Num. obs.	5473	3321	2084
=====			

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

図1、図2から、男女ともに、「接触なし」 < 「関係あり」 < 「接触あり」の順で不快感が高まることと、「接触なし」と「関係あり」の差の方が、「関係あり」と「接触あり」の差よりも大きいことが明らかになった。女性に関していえば、「接触あり」と「関係あり」では、ほとんど差が見られない。一方で、セクハラの種類ごとで、男女が示す不快感の差を比較してみると、全ての項目で女性の方が男性よりも不快感を強く示していることが明らかである。ただ、表2より、回答者が女性の場合と回答者が男性の場合、女性の方が男性よりも-0.60-(-1.17)で0.57 高く不快感を示すが、「接触あり」や「関係あり」において比較すると、その差は、0.57 よりも小さいことが言え、「回答者のジェンダー問わず、セクハラ行為に対して同様の不快感を示す」という仮説は、不快感を示す度合いは女性の方が男性よりも強いという点で、ほとんど違いが見られないとまでは言い切れない

が、同様の傾向があることは言える。

4 考察

実施したアンケートへのコメントの中に、同じ行為であってもシチュエーションによって不快に思ったり思わなかったりするものがあるというものがあつた。もちろん、具体的なシチュエーションが与えられれば、アンケートとしては答えやすくなると思われるが、ある行為に対して、直感的に不快に思うか否かは、やはり、それまでの経験に由来するものだと思われる。今回のアンケートを通して、同じ種類のセクハラ行為に出会っても、女性の方が男性よりも強く不快感を示すということとは、やはり、それだけ、女性の方が危険晒されていると感じやすいということだろう。一方で、男性も女性と同程度とはいえないが、身体的に感じるセクハラ行為（「接触あり」「関係あり」）は男女ともに接触がない場合に比べて、強い不快感を示していたことから、男女である程度は、共通の認識を持ってセクハラ行為に対して反対を示すことができるということができよう。また、接触がない場合については、女性の方が男性よりも強く不快感を示していたが、男性の回答者のうちには、自分自身がその行為の受け手である場合、不快には思わなくとも、多く人がいる場で目上の立場の人から「下ネタの冗談を聞かされる」「異性の好みを聞かれる」人を見た場合に、不快に思うもしくは、不適切な行為であると判断する人はいる可能性はあるだろう。セクハラとホモソーシャルな結びつきの関係をより深く調べるためには、セクハラ行為を見かけたときや現場に居合わせた場合にその行為に対してどのように思うのかを調べてみるのと良いかもしれない。

5 参考文献

1. NHK, 2022, 「性暴力を考える vol.18——男性たちが明かした性被害 『無理やり挿入“させられた”』『誰にも信じてもらえない』』, NHK ホームページ, (2023 年 1 月 1 日 取 得 , <https://www.nhk.or.jp/gendai/comment/0026/topic072.html#0026072>).
2. 江原由美子, 2021, 『ジェンダー秩序 新装版』勁草書房.

被害者が男性の大学生となるセクハラについての考察

張 亮

1.背景

セクハラ (sexual harassment セクシュアル・ハラスメントの略称。以下、「セクハラ」と総称) とは、職場における性的な言動に対する他の従業員の対応等により当該従業員の労働条件に関して不利益を与えること又は性的な言動により他の従業員の就業環境を害することをいう (厚生労働省都道府県労働局雇用均等室により、2015) ^[8]。1974年にアメリカの法学者キャサリン・マッキノンは、「セクハラ」その概念を創出し、法規制を求める運動を行った。その時あるアメリカの女性が上司からのセクハラを避けたために、仕事を辞めなければならなかったが、「個人的理由」で辞めたと認められたので、失業給付金を受ける権利も失った。だから、彼女は法的措置に訴えたようになった。「セクハラ」は、訴訟の過程でマッキノンに初めて提出され、1986年に米国最高裁で認められたことである。そして、1980年代から1990年代初頭にかけて欧米の多くの国でセクハラに関する法律が導入された。日本においては、1980年代後半から1990年代前半にかけて、福岡事件など、職場のセクハラについての訴訟が話題になりはじめ、1989年の新語・流行語大賞の新語部門・金賞を「セクシャルハラスメント」が受賞。授賞式で表彰されたのは、2年前の1987年に裁判を終えている西船橋駅ホーム転落死事件の弁護士だった (北仲 2010)。

セクハラに対するイメージが一般的に、「男性＝加害者、女性＝被害者」という構図になる場合が多いが、それは男性がセクハラ of 被害者になる可能性がないと言えるわけでもない。ただ、女性より、男性がセクハラ of 被害者となることは十分な関心を寄せられると言えるわけでもないであろう。実は、アメリカやヨーロッパ諸国において、加害者が女性であり被害者が男性である場合は「逆セクハラ (reverse sexual harassment)」とされることもある (山崎 2003)。そして、職場にとどまらず、大学校内をはじめとするさまざまな場合のセクハラもますます明るみに出てきた。したがって本稿は、男子大学

[8] 出自：<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/00.pdf>

生がセクハラ被害者となることに基づき、加害者の性別・年齢・地位（権力格差）、被害者との関係、加害する行為などから、そうした「セクハラ」の特徴を明らかにしようと思うのである。

2.方法と仮説

2.1 仮説

本稿は、2022年に大学生（学部生と院生）を対象に実施した要因配置調査実験「セクハラ調査」のデータを用い、回答者が男性であるデータを抽出して量的分析を行うことである。有効的な回答総数は329人であり、そのなかに回答者が男性であるのは127人である。本稿はその127人の回答者のデータをふまえて量的分析を行うことである。

分析する前に、筆者は以下の仮説を提出しておく：被害者が男性の場合に、

- Q1: 親しい人より、あまり親しくない人からのセクハラの不快感が高いこと；
- Q2: 異性（女性）より、同性（男性）からのセクハラの不快感が高いこと；
- Q3: 同級生より、地位が高い方（非常勤講師と教授）からの不快感が高いこと；
- Q4: 言語より、近距離と肢体の接触というセクハラ的行為がもたらす不快感が高いこと；

2.2 データの処理

本稿はまず、原始のデータを表1のようなロングフォーマットに変換し、つまりヴィネット調査の問題の諸要素を抽出してそれを説明変数と、不快感を従属変数として設定しておく。文字の簡略化は表2のようになる。しかも、分析するために、表3のように、不快感を数値化した。こうしたデータ処理により、次章はそれに対する平均値の比較と回帰分析を行うようになる。

表3 ロングフォーマット

X	問題名	不快感	親しさ	加害者の性別	セクハラ の 行為	加害者の地位
1	a1.あまり親しくない35歳の教授.男.に手を握られた	5	あまり親しくない	男	手を	35歳の教授
2	a1.あまり親しくない35歳の教授.男.に手を握られた	4	あまり親しくない	男	手を	35歳の教授
3	a1.あまり親しくない35歳の教授.男.に手を握られた	2	あまり親しくない	男	手を	35歳の教授
4	a1.あまり親しくない35歳の教授.男.に手を握られた	4	あまり親しくない	男	手を	35歳の教授
5	a1.あまり親しくない35歳の教授.男.に手を握られた	4	あまり親しくない	男	手を	35歳の教授
6	a1.あまり親しくない35歳の教授.男.に手を握られた	1	あまり親しくない	男	手を	35歳の教授
7	a1.あまり親しくない35歳の教授.男.に手を握られた	3	あまり親しくない	男	手を	35歳の教授
8	a1.あまり親しくない35歳の教授.男.に手を握られた	2	あまり親しくない	男	手を	35歳の教授
9	a1.あまり親しくない35歳の教授.男.に手を握られた	5	あまり親しくない	男	手を	35歳の教授
10	a1.あまり親しくない35歳の教授.男.に手を握られた	2	あまり親しくない	男	手を	35歳の教授

表 4 説明変数の分類と簡略化

原始の説明変数	説明変数の分類	説明変数の簡略化
加害者との親しさ	親しい	親しい
	あまり親しくない	あまり親しくない
加害者の性別	男	男
	女	女
加害者の地位	同級生	同級生
	35歳の非常勤講師	35歳の非常勤講師
	35歳の教授	35歳の教授
	55歳の非常勤講師	55歳の非常勤講師
	55歳の教授	55歳の教授
セクハラ的行為	あなたが既婚者と浮気しているというデマを流された	デマ
	下ネタの冗談を聞かされた	冗談
	異性の好みを聞かれた	好み
	手を握られた	手を
	顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた	近寄
	いやらしい目で見つめられた	見つめ
	お尻を触られた	お尻

表 5 不快度の数値化

とても不快である	5
不快である	4
どちらかといえば不快	3
どちらかといえば不快ではない	2
不快ではない	1
まったく不快ではない	0

3.結果

3.1 平均値の比較

図 1 から図 5 までは、加害者との親しさ・加害者の年齢・性別・地位、セクハラ的行為とそれがもたらす不快感の度合いとの平均値グラフである。図 1 により、男性被害者にとっては、親しい人よりも、むしろあまり親しくない人からのセクハラの方は不快になりやすいことになる。図 2 からみれば、同級生より、35歳と55歳の相手にもたらされるセクハラの不快感の高さが顕著的である。その同時に、35歳より55歳の方と、非常勤講師より教授の方と共に不快感が高いということもはっきりに見えるであろう。図 3 によれば、男性によって同性からのセクハラはより高い不快感をもたらすことである。以上の初歩的な結論は、上文仮説の Q1 から Q4 を基本的に証明できるであろうと考えられる。しかし、図 4 にはセクハラ的行為の不快感は、だいたい「あなたが既婚者と浮

「あなたが既婚者と浮気しているというデマを流された」>「お尻を触られた」>「いやらしい目で見つめられた」>「顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られた」>「手を握られた」>「下ネタの冗談を聞かされた」>「異性の好みを聞かれた」というような度合いの順序になる。肢体の接触（例えば「お尻を触られた」）が高い不快感をもたらすと考えられるが、「あなたが既婚者と浮気しているというデマを流された」のような言語のセクハラの不快感は抜粋的であろう。それは、仮説 Q5 と違うようになる。

図1 加害者との親しさと不快度の平均値グラフ

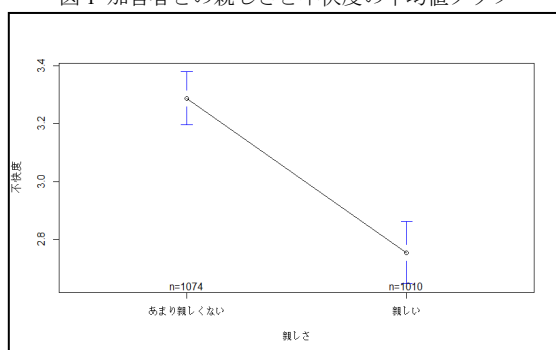


図2 加害者の地位と不快度の平均値グラフ

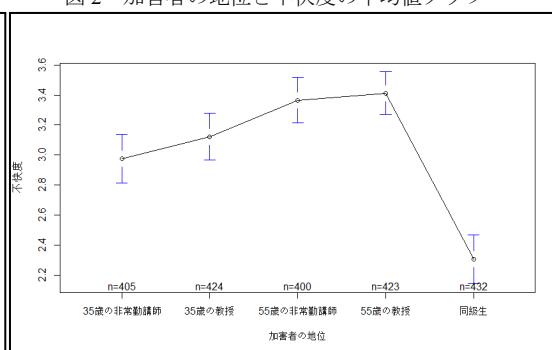


図3 加害者の性別と不快度の平均値グラフ

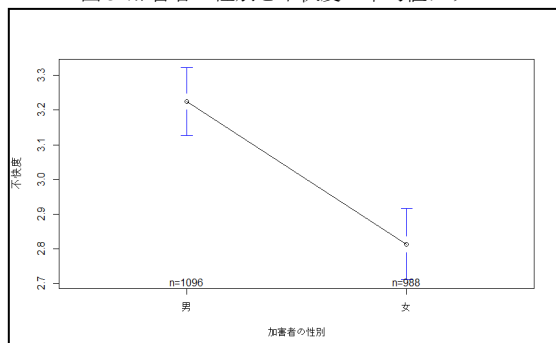
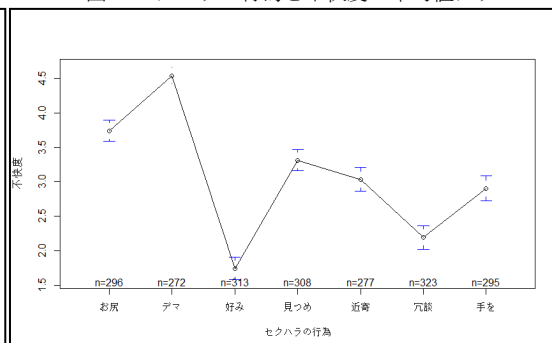


図4 セクハラ的行為と不快度の平均値グラフ



3.2 重回帰分析

平均値の比較だけで結論を出てくるのはやはり不十分である。実際にはそもそも問題名に二つ以上の変数があるために、ある変数の効果は他の変数に影響される可能性が高いのではないだろうか。だから、一層重回帰分析をしなければならないと考えられる。

全ての説明変数（つまり親しさ・加害者の性別・加害者の地位・セクハラ的行為）を加えて従属変数の不快度と重回帰分析を行うと、その結果は表4のようにになる。つまり、このモデルからは、以下の公式でと予測され、結論を出すことができる：

$$\begin{aligned} \text{不快感} = & 3.84 - 0.44 * \text{親しさ}^{[9]} + 0.32 * \text{性別}^{[10]} - 0.04 * \text{35歳の非常勤講師}^{[11]} + 0.23 * \text{55歳の教授} \\ & + 0.18 * \text{55歳の非常勤講師} - 0.86 * \text{同級生} + 0.82 * \text{デマ} - 1.45 * \text{冗談} - 1.91 * \text{好み} \\ & - 0.82 * \text{手を} - 0.40 * \text{見つめ} - 0.64 * \text{近寄} \end{aligned}$$

(1) セクハラの不快感は、加害者との親しさと相関性が顕著的であり、しかも係数(-0.44)は負数であるために、ほかの変数は不変すると、親しくない場合より、親しい場合の不快感が低いはずである。言い換えれば、仮説 Q1 と同じように、親しい人より、親しくない人からのセクハラの不快感が高いと意味している；

(2) セクハラの不快感は加害者の性別と相関性も顕著的で有意である。換言すれば、係数(0.32)が正数であるために、相手が異性(女性)より、同性(男性)の方からのセクハラの不快感が高いという仮説 Q2 は支持されているわけである；

(3) 加害者の地位は、相手の性別と親しさのような二分変数(dichotomous variable)と違い、表 4 からみれば、不快感は相手が同級生であることと相関性が有意であるが、相手が「35歳の非常勤講師」・「55歳の教授」・「55歳の非常勤講師」である場合には有意ではない、母集団に一般化することができないかもしれないと考えられる。

(4) 不快感は、セクハラの一連の行為との相関性が顕著であり、そのなか「既婚者と浮気しているというデマを流された」という行為は不快感に最も強い影響を持っている。引き続いて「お尻を触られた」^[12] > 「いやらしい目で見つめられた」 > 「顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られた」 > 「手を握られた」 > 「下ネタの冗談を聞かされた」 > 「異性の好みを聞かれた」というようになる。この結果は上文の平均値の比較と同じである。

表 6 諸説明変数とセクハラの不快感との重回帰分析

^[9] 親しいとき 1、あまり親しくないとき 0；

^[10] 男性のとき 1、女性のとき 0；

^[11] 相手は 35 歳の非常勤講師であるとき 1、ではないとき 0；その他はこれによって類推する。

^[12] 「お尻を触られた」の係数は 0 である。

全説明変数の重回帰分析	
(Intercept)	3.84 *** (0.10)
親しさ親しい	-0.44 *** (0.06)
加害者の性別男	0.32 *** (0.06)
セクハラ的行為デマ	0.82 *** (0.11)
セクハラ的行為冗談	-1.45 *** (0.11)
セクハラ的行為好み	-1.91 *** (0.11)
セクハラ的行為手を	-0.82 *** (0.11)
セクハラ的行為見つめ	-0.40 *** (0.11)
セクハラ的行為近寄	-0.64 *** (0.11)
加害者の地位35歳の非常勤講師	-0.04 (0.09)
加害者の地位55歳の教授	0.23 * (0.09)
加害者の地位55歳の非常勤講師	0.18 (0.09)
加害者の地位同級生	-0.86 *** (0.09)
R ²	0.35
Adj. R ²	0.35
Num. obs.	2084

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

親しさ:加害者の性別	
(Intercept)	2.97 *** (0.07)
親しさあまり親しくない:加害者の性別女	0.12 (0.10)
親しさ親しい:加害者の性別女	-0.46 *** (0.10)
親しさあまり親しくない:加害者の性別男	0.51 *** (0.10)
R ²	0.04
Adj. R ²	0.04
Num. obs.	2084

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

表7 親しさと加害者の性別との交互作用効果の検証

3.3 交互作用効果の検証

重回帰分析の結果により、全ての説明変数のなかに、ほかの変数より加害者の地位は不快感との相関性がそれほど強くないために、次はそれを除いてほかの三つの説明変数の交互作用効果を検証しようと思う。交互作用効果の検証の結果は表5-7のようになる。顕著ではなくて有意ではない結果を除き、以下の結論に達することができるはずだ：セクハラの実害者が男性である場合には、

- (1) あまり親しくないの同性（男性）からのセクハラの不快感は、平均的に親しい異性（女性）からのセクハラの不快感より、 $0.51 - (-0.46) = 0.97$ の不快感を高めるはずである；
- (2) 親しいであろう、親しくないであろう、「自分が既婚者と浮気しているというデマを流された」ことの不快感はともに高く、親しい人に「異性の好みを聞かれた」という最も不快感が低いことより、 $1.64 - (-1.45) = 3.09$ の平均の不快感を高める効果が見えるはずである；
- (3) 相手が男性であろう、女性であろう、「自分が既婚者と浮気しているというデマを流された」という行為の不快感の程度はともに最も高いであり、「異性の好みを聞か

れた」という行為の不快感の程度はともに最も低いである（上文にはすでに何回も証明したように）。不快感の差は最大で 2.91 にも及ぶすはずである。

表 8 親しさとセクハラ行為の交互作用効果の検証

親しさ: セクハラ行為	
(Intercept)	2.90 *** (0.13)
親しさあまり親しくない: セクハラ行為お尻	0.86 *** (0.17)
親しさ親しい: セクハラ行為お尻	0.81 *** (0.18)
親しさあまり親しくない: セクハラ行為デマ	1.64 *** (0.18)
親しさ親しい: セクハラ行為デマ	1.64 *** (0.17)
親しさあまり親しくない: セクハラ行為冗談	-0.23 (0.18)
親しさ親しい: セクハラ行為冗談	-1.03 *** (0.16)
親しさあまり親しくない: セクハラ行為好み	-0.67 *** (0.18)
親しさ親しい: セクハラ行為好み	-1.45 *** (0.16)
親しさあまり親しくない: セクハラ行為手を	0.34 * (0.17)
親しさ親しい: セクハラ行為手を	-0.52 ** (0.18)
親しさあまり親しくない: セクハラ行為見つめ	0.42 * (0.16)
親しさ親しい: セクハラ行為見つめ	0.41 * (0.18)
親しさあまり親しくない: セクハラ行為近寄	0.24 (0.17)

R ²	0.30
Adj. R ²	0.29
Num. obs.	2084

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05	

表 9 性別とセクハラ行為の交互作用効果の検証

加害者の性別: セクハラ行為	
(Intercept)	3.37 *** (0.11)
加害者の性別女: セクハラ行為お尻	0.12 (0.16)
加害者の性別男: セクハラ行為お尻	0.59 *** (0.16)
加害者の性別女: セクハラ行為デマ	1.26 *** (0.18)
加害者の性別男: セクハラ行為デマ	1.10 *** (0.16)
加害者の性別女: セクハラ行為冗談	-1.08 *** (0.16)
加害者の性別男: セクハラ行為冗談	-1.27 *** (0.16)
加害者の性別女: セクハラ行為好み	-1.65 *** (0.16)
加害者の性別男: セクハラ行為好み	-1.60 *** (0.16)
加害者の性別女: セクハラ行為手を	-0.73 *** (0.16)
加害者の性別男: セクハラ行為手を	-0.20 (0.16)
加害者の性別女: セクハラ行為見つめ	-0.50 ** (0.16)
加害者の性別男: セクハラ行為見つめ	0.40 * (0.16)
加害者の性別女: セクハラ行為近寄	-0.74 *** (0.17)

R ²	0.29
Adj. R ²	0.29
Num. obs.	2084

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05	

4.まとめと議論

以上の量的分析により、そもそもの仮説を解答できるわけである。つまり、被害者が男性の場合に、仮説 Q1（親しい人より、あまり親しくない人からのセクハラの不快感が高いこと）と、仮説 Q2（異性より、同性からのセクハラの不快感が高いこと）は支持された。仮説 Q3（同級生より、非常勤講師と教授のような地位が高い方からの不快感が高いこと）はほぼ支持されたが、弱い相関性しか示されていないために、結論を下すことは不十分であり、より精密な分析しなければならないと考えられる。仮説 Q4（言語より、近距離と肢体の接触というセクハラ行為がもたらす不快感が高いこと）は、あまり支持できないのではないだろうか。つまり、全部の分析には、「既婚者と浮気しているというデマを流された」という行為は、セクハラとみなされやすく最も高い不快感をもたらすわけである。それは、男性にとって肢体の接触というセクハラに対す

る典型的なイメージと違い（もちろん肢体の接触が不快ではないと意味しているわけでもない）、誹謗・中傷などのような言語の侵犯も同様に不快感をもたらしてセクハラ的行為とみなされうるということを示しているのではないかと考えられる。男性は女性ほど、身体的な攻撃を受けにくいであり（おそらく男性は身体的な接触にそれほど敏感ではないかもしれない）、だから自分が名誉を傷つけられていることをより気にしている可能性が高いのではないかと考えられる。要するに言えば、男性は女性と比べてセクハラの対象になりにくいのが、結果として、男性はセクハラに遭ったあとで黙っていく、あるいはそのような「プライベート」なことをセクハラと思っていないことが多くなるかもしれない。だから、セクハラを被害者を女性に限って扱うべきではなくて、さもなくば別のジェンダー差別に陥ってしまうのではないであろうかと考えられる。

5.参考文献

- (1) Catharine MacKinnon, *Sexual Harassment of Working Women: A Case of Sex Discrimination*, (Yale University Press, 1979). 村山淳彦・志田昇 訳『セクシャル・ハラスメント・オブ・ワーキング・ウィメン』（こうち書房, 1999）；
- (2) 河合壘、セクハラ判例の新展開（男性、同性へのセクハラ）に関する一素描[J]. *Artes liberales: Bulletin of the Faculty of Humanities and Social Sciences, Iwate University*= *アルテスリベラレス*：岩手大学人文社会科学部紀要, 2019 (104): 83-92；
- (3) 山崎文夫、セクシュアル・ハラスメントの諸様相と法的諸問題：逆セクシュアル・ハラスメント、同性間セクシュアル・ハラスメント、恋愛破綻型セクシュアル・ハラスメント及び性的えこひいきに関わる法的諸問題[J]. *比較法制研究*, 2003, 26；
- (4) 前川尚澄. 愛国・排外意識とジェンダーの関連の検討：JGSS-2008 の分析から. *日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集*[19] *JGSS Research Series No.16*, 105-114；
- (5) 中澤、同性愛に対する意識：JGSS を用いた規定要因分析と要因分解、*日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集*. 2021,19:115-126；

感情規則とセクハラに対する不快感の関係

田代 寛二

1. 導入

セクシャル・ハラスメント（以下セクハラ）が問題視されるようになって久しいが、セクハラ被害に遭った際に不快だと思っただとしても不快であると声を上げられない、あるいは不快であるという自分の感情を抑制してしまう可能性もあると考えられる。朝日新聞（2018）によれば、2017年12月から2018年1月に実施し、713件の回答を得たアンケートで、「日本社会は、セクハラなどの性被害について、声を上げやすい社会だと思いますか？」という問いに対して「どちらかというともう一方でもない」「そう思わない」と答えた人の割合の合計は約93%である。また、「声を上げにくい状況があるとしたら、その要因は何でしょう。最も大きいと思うものを選んでください。」という問いに対して、「「多少のセクハラは我慢すべきだ」という風潮がある」を選択した人は18.9%存在し、3番目に多く選ばれた理由である。朝日新聞という媒体の読者の傾向や、アンケートの実施方法からセクハラ問題に関心がある人が答えやすい傾向にあることを考慮する必要があるが、多くの人が声を上げにくいと感じていることがわかる。

崎山治男（2008）によれば、アメリカの社会学者ホックシールドは「感情に関する権利と義務の感覚」として感情規則の存在を指摘したと紹介している。この感情規則というのは、私たちは心理的・生理的に感情を抱くのではなく、社会的な状況やその場にいる人との関係性を考慮に入れて「適切な」感情を抱き、表出しているということを前提とし、社会的文脈が感情を規制する法則のことである。感情規則の存在を考慮に入れる

と、感情規則を自身に強く持つ人はセクハラに対して「不快である」という感情を抱きづらい、あるいは「不快である」と感じたとしてもそれを表出しづらいのではないかと考えられる。

また、アメリカの心理学者 Ekman&Friesen (1975 工藤訳編 1987) によれば、情動を表情に表す際に、どのような形で出力するか統御する表示規則というものがあり、日本人はアメリカ人に比べて他者がいる場面では表示規則が強く働くことがわかっている。そのため、日本において感情規則も強いのではないかと推測することもできるだろう。

以上より、日本において感情規則がセクハラの不快感を抑制する効果があるかどうかを明らかにすることによって、セクハラ被害に遭った場合に被害者が声を上げられない理由の一つを解明することができ、対策を考える上での一つの観点を提供できるのではないかと考える。

2. 調査方法

2-1. 調査データ

京都大学に在籍している大学生・院生を中心に、大学生・院生に対して、「セクハラ調査」と題したアンケート調査・要員配置調査実験を行い、そこから得られたデータを用いる。回答数は 329 件で、その中から大学には在籍していない者の回答を除き、有効回答数は 324 件であった。

2-2. 変数

- ・感情規則

「次のような意見についてどう思いますか。選択肢の中から一番あなたの考えに近いものを選んでください。」という問いを設け、「q4×1 不快感が顔に出ないように気をつけるべきだ。」「q4×2 不快なことや腹がたつことがあっても、目上の人には言うべきではない。」「q4×3 周りの人が楽しそうにしているときは、自分が楽しくなくても周りに合わせて楽しそうにすべきだ。」「q4×4 ネガティブな感情を持たないように普段から気をつけるべきだ。」「q4×5 自分自身の気持ちに正直であるべきだ。」以上5つの意見に対してどのように思うかを4段階で回収し、回答者の感情規則がどの程度強いかを計測した。また、「不快感が顔に出ないように気をつけるべきだ。」「不快なことや腹がたつことがあっても、目上の人には言うべきではない。」「周りの人が楽しそうにしているときは、自分が楽しくなくても周りに合わせて楽しそうにすべきだ。」「ネガティブな感情を持たないように普段から気をつけるべきだ。」の4つについては、「そう思う =3」「どちらかと言えばそう思う =2」「どちらかと言えばそう思わない =1」、「そう思わない =0」と数値を割り振り、「自分自身の気持ちに正直であるべきだ。」については「そう思う =0」「どちらかと言えばそう思う =1」「どちらかと言えばそう思わない =2」、「そう思わない =3」と数値を割り振った。

以上5つの意見に対する肯定度について、尺度の信頼性を図るために5項目のクロンバックの α を計算した結果が表1である。

	Raw_alpha	Std_alpha	G6(sm c)	Average_r	S/N	Alpha_se	Var_r	Med_r
Q4×1	0.392	0.301	0.379	0.097	0.432	0.006	0.101	0.047
Q4×2	0.436	0.352	0.418	0.120	0.543	0.005	0.105	0.079
Q4×3	0.358	0.262	0.328	0.082	0.355	0.006	0.084	0.056
Q4×4	0.462	0.380	0.446	0.133	0.612	0.005	0.118	0.136
Q4×5	0.718	0.723	0.673	0.395	2.610	0.003	0.007	0.435

Q4×5を取り除くと0.3ほど α が大きくなるため、q4×5、すなわち、「q4×5 自分自身の気持ちに正直であるべきだ。」に対する回答は感情規則から除外し、ほかの4つの質問項目に対する答えの合計値を感情規則(emotion.rule)という変数として分析を行った。

・セクシャル・ハラスメントの種類

加害者との親密性(close)に関して、「親しい」「あまり親しくない」の二つの変数を用いた。セクハラの種類について、加害者の地位(status)に関して「55歳教授」「55歳非常勤講師」「35歳教授」「35歳非常勤講師」「同級生」の5つの変数を設け、分析の際には「55歳教授」「55歳非常勤」「35歳教授」「35歳非常勤」「同級生」と簡略化した。加害者の性別(sex.offender)に関しては「男」と「女」の二つの変数を設けた。最後にセクハラの種類(type)について、「異性の好みを聞かれた」「下ネタの冗談を聞かされた」「あなたが既婚者と浮気しているというデマを流された」「いやらしい目で見つめられた」「顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた」「手を握られた」「おしりを触られた」の7種類を用意し、分析の際にはそれぞれ「異性好み」「下ネタ」「浮気デマ」「嫌らし目」「顔20cm」「手握られ」「お尻」と簡略化した。

・不快感

セクハラの例に対して「とても不快である」「不快である」「どちらかといえば不快」「どちらかといえば不快ではない」「不快ではない」「まったく不快ではない」の6段階で答えてもらい、それぞれ5~0という数値を与えた。

2-3. 仮説

以下の仮説を検証する。

1. 感情規則が強いほどセクハラに対する不快感は低い。
2. 一般に不快感が低いセクハラの場合、感情規則が強いほどセクハラに対する不快

感が低い、一般に不快感が高いセクハラの場合、その傾向は弱まる。

セクハラであると判断がつかない場合に、不快であると感じるべきだと思えることができないのではないかと考え、一般的に不快感が低いものに対しては感情規則の効果が強くなるのではないかと考えた。

3. 地位が高い人からのセクハラの場合、感情規則が強いほどセクハラに対する不快

感が低い、地位が低い人からのセクハラの場合、その程度は弱まる。

感情規則が強い人のほうが、地位が高い人に対して意見を言うことを嫌う傾向にあるのではないかと推測し、地位が高い人からのセクハラに対する不快感に対して、感情規則がより大きな影響を及ぼすのではないかと考えた。

4. あまり親しくない人からのセクハラの場合、感情規則が強いほどセクハラに対す

る不快感が低い、親しくない人からのセクハラの場合、その程度は強まる。

感情規則は親しくない人のほうが、不満を伝えるにいために、強く働くと考えたので、以上のような仮説を立てた。

5. 回答者が男性の場合、感情規則が強いほどセクハラに対する不快感が低い、次

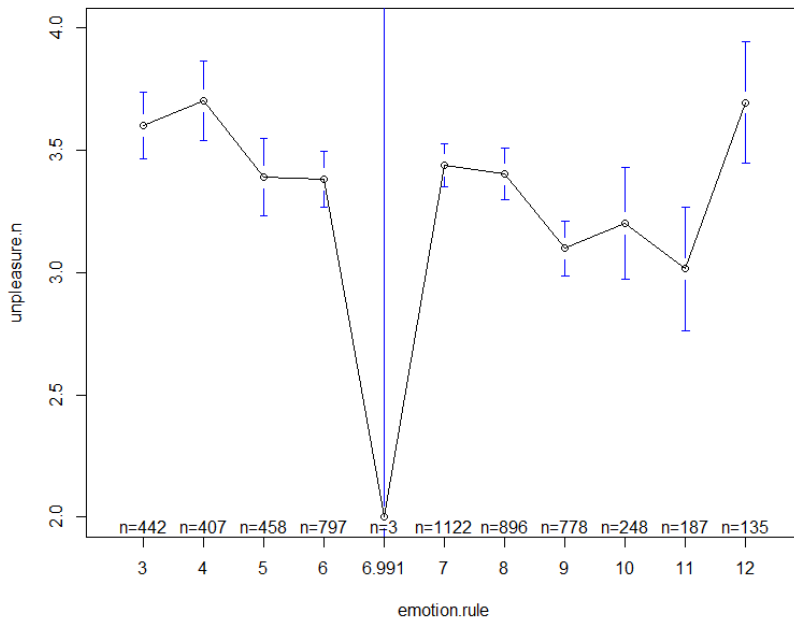
回答者が女性の場合、その傾向は強まる。

感情規則は場に適した感情を表出しなければならないという考えであるため、とりわけセクハラという相手に対して危機感を覚えるような状況では女性のほうが男性より力が弱いために感情規則が強くなるのではないかと考えた。

3. 分析結果

3-1. 感情規則とセクハラに対する不快感の関係

感情規則の強さごとにセクハラに対する不快感の平均値をグラフにしたものが図 1 である。感情規則を独立変数とし、セクハラに対する不快感を従属変数として最小二乗法 (OLS) で回帰分析した結果が表 2 である。



(図 1：感情規則とセクハラに対する不快感の関係)

表2: 感情規則とセクハラに対する不快感の関係1

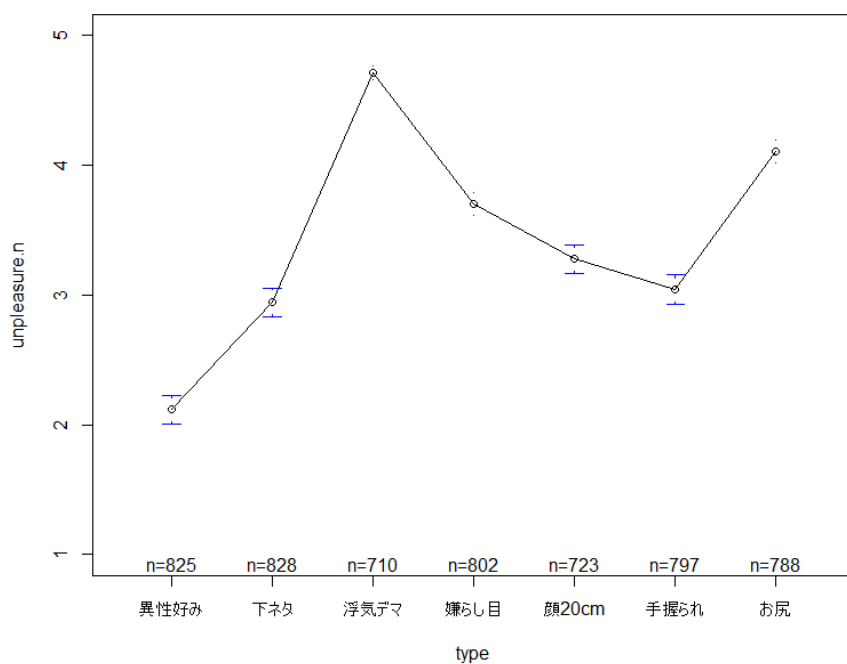
Model 1	
(Intercept)	3.601***
	(0.047)
emotion.rule	-0.040***
	(0.008)
Num.Obs.	5473
R2	0.005
R2 Adj.	0.005

+ p < 0.1, * p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001

図 1 によれば、感情規則とセクハラに対する不快感に有意な差があるかどうかは分からない。表 2 によれば、感情規則が強いほど有意に不快感は低くなっていることがわかる。ただ、決定係数が低いことからばらつきが大きいことは考慮に入れるべきであろう。

3-2. セクハラの種類ごとの分析

次に、セクハラの種類ごとにセクハラに対する不快感の平均値をグラフにしたものが図2である。セクハラの種類を独立変数にとりセクハラに対する不快感を従属変数にとって重回帰分析を行った結果が表3である。



(図2：セクハラの種類とセクハラに対する不快感の関係)

表3: セクハラの種類とセクハラに対する不快感の関係

	Model 1
(Intercept)	2.118*** (0.049)
type下ネタ	0.828*** (0.070)
type浮気デマ	2.595*** (0.072)
type嫌らし目	1.583*** (0.070)
type顔20cm	1.159*** (0.072)
type手握られ	0.923*** (0.070)
typeお尻	1.992*** (0.070)
Num.Obs.	5473
R2	0.234
R2 Adj.	0.233

+ p < 0.1, * p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001

表 3 によると、「浮気デマ」、「お尻」、「嫌らし目」、「顔 20cm」、「手握られ」、「下ネタ」の順に不快度が高い傾向にあることが分かった。

次に、セクハラの種類ごとに感情規則を独立変数、セクハラに対する不快感を従属変数にとって最小二乗法（OLS）で回帰分析を行った結果が表 4,5 である。

表4: 感情規則とセクハラに対する不快感の関係
2

	異性好み	下ネタ	浮気デマ
(Intercept)	2.464***	3.089***	4.761***
	(0.115)	(0.120)	(0.062)
emotion.rule	-0.066***	-0.027	-0.009
	(0.019)	(0.020)	(0.010)
Num.Obs.	825	828	710
R2	0.014	0.002	0.001
R2 Adj.	0.013	0.001	-0.0003

+ p < 0.1, * p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001

表5: 感情規則とセクハラに対する不快感の関係3

	嫌らし目	顔20cm	手握られ	お尻
(Intercept)	3.889***	3.533***	3.520***	4.389***
	(0.099)	(0.119)	(0.128)	(0.098)
emotion.rule	-0.035*	-0.048*	-0.090***	-0.052**
	(0.016)	(0.020)	(0.021)	(0.016)
Num.Obs.	802	723	797	788
R2	0.006	0.008	0.022	0.013
R2 Adj.	0.004	0.007	0.020	0.012

+ p < 0.1, * p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001

表 4,5 によれば、「異性好み」「嫌らし目」「顔 20cm」「手握られ」「お尻」に関しては、感情規則が強いほどセクハラに対する不快感が抑えられる傾向が有意にあることがわかった。それ以外については有意な結果を示さなかった。

そこで、有意な結果を示したモデルの中で、一般に最も不快感が高い「お尻」と「手握られ」の回帰係数の差を検定した結果が表 5 である。

表6:「お尻」と「手握られ」のモデルにおける回帰係数の差の検定				
	differences of coefficients	z.values	p.values	sig
(Intercept)	0.868	5.387	0.000	***
Emotion.rule	0.038	1.417	0.157	

表6によると、回帰係数の差は有意な差を示さなかった。

3-3. セクハラに加害者の地位ごとの分析

次に、セクハラに加害者が「55歳教授」と「同級生」ごとに、感情規則を独立変数、セクハラに対する不快感を従属変数にとって最小二乗法（OLS）で回帰分析を行った結果が表7である。

表7:感情規則とセクハラに対する不快感の関係4

	55歳教授	同級生
(Intercept)	3.994***	3.017***
	(0.095)	(0.115)
emotion.rule	-0.058***	-0.045*
	(0.016)	(0.019)
Num.Obs.	1107	1124
R2	0.012	0.005
R2 Adj.	0.011	0.004

+ p < 0.1, * p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001

表7によれば、加害者が「55歳教授」の場合であっても、「同級生」の場合であっても感情規則が強い人はセクハラに対する不快感が低い傾向にあることが分かった。

次に、両モデルの回帰係数の差を検定した結果が表8である。

表8:「55歳教授」と「同級生」のモデルにおける回帰係数の差の検定				
	differences of coefficients	z.values	p.values	sig

(Intercept)	0.977	6.539	0.000	***
Emotion.rule	-0.012	-0.507	0.612	

表 8 によれば、両モデルの回帰係数に有意な差があるという結果は出なかった。

3-4. セクハラに加害者との親しさごとの分析

次に、セクハラに加害者との親しさにおいて、「親しい」と「親しくない」ごとに、感情規則を独立変数、セクハラに対する不快感を従属変数にとって最小二乗法（OLS）で回帰分析を行った結果が表 9 である。

表9: 感情規則とセクハラに対する不快感の関係6

	親しい	親しくない
(Intercept)	3.331***	3.843***
	(0.073)	(0.060)
emotion.rule	-0.041***	-0.037***
	(0.012)	(0.010)
Num.Obs.	2646	2827
R2	0.004	0.005
R2 Adj.	0.004	0.005

+ p < 0.1, * p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001

表 9 によれば、加害者と親しくても親しくなくても感情規則が強いほど不快感を抑える効果が優位にあることがわかる。

次に、両モデルの回帰係数の差を検定した結果が表 10 である。

表 10 : 「親しい」と「親しくない」のモデルにおける回帰係数の差の検定				
	differences of coefficients	z.values	p.values	sig
(Intercept)	-0.513	-5.461	0.000	***

Emotion.rule	-0.004	-0.232	0.817	
--------------	--------	--------	-------	--

表 10 によれば、両モデルの回帰係数に有意な差はなかった。

3-5. 回答者の性別ごとの分析

回答者の性別ごとに、感情規則を独立変数、セクハラに対する不快感を従属変数にとって最小二乗法（OLS）で回帰分析を行った結果が表 11 である。

表11: 感情規則とセクハラに対する不快感の関係6

	男	女
(Intercept)	3.201***	3.838***
	(0.078)	(0.059)
emotion.rule	-0.032*	-0.045***
	(0.013)	(0.010)
Num.Obs.	2084	3321
R2	0.003	0.007
R2 Adj.	0.002	0.006

+ p < 0.1, * p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001

回答者が男性であっても女性であっても感情規則が強い人のほうが不快感を低く感じる傾向にあることが分かった。

両モデルの回帰係数の差を検定した結果が表 12 である。

表 12 : 「親しい」と「親しくない」のモデルにおける回帰係数の差の検定				
	differences of coefficients	z.values	p.values	sig
(Intercept)	-0.638	-6.507	0.000	***
Emotion.rule	0.013	0.780	0.435	

表 12 によれば、両モデルの回帰係数に有意な差は見られなかった。

4. 考察

感情規則の強さはセクハラに対する不快感を抑制する効果が有意にあることが分かったため、仮説 1 は支持された。しかし、仮説 2~5 は有意な結果を得ることができなかった。係数の差はあったものの、あまり大きくなかったため、有意な結果が出なかったと考えられる。

今回の調査の限界としては、大学生が対象であったため、感情規則が社会人よりも低い傾向にあることが考えられる。というのも、より感情規則が強く働くであろう、感情労働を行う職についている人では、感情規則による不快感の抑制効果がより強く出る可能性が考えられるだろう。

参考文献

朝日新聞, 2018, 「「#MeToo」どう考える? - フォーラム: 朝日新聞デジタル」

(<https://www.asahi.com/opinion/forum/062/>, 2023.1.18)

Ekman, Paul, & Friesen, Wallace, V., 1975, "Unmasking the face: A guide to recognizing emotions from facial clues." Prentice-Hall. (エクマン, P. ・フリーセン, W. V. 工藤力訳編, 1987, 『表情分析入門——表情に隠された意味をさぐる——』, 誠信書房)

崎山治男, 2008, 「20 感情の管理: A. R. ホクシールド『管理される心』」井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス 1: 自己・他者・関係』世界思想社, 199-208.

セクハラの不快感に加害者の性別が与える影響

平島 康晟

1. はじめに

1.1. 問題の背景と意義

セクシュアル・ハラスメント（以下セクハラ）は、被害者に強い精神的苦痛を与える重大な人権問題として人々の間で広く認知されるようになってきている。また、セクハラは男女間の非対称的な権力関係と関係していると考えられ、性差別の問題としても捉えられている（マッキノン 1999）。セクハラが問題となるとき、多くは男性が加害者で女性が被害者であることはその一つの表れである。こういった男女間での権力格差は、セクハラにおいて根深い問題となっていると考えられる。本稿ではそのような問題関心に基づき、設定した仮説を検証するという形で議論を進めていく。

1.2. 仮説

セクハラにおける男女間の権力格差の問題は、第一に男性の強い権力に対する恐怖や嫌悪というものに現れると考えられる。また、男性が加害者であればセクハラの不快感を高めるようなセクハラ行為であっても、相対的に弱い権力しか持たない女性が加害者であればセクハラの不快感をあまり高めないということも考えられる。具体的には強い権力を有する男性が加害者であれば親しくない人にでも無理やりセクハラをすることができ、それに対し女性はそれができず、そういった不平等さは不快感に影響を与えると考えられる。また、身体的なセクハラについても男性が加害者であれば抵抗が困難であり、それに対し女性が加害者であれば比較的抵抗は容易であり、それも不平等さとして不快感に影響を与えると考えられる。以上のことを実証するために、次のような仮説を立て、検証する。

仮説 1: 女性が加害者である場合に比べ、男性が加害者である方がセクハラに対する不快感が高くなる。

仮説 2: 女性が加害者である場合に比べ、男性が加害者である方が親しくない人によるセクハラに対する不快感は高まる。

仮説 3: 女性が加害者である場合に比べ、男性が加害者である方が身体的なセクハラに対する不快感は高まる。

2. 方法

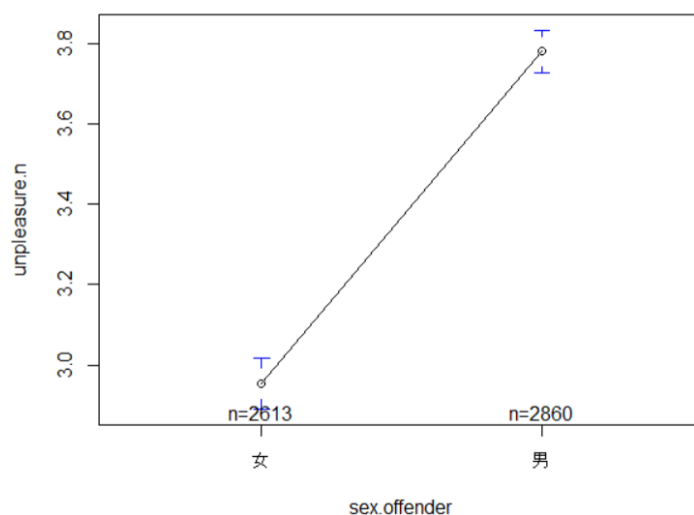
回答者には質問に対して不快感を「1 とても不快である」、「2 不快である」、「3 どちらかといえば不快」、「4 どちらかといえば不快ではない」、「5 不快ではない」、「6 まったく不快ではない」の六段階で評価してもらった。この不快感については分析の際には変数名を「unpleasure.n」とし、それぞれを5、4、3、2、1、0と数値化して処理した。

質問文における加害者の性別については、「男」/「女」の二つの尺度からなる「sex.offender」という変数名の変数として処理した。同様に、加害者との親しさについては「親しい」/「親しくない」の二つの尺度からなる「close」という変数名の変数として処理した。セクハラの種類については、元の質問文では「異性の好みを聞かれた」、「下ネタの冗談を聞かされた」、「あなたが既婚者と浮気しているというデマを流された」、「いやらしい目で見つめられた」、「顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られた」、「手を握られた」、「お尻を触られた」という内容だったものを、「異性好み」/「下ネタ」/「浮気デマ」/「嫌らし目」/「顔 20cm」/「手握られ」/「お尻」の七つの尺度とし、それらからなる「type」という変数名の変数として処理した。

3. 結果

3.1. 平均値の比較

まず仮説 1 を検証するために、加害者の男女別のセクハラに対する平均不快感の比較を行った。加害者が「男」であるときの平均不快感は 3.780769、加害者が「女」であるときの平均不快感は 2.953310 であった。また、これを図に表したものが図 1 である。エラーバーは 95%信頼区間の範囲を示している。平均値の差の検定を行ったところ、t 値-19.473、p 値 2.2e-16 であり、平均値の間には 0.1%水準で有意な差があることが示された。したがって仮説 1 の通り、加害者が男性である場合の方が女性である場合よりセクハラに対する不快感が高いといえる。



3.2. 回帰分析

続いて仮説 2 と 3 を検証するために、加害者の男女別に加害者との親しさとセクハラの種類を示す変数を独立変数とする回帰分析を行った（表 1）。表 1 より「親しくない」において「女」の方が傾きが大きく、また「お尻」、「顔 20cm」、「手握られ」においては「男」の方が傾きが大きいことがわかる。

さらに回帰分析の結果がサンプリングの際の偶然である可能性を考え、男女の回帰係数の差の検定を行った。結果は表 2 のようになった。表 2 より男女の回帰係数の差は、

「顔 20cm」において 5%水準で有意であり、「親しくない」、「手握られ」、「浮気デマ」において 0.1%水準で有意であることが明らかになった。以上のことから仮説 3 は一部支持され、仮説 2 とは反対の結果となった。

表 1 加害者の男女別の加害者との親しさとセクハラの種類についての回帰分析

	男	女
(Intercept)	2.38 *** (0.07)	1.48 *** (0.07)
close 親しくない	0.31 *** (0.05)	0.60 *** (0.06)
type お尻	1.93 *** (0.09)	1.84 *** (0.10)
type 下ネタ	0.73 *** (0.09)	0.94 *** (0.10)
type 顔 20cm	1.20 *** (0.09)	0.87 *** (0.10)
type 嫌らし目	1.50 *** (0.09)	1.48 *** (0.10)
type 手握られ	1.17 *** (0.09)	0.47 *** (0.10)
type 浮気デマ	2.18 *** (0.09)	2.96 *** (0.11)
R ²	0.24	0.31
Adj. R ²	0.24	0.31
Num. obs.	2860	2613

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

表 2 男女の回帰係数の差の検定

	differences of coefficients	z.values	p.values	sig
(Intercept)	0.903	9.312	0.000	***
close 親しくない	-0.297	-4.050	0.000	***
type お尻	0.092	0.692	0.489	
type 下ネタ	-0.210	-1.604	0.109	
type 顔 20cm	0.337	2.470	0.014	*
type 嫌らし目	0.016	0.118	0.906	
type 手握られ	0.703	5.287	0.000	***
type 浮気デマ	-0.775	-5.631	0.000	***

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

4. 議論

本稿ではセクハラに内在する男女間の権力格差という問題を取り上げ、それが実際にセクハラにどのように現れるのかということについて仮説を立て、検証した。女性が加害者である場合に比べ、男性が加害者である方がセクハラに対する不快感が高くなるという仮説1については、男性が加害者である場合と女性が加害者である場合の平均不快感の比較を行い、平均不快感は男性の方が有意に高い結果となり、仮説は支持された。女性が加害者である場合に比べ、男性が加害者である方が親しくない人によるセクハラに対する不快感が高くなるという仮説2については、回帰分析及び回帰係数の差の検定を行ったが、仮説は支持されず、むしろ女性が加害者である方が男性が加害者であるよりも親しくない人によるセクハラに対する不快感は高まるという結果となった。女性が加害者である場合に比べ、男性が加害者である方が身体的なセクハラに対する不快感が高まるという仮説3についても、仮説2と同様の方法で検証を行った。身体的なセクハラである「顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた」、「手を握られた」については仮説が支持される結果となったが、同じ身体的なセクハラである「お尻を触られた」については仮説は支持されなかった。したがって仮説3は一部支持されたといえる。

仮説1が支持されたことで、男女間の権力格差がセクハラの問題に絡んでいる可能性が数量的に示された。しかし、この結果からは男女間の何らかの違いがセクハラの不快感の差に影響を与えてはいるものの、それが権力格差によるものであると断定することはできず、さらなる調査を進める必要があるだろう。また仮説2の検証結果より、加害者の性別の違いが親しくない人によるセクハラの不快感の増幅に影響を与えている。それは男性の強い権力が不快感を増幅させるという関係ではないことは明らかだが、権力格差がここに関係している可能性も残っている。それはつまり、親しくない女性からセクハラをされることが珍しいことであり、それに対する免疫がないために不快感が高まるという可能性である。それが正しいとすれば、親しくない男性からセクハラをされることは多くの人にありふれたものだと感じられていることになり、それは男性による支配が暗黙のうちに存在していることを示しているといえよう。仮説3の検証結果からは仮説1と同様に、男女間の何らかの違いが身体的なセクハラの不快感の差に影響を与えていることがわかった。仮説3についてもそれが権力格差によるものであることを実証するためにさらなる調査が必要である。それに加え、身体的なセクハラの中で「お尻を触られた」だけが有意な差ではなかったが、なぜそれだけが他と異なる結果となったのかということについても調査する必要があるだろう。

セクハラにおいて権力格差という問題は可視化が困難である一方で、セクハラの本質が権力格差にあるとすれば、それを可視化することは問題解決にとって必要不可欠である。したがって、セクハラにおける権力格差を数量的に明らかにすることを目的とする本研究は、セクハラ問題の解決にとって重要な意義を持っているといえよう。

[参考文献]

キャサリン・A・マッキノン著（村山淳彦監訳；志田昇ほか訳）（1999）『セクシャル・ハラスメントオブワーキング・ウィメン』、こうち書房

セクハラのパ模と不快度について

保田 智紀

1. はじめに

昨今、大学におけるセクシュアル・ハラスメント（以下、セクハラ）の相談件数は増加傾向にあるという。90年代以降、矢野事件をはじめ大学におけるセクハラ的事例が明るみに出てからは、各大学でセクハラ防止のために取り組みが行われ続けているが、撲滅には至っていないのが実情だろう。

そうした状況を踏まえ、セクハラの種類によって不快度にどのような差が生じるのかは1つの論点となりうる。本調査内の質問項目で設定されたセクハラは、「異性の好みを聞かれた（以下、『異性好み』）」、「下ネタの冗談を聞かされた（以下、『下ネタ』）」、「あなたが既婚者と浮気しているというデマを流された（以下、『浮気デマ』）」、「いやらしい目で見つめられた（以下、『嫌らし目』）」、「顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた（以下、『顔20cm』）」、「手を握られた（以下、『手握られ』）」、「お尻を触られた（以下、『尻触られ』）」、の7タイプである。この7タイプのセクハラを「大規模/小規模」の軸で分類すると、大規模なセクハラに当てはまるものが「浮気デマ」であり、小規模なセクハラに当てはまるものはそれ以外の6つのセクハラである。

上記のように考える根拠は以下の通りである。「異性好み」、「下ネタ」、「嫌らし目」、「顔20cm」、「手握られ」、「尻触られ」のようなセクハラは最低でも加害者と被害者の2人が存在すれば、セクハラが成立するには十分なはずである。それに対して、「浮気デマ」の場合、デマの受け取り手である第三者が一定程度存在することが前提として想定

されるだろう。よって、「浮気デマ」はより多くの人間を巻き込む「大規模な」セクハラなのであり、それ以外の6つは「小規模な」セクハラだと考えられるのである。

また規模の小さなセクハラ（「浮気デマ」以外）であれば、加害者と被害者の間で解決がなされれば、それほど尾を引かないかもしれないが、「浮気デマ」はたとえ当事者間で解決を迎えてもその影響（信頼の喪失、レッテル貼り）は残り続ける可能性が高いと推測できる。他にも、デマの発信者（加害者）の地位にも目を向けたい。発信者の地位が上であればあるほど、デマの波及範囲や波及速度、第三者が抱く信憑性も高まると考えられ、それが不快感の高まりに繋がるのではないだろうか。

そこで本稿では、調査データをもとに「規模が大きいセクハラの方が、規模の小さいセクハラより不快感が高い」という仮説を立てる。さらに、「浮気デマ」を発信した人間（加害者）の地位の高低と不快感の関連についても、探ることとする。

2. 方法

2-1. データの処理

まず調査データをロングフォーマットに変換した上で、質問項目を加工した。

1. 不快感を数値化した変数の作成（従属変数）

各セクハラに対する不快感を尋ねる質問項目（q4、q5）に対する回答において、「1 とても不快である」には5、「2 不快である」には4、「3 どちらかといえば不快」には3、「4 どちらかといえば不快ではない」には2、「5 不快ではない」には1、「6 まったく不快ではない」には0、というようにそれぞれに値を割り振った（6段階尺度）。この値が高ければ高いほど、セクハラに対する不快感が高いことを示す。本稿の従属変数は、

平均不快感である。

2. ヴィネットの因子変数の作成（独立変数）

まず、質問項目のヴィネット内のセクハラを規模の大小で分け、それぞれ「大規模」、「小規模」に分類した。具体的には、「浮気デマ」を大規模に、それ以外の6つのセクハラ（「異性好み」、「下ネタ」、「嫌らし目」、「顔 20cm」、「手握られ」、「尻触られ」）を小規模に分類した。

さらに、セクハラ以外の規模の他に、ヴィネットの因子変数として、①加害者の地位、②加害者と被害者の親しさ、③加害者の性別を用意した。

3. 結果

3-1. セクハラによる不快感の差

セクハラによる規模によって、不快感に差が生じるかどうかを検証した結果を図1で示す。図1から、セクハラに対する平均不快感は大規模なセクハラの方が小規模なセクハラより高いことがわかる。また規模の95%信頼区間は重なっておらず、統計的に有意な差があると考えられるが、念の為にt検定を用いて平均不快感の差を計算した。その結果、 p 値 $< 2.2e-16$ であり、有意水準5%で有意であることがわかった。

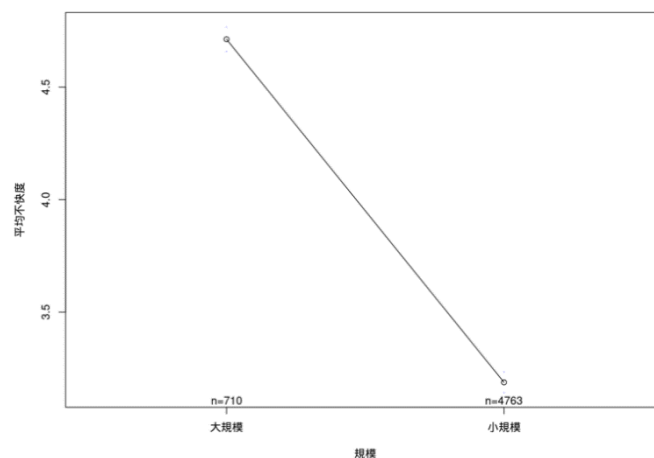


図1 規模別の平均不快感

3-2. 重回帰分析

セクハラを「大規模」と「小規模」に分けた上で、「平均不快感」を従属変数とし、地位、親しさ、加害者の性別を独立変数として、重回帰分析を行った結果を表1で示す。表1から、決定係数は「小規模」の方が決定係数は大きく、「大規模」の場合で地位の効果は有意ではないとみられる。むしろ「小規模」なセクハラにおいて、地位は有意な効果があると考えられる。

表1 重回帰分析の結果

	大規模	小規模
切片	4.72 *** (0.07)	2.41 *** (0.06)
地位 35歳非常勤	0.13 (0.11)	0.04 (0.07)
地位 55歳教授	0.02 (0.08)	0.27 *** (0.07)
地位 55歳非常勤	0.06 (0.08)	0.21 ** (0.07)

地位同級生	-0.08 (0.09)	-0.77 *** (0.07)
親しさ親しくない	0.02 (0.06)	0.71 *** (0.04)
加害者性別男	-0.07 (0.06)	0.89 *** (0.04)

決定係数	0.01	0.18
調整済み決定係数	-0.00	0.18
Num. obs.	710	4763

=====
 *** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05 カッコ内は標準誤差

4. 議論

本稿では、平均不快感の差の検定と重回帰分析を通じて、セクハラ規模と不快感の関係性を明らかにしてみた。結果として、セクハラ規模は有意な効果があり、規模が大きいセクハラの方が、規模の小さいセクハラより不快感が高く、本稿の仮説は支持された。おそらく、規模が大きいセクハラほど第三者に与える影響力が大きく、その点を人々は懸念するためだと考えられる。

しかし仮説とは異なり、大規模なセクハラにおいて、加害者の地位の効果は有意ではなかった。もしかすると、加害者（発信者）の地位それ自体は、デマの伝播やデマに起因する不快感にはあまり影響を与えないのかもしれない。

今後の課題として、質問紙調査の質問項目内に、具体的な人数を含めどの程度の規模のセクハラを想定しているかを明示することで、さらに詳細な検証が可能になるかもしれない。また安田（2013）が示唆しているように、デマの拡散にはハブが果たす役割が大きいことから、加害者の人脈に関する情報を加えて検証することも考えられるだろう。

参考文献

成瀬麻夕・川畑智子, 2016, 「日本の大学におけるハラスメント関連資料から見えた特徴 - テキスト分析を用いたセクシュアル・ハラスメント事例の検討 -」『現代社会学研究』北海道社会学会, 29: 43-61.

松本克美, 2005, 「キャンパス・セクシュアル・ハラスメント訴訟と大学の教育研究環境配慮義務--大学と加害教員の責任の並存及び大学の処分の相当性をめぐって」『立命館法學』2・3: 1147-1182.

安田雪, 2013, 「ソーシャルメディア上の情報拡散の特性 - 東日本大震災時の事例とハブの役割」『関西大学社会学部紀要』45(1): 33-46.

ホモフォビア（同性愛嫌悪）がセクハラに対する不快の感じ方に与える影響

—被害者視点から見たセクハラの様態に着目して—

面田 純治

1.始めに

セクシャルハラスメント（以下セクハラと呼称）とは、様々な状況における幅広い行為を内包する概念である。例えば、厚生労働省が公開しているパンフレットは、セクハラを、『職場』において行われる、『労働者』の意に反する『性的な言動』に対する労働者の対応によりその労働者が労働条件について不利益を受けたり、『性的な言動』により就業環境が害されること」（厚生労働省 2018: 2）と定義した上で、その例として「性的な事実関係を尋ねること」や「食事やデートへの執拗な誘い」、「わいせつ図画を配布・掲示すること」や「強制わいせつ行為」などの多様な例を挙げている（厚生労働省 2018）。これらはいずれも「性的な言動」としてまとめられているが、それらの行為が加害者・被害者にとってどのような意味を持った行為であるのか、どのように受け止められるのかについては、具体的なそれぞれの行為やその形式により異なる可能性があると考えられる。セクハラを類型化して見るという発想はかねてより存在しており、例えば、マツキノンによる「対価型」「職場環境型」という類型が挙げられる（井上・伊藤編 2010）。セクハラという概念が内包するものの多様性として、その種類だけではなく、加害者・被害者となる者の属性についての多様さについても見過ごすことはできないであろう。例えば、セクハラに加害者と被害者の関係は、職場における上司や同僚といった関係にとどまらず、教師と生徒や患者と医療従事者など多彩である。また、その性別についても、女性・男性、あるいはそれらに当てはまらないような性の在り方をとる者いずれもが加害者にも被害者にもなり得るのであり、さらには加害者と被害者の性別の組み合わせ

せについても同性と異性、どちらのパターンも想定され得るのである。数多くの属性に関わる変数の内、本稿で問題としたいのは、加害者と被害者の性別の組み合わせによってセクハラに対する不快感にはどのような影響が生じるのかについてである。同性愛（者）に対する恐怖心や否定的な態度、偏見、社会における差別的行為やそれをもたらす社会構造を指し示す概念をホモフォビア（同性愛嫌悪）という（大澤ほか編 2012）。ホモフォビアは、セクハラにおいても効果を持つのであろうか。ホモフォビアがもしセクハラにおいても効果を持つのだとすれば、セクハラの中でもより被害者に対して性的な意図を持っていると被害者により想像されやすい行為（先ほどの例では「強制わいせつ」など）の場合には、異性からでそのセクハラが行われたときよりも同性からそのセクハラが行われたときにより強い不快感を感じるはずである。他方で、セクハラの中でも被害者に対する性的な意図が被害者に想像されにくい行為（先ほどの例だと「わいせつ図画を配布・掲示すること」など）では、相手が同性であるか異性であるかはセクハラに対する不快感に影響しないのではないだろうか。先行研究によると、女性は男性と比較して同性愛に対して寛容であるとされている（石原 2013; 釜野 2017）。その場合、回答者（被害者）の性別により、同性からのセクハラに対する不快感の感じ方には違いがある可能性がある。

そこで本稿では次の仮説を検証する。

仮説 1：被害者が加害者から性的対象として見られていると想像されやすいセクハラの場合、同性間のセクハラの方が異性間のセクハラに比べて不快感が強い。

仮説 2：被害者が加害者から性的対象として見られていると想像されにくいセクハラの場合、同性間のセクハラと異性間のセクハラのそれぞれに対する不快感に差はない。

仮説 3：同性間のセクハラの場合、男性間のセクハラの方が女性間のセクハラに比べて不快感が強い。

仮説を検証する上で、個々のセクハラを「加害者が被害者に対して性的な意図を持って

いると被害者により想像されやすい行為」であるのかという観点から分類する必要がある。分類の詳細については第2節にて示すが、本稿ではセクハラを3種類に分けることとした。この独自の分類により分けられた3種類のセクハラに対する不快感の感じ方については、先行研究を踏まえた予測を立てることができなかった。そのため、探索的な分析を行うつもりで以下の仮説を立てて、検証することにした。

仮説4：セクハラに対する不快感は「指向性をもたないセクハラ」 < 「性的でない指向性をもつセクハラ」 < 「性的な指向性をもつセクハラ」の順に強い。

本稿では、これらの仮説を検証することで、セクハラとホモフォビアとの関係について考察するとともに、広大なセクハラという概念を新たな切り口から見ることができるのではないかという探索を行いたい。

2.方法——質問項目と回答の処理・変数設定

今回の分析には、2022年10月の調査時点において大学に所属している学生（大学生・大学院生及び研究生や聴講生など）を対象として、京都大学文学部・社会学実習が実施した質問紙調査の結果の一部を用いた。使用した質問項目は、以下に示したものである。

・「Q1. あなたの性別は？」

・「あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の6段階で評価してください。」(a1~a17, b1~b17, c1~c17, d1~d17 の合計68のヴィネット)

Q1.は回答者の性別を問う質問である。選択肢は「1 女」「2 男」「3 その他」の3択であった。この内、回答者数が極めて少なく、加害者と被害者の性別の組み合わせとセクハラに対する不快感との関係を分析する上で扱いが困難であった「3 その他」の回答者は分析から除外した。性別の度数分布は表1の通りであった。

表1. 性別の度数分布

性別	度数
女性	196
男性	124

ヴィネットは様々な条件におけるセクハラの不快感について「1 とても不快である」から「6 まったく不快ではない」の6件法で問う質問である。回答は、「6 まったく不快ではない」=0、「5 不快ではない」=1、「4 どちらかといえば不快ではない」=2、「3 どちらかといえば不快」=3、「2 不快である」=4、「1 とても不快である」=5の数値を割り当てて数値化し、今回の分析における従属変数として用いた。ヴィネットを構成する条件の内、セクハラの種類を独立変数として用いた。セクハラの種類は、「下ネタの冗談を聞かされた」（以下「下ネタ」と表記）、「既婚者と浮気しているというデマを流された」（以下「浮気デマ」と表記）、「顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた」（以下「顔の接近」と表記）、「手を握られた」、「いやらしい目で見つめられた」（以下「いやらしい目」と表記）、「お尻を触られた」、「異性の好みを聞かれた」の7種類であり、分析ではこのうち、「異性の好みを聞かれた」以外の6種類を独立変数として用いた。「異性の好みを聞かれた」を除外したのは、後述する「被害者から見たセクハラ指向性の様態」についての解釈が困難であり、特にセクハラに加害者と被害者が同性であるか異性であるかの違いによって予測困難な影響がある可能性が考えられるためである。独立変数についてはさらに、6種類のセクハラを「セクハラに加害者が被害者を性的な対象として眼差していると被害者に想像されやすいか」という観点から3種類に分類した変数を独自に作成して分析に用いた。これからこの変数の詳細について示す。分類の1つ目は、「指向性をもたないセクハラ」である。これは、加害者が被害者に対して性的な眼差しを向けているとは想像されにくいと考えられるセクハラであり、「下ネタ」と「浮気デマ」をここに分類した。2つ目は「性的な指向性をもつセクハラ」である。これは、明確に加害者が被害者に対して性的な眼差しを向けていると想像

されやすいと考えられるセクハラであり、「いやらしい目」と「お尻を触られた」をここに分類した。3つ目は「性的ではない指向性をもつセクハラ」である。これは、加害者が被害者に対して親密意識を持っていることは想像されやすいが、性的な眼差しを伴っているのかについては必ずしも想像されやすいとは言えないと考えられるセクハラである。今回は、「顔の接近」と「手を握られた」をここに分類した。

3.分析結果

マルチレベルモデルの回帰分析を行い、セクハラの影響の様態がセクハラに対する不快感に与える影響を被害者の性別及び被害者と加害者の性別の組み合わせごとに分析したところ、表2のような結果が得られた。

表 2. 被害者の性別・被害者と加害者の性別の組み合わせごとの不快度の回帰分析

	男女モデル		女性モデル		男性モデル	
	係数	標準偏差	係数	標準偏差	係数	標準偏差
(Intercept)	3.89***	0.05	4.13***	0.06	3.51***	0.08
指向性あり (非性的)	-0.76***	0.05	-0.88***	0.06	-0.57***	0.08
指向性なし	-0.13**	0.05	-0.06	0.06	-0.23**	0.08

	女性同性間モデル		女性異性間モデル		男性同性間モデル		男性異性間モデル	
	係数	標準偏差	係数	標準偏差	係数	標準偏差	係数	標準偏差
(Intercept)	3.69***	0.08	4.52***	0.05	3.86***	0.10	3.11***	0.11
指向性あり (非性的)	-1.32***	0.09	-0.48***	0.06	-0.58***	0.11	-0.53***	0.12
指向性なし	0.02	0.09	-0.16**	0.06	-0.58***	0.11	0.11	0.12

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

3.1 モデル間分析

回帰分析の結果の内、被害者と加害者の性別の組み合わせごとに分けられた4つのモデルについて、被害者の性別・被害者と加害者が同性か異性かについてそれぞれ固定し、Welch 検定を用いてモデル間の係数の差を検定したところ表3~表6のような結果が得られた。

表 3. 被害者女性モデル間の係数の差の検定 女性同性間モデル—女性異性間モデル

	係数の差	z値	p値
(Intercept)	-0.827	-8.697	0.000***
指向性あり (非性的)	-0.841	-8.191	0.000***
指向性なし	0.172	1.662	0.096

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

表 4. 被害者男性モデル間の係数の差の検定 男性同性間モデルー男性異性間モデル

	係数の差	z値	p値
(Intercept)	0.745	5.216	0.000***
指向性あり (非性的)	-0.058	-0.357	0.721
指向性なし	-0.685	-4.240	0.000***

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

表 5. 同性モデル間の係数の差の検定 女性同性間モデルー男性同性間モデル

	係数の差	z値	p値
(Intercept)	-0.169	-1.359	0.174
指向性あり (非性的)	-0.740	-5.234	0.000***
指向性なし	0.591	4.226	0.000***

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

表 6. 異性モデル間の係数の差の検定 女性異性間モデルー男性異性間モデル

	係数の差	z値	p値
(Intercept)	1.403	11.874	0.000***
指向性あり (非性的)	0.048	0.363	0.716
指向性なし	-0.265	-2.023	0.043*

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

まず、被害者の性別が同じモデル間の検定について見ていく。表 3 を見ると、被害者が女性の場合においては、性的な指向性をもつセクハラと性的ではない指向性をもつセクハラに対して、加害者が同性のセクハラの方が、加害者が異性のセクハラに比べて有意に不快感が低いという結果となっている。表 4 を見ると、被害者が男性の場合においては、性的な指向性をもつセクハラに対しては被害者が女性の場合とは対照的に、加害者が同性のセクハラの方が、加害者が異性のセクハラに比べて有意に不快感が高いという

結果となっている。また、女性が被害者の場合には有意な差が見られた性的ではない指向性をもつセクハラに対しては、不快度の有意な差が見られず、女性が被害者の場合には有意な差が見られなかった指向性をもたないセクハラに対して、加害者が同性のセクハラの方が、加害者が異性のセクハラに比べて有意に不快度が高いという結果となっている。次に、被害者と加害者が同性か異性かが同じモデル間の検定について見ていく。表5を見ると、被害者と加害者が同性の場合においては、性的ではない指向性をもつセクハラに対しては、女性の方が、男性に比べて有意に不快度が低いという結果となっている。また、指向性をもたないセクハラに対しては、女性の方が、男性に比べて有意に不快度が高いという結果となっている。表6を見ると、被害者と加害者が異性の場合においては、被害者と加害者が同性に場合には有意な差が見られなかった性的な指向性をもつセクハラに対して、女性の方が男性に比べて有意に不快度が高いという結果となっている。また、被害者と加害者が同性に場合には有意な差が見られた性的ではない指向性をもつセクハラに対しては、不快度の有意な差は見られないという結果となっている。さらに、被害者と加害者が同性に場合には、女性の方が、男性に比べて有意に不快度が高かった指向性のないセクハラに対しては、女性の方が、男性に比べて有意に不快度が低いという結果となっている。

3.2 モデル内分析

回帰分析の結果について、Wald 検定を用いてモデル内の係数の差を検定したところ表7のような結果が得られた。

表7. モデル内の係数の差の検定

	男女モデル	女性モデル	男性モデル	
	係数の差	係数の差	係数の差	
指向性あり（性的）－指向性なし	0.13**	0.06	0.23**	
指向性あり（性的）－指向性あり（非性的）	0.76***	0.88***	0.57***	
指向性なし－指向性あり（非性的）	0.63***	0.72***	0.34***	

	女性同性間モデル	女性異性間モデル	男性同性間モデル	男性異性間モデル
	係数の差	係数の差	係数の差	係数の差
指向性あり（性的）－指向性なし	-0.02	0.16**	0.58***	-0.11
指向性あり（性的）－指向性あり（非性的）	1.32***	0.48***	0.58***	0.53***
指向性なし－指向性あり（非性的）	1.34***	0.32***	0.00	0.64***

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

男女モデル、女性モデル、男性モデル、女性異性間モデルでは、不快感は、性的でない指向性をもつセクハラ<指向性をもたないセクハラ<性的な指向性をもつセクハラという順に高いという結果となっている（女性モデルの指向性をもたないセクハラと性的な指向性をもつセクハラの係数の差のみ統計的に有意ではない）。また、いずれにおいても、指向性をもたないセクハラと性的でない指向性をもつセクハラの係数の差よりも性的な指向性をもつセクハラと指向性をもたないセクハラの係数の差の方が大きいという結果となっている。女性同性間モデルと男性異性間モデルでは、不快感は、性的でない指向性をもつセクハラ<性的な指向性をもつセクハラ<指向性をもたないセクハラの順に高く、性的な指向性をもつセクハラと指向性をもたないセクハラの係数の差以外の係数の差は統計的に有意であるという結果となっている。男性同性間モデルでは、性的でない指向性をもつセクハラ＝指向性をもたないセクハラ<性的な指向性をもつセクハラの順に不快感が高く、指向性をもたないセクハラと性的でない指向性をもつセクハラの係数の差以外の係数の差は統計的に有意であるという結果となっている。

4.考察

本稿では、1.セクハラとホモフォビアの関係について、被害者と加害者の性別の組み合わせごとに分析することで検証し、2.仮説を検証するために作成したセクハラのカテゴリがどのような特徴を持っているのかについて、各モデル内の係数の差を分析することで検証した。まず、被害者が加害者から性的対象として見られていると想像されやすいセク

ハラに対する不快感がセクハラに加害者が同性のときに加害者が異性のときよりも高まるという仮説は、被害者が男性の場合においては支持された。しかし、被害者が女性の場合には仮説とは反対に、加害者が同性の方が不快感は低くなるという結果となった。これについては、女性同性間モデル—男性同性間モデルの分析において性的な指向性をもつセクハラに対する不快感の係数の差が有意ではなかったことから考えると、女性においても男性と同程度に同性からの性的な指向性をもつセクハラが不快であるが、それ以上に異性(男性)からのセクハラが不快であるということであると考えられる。次に、被害者が加害者から性的対象として見られていると想像されにくいセクハラの場合、同性間のセクハラと異性間のセクハラのそれぞれに対する不快感に差はないという仮説は、被害者が女性の場合にも男性の場合にも支持されなかった。被害者が女性の場合には、指向性をもたないセクハラについては加害者が同性か異性かによる不快感の差はなかったが、性的ではない指向性をもつセクハラについては、加害者が同性である方が不快感は低かった。被害者が男性の場合、性的な指向性をもたないセクハラに対する不快感には加害者が同性か異性かによる差がなく、指向性をもたないセクハラに対する不快感に関しては異性からのセクハラの方が不快感は高かった。次に、同性間のセクハラの場合、男性間のセクハラの方が女性間のセクハラに比べて不快感が高くなるという仮説は、性的ではない指向性をもつセクハラについてのみ支持され、性的な指向性をもつセクハラでは不快感に有意な差はなく、指向性をもたないセクハラについては女性間のセクハラのほうが不快感は高いという結果になった。この3つの仮説についての検証結果について考察すると、まず、女性に関してはホモフォビアの影響があったとしても、それ以上に相手が異性(男性)であることがセクハラに対する不快感に与える影響が大きいのだと考えられる。一方で、男性に関しては、ホモフォビアの影響が女性よりも明確にみられる。しかし、指向性をもたないセクハラに対する不快感に関しては異性からのセクハラの方が不快感は高いことなど、ホモフォビアの影響だけでは説明できない点も

あった。この点に関しては、指向性をもたないセクハラに分類した「下ネタ」が、同性間ではホモソーシャル的な、男性同士の結びつけを強める感覚をもつという心情的にポジティブな側面を持つ一方で、異性間ではそのような効果がない事によってその不快さが強調されたという可能性があるのかもしれない。最後に、セクハラに対する不快感は「指向性をもたないセクハラ」<「性的でない指向性をもつセクハラ」<「性的な指向性をもつセクハラ」の順に高い、という仮説については、支持されなかった。ここで注目したのは、性的ではない指向性をもつセクハラが全てのモデルにおいて最も不快感が低いという結果となったことである。この理由について考えると、ここに分類された行為が親密性の表れと解釈できる行為であったことが挙げられる。今回の調査のヴィネットにはセクハラの加害者の親しさについての条件が設定されていたために、親しい相手との間の行為であった場合には、それがセクハラとしてではなく、より自然な行為として捉えられていた可能性がある。あるいは、性的ではない親密性の表現には、受け手が不快感を感じたとしても、一定程度これを相殺する快感が伴っているという可能性もあり得る。いずれにせよ、例えば、セクハラを「性的な言動」という茫漠とした共通点のみだけから見た場合や、あるいは、身体的な接触を伴うか、などの外形的な観点から分類した場合には見過ごされてしまいそうな重要なポイントが、本稿で用いた「被害者から見てどういう行為なのか」という観点による分類により垣間見えたと言えるのではないだろうか。今後の課題は、3つ考えられる。1つ目は、今回セクハラを分類するにあたって使用した「セクハラの加害者が被害者を性的な対象として眼差していると被害者に想像されやすいか」という観点について、調査を行うことでより客観性のあるものとする必要があるということである。2つ目は、それぞれのセクハラのもつ特性について、「セクハラの加害者が被害者を性的な対象として眼差していると被害者に想像されやすいか」という観点以外についてもよく吟味し、それらを統制してより洗練されたヴィネットを作成する必要があるということである。3つ目は、今回は使用しなかった「親

しさ」についての条件の違いを反映した分析を行う必要があるということである。

参考文献：

石原英樹, 2013, 「日本における同性愛に対する寛容性の拡大 —— 「世界価値観調査」から探るメカニズム」—— 『相関社会科学』 22: 23-41.

<https://cir.nii.ac.jp/crid/1390290699601185536>

井上俊・伊藤公雄編, 2010, 『近代家族とジェンダー』 世界思想社.

大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編, 2012, 『現代社会学事典』 弘文堂.

釜野さおり, 2017, 「同性愛・両性愛についての意識と家族・ジェンダーについての意識の規定要因——性的マイノリティについての意識：2015年全国調査から——」 『家族社会学研究』 29(2): 200-215.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjoffamilysociology/29/2/29_200/_article/-char/ja/

厚生労働省, 2018, 『職場におけるセクシュアルハラスメント対策や妊娠・出産・育児休業・介護休業等に関するハラスメント対策は事業主の義務です！！』

<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000137178.html>

セクハラ行為の加害者の性別による不快感の差の検討

林 まりな

1 初めに

今回は、調査で得たデータを、セクハラ行為はすべて不快なのか？という観点から分析する。

「手を握られる」という行為が、セクハラだと感じることと、不快だと感じることは、別次元の問題であると感じるからである。ラッキースケベは少年漫画などに見られる手法であるが、これは、「平凡な主人公の少年が偶然、女性の素肌に触れてしまったり、見てはいけない箇所が見えてしまったりするスケベな出来事を、現実世界から見て端的に表現した語句。」というものである。このようなシチュエーションが、少年漫画において使われているということは、このような行為は、主に男性には好意的に捉えられるものであり、女性からのセクハラ行為を、うれしく思う気持ちが少なからずあるということを示唆している。

また、女性については、セクハラ行為の境界線に着目して分析する。例えば、女性が男性から手を握られてうれしいと思う時もあるし、女性と手を握ることについては、抵抗を感じることも少ない可能性もある。女性の方が、男性に比べて身体接触を友好関係を示すのに用いることが多いため、女性は、女性からの身体接触を不快に思わない可能性がある。このように、たとえ同じ行為であったとしても、行為者や文脈によって、受け取り手がセクハラかどうか、不快かどうか、女性は男性に比べてかなり厳格な判断基準を持っているように思う。この境界線を明らかにすることで、女性のセクハラ意識をより理解することができる。

今回の調査で、セクハラ行為に対して、すべてが不快ではないという切り口からとらえなおすことで、セクハラが受け取り手にどのような感情を与えるのか、分析したいと思う。例えば、「手をつなぐ」という行為を解釈するときの背景や文脈を明らかにすることで、セクハラを受けた人が、自分の受けた行為が不適切だと認識することができるようになり、セクハラを防止することにも役立つ。

仮説としては、

- ① 性別にかかわらず、親しい関係にあっても、セクハラ行為は不快である。
- ② 女性は、身体接触を伴わないセクハラ行為も、不快と感じる。
- ③ 女性は、女性からのセクハラ行為を不快に感じない。
- ④ 男性は、女性からのセクハラ行為を不快に感じない。

の四つを検証する。

2 調査方法

2.1 ヴィネットについて

今回のセクハラ調査のヴィネットは、4つの要素を組み合わされて作成されている。

- ① 親しさ（親しい／あまり親しくない）
- ② 地位（同級生／35歳の非常勤講師／35歳の教授／55歳の非常勤講師／55歳の非常勤講師）
- ③ 加害者の性別（男／女）
- ④ セクハラ行為に当たる行動（異性の好みを聞かれた／下ネタの冗談を聞かされた／あなたが既婚者と浮気しているというデマを流された／いやらしい目で見つめられた／顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた／手を握られた／お尻を触られた

た)

- ①～④それぞれ、いずれかを無作為に選択し、ヴィネットが作られている。回答者は、17個のヴィネットにそれぞれ“1 とても不快である”～“6 まったく不快ではない”の点数をつけ、その後“1 とても不快である”～“6 まったく不快ではない”に5～0の値を割り振り、不快度を数値化した。

今回の私の分析では、①～④のうち、①、③、④の要素を取り上げた。2 * 2 * 2次元となる。

前提として、セクハラ行為は、ハラスメント行為に該当するので、不快と感じそうな状況設定がされた質問の仕方になっている。もちろん、私もセクハラが全て不快ではないという考えをもって今回の分析をしているのではなく、不快とひとまとめにされてしまう行為は、行為者や文脈次第では、その不快度にずれがあり、そのずれを今回明らかにしたいと考えている。従って、回答がもともと「不快である」に偏って分布しているのを承知したうえで、その中でも相対的に不快度が低いものを見つけていくというのが分析の手法になる。

2.2 親しさについて

ヴィネットに必ず、加害者が親しい・親しくないのいずれかの関係かであることが明示されている。そのため、親しいか親しくないかで各ヴィネットを2分し、親密度によって不快度にどれだけ違いが出るか検討する。

2.3 加害者の性別について

加害者の性別は、被害者と同姓か異性かという観点において、今回の分析において重要であるため、取り上げる。

2.4 セクハラ行為に当たる行動について

7つあるセクハラ行為に当たる行動を、今回の分析では、身体接触の有無でグループ分けした。

身体接触あり→顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られた／手を握られた／お尻を触られた

身体接触なし→異性の好みを聞かれた／下ネタの冗談を聞かされた／あなたが既婚者と浮気しているというデマを流された／いやらしい目で見つめられた

「顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られた」というセクハラ行為は、その他の身体接触がないと判断したものに比べ、物理的に直接触れられることの嫌悪を想起させるため、本当に身体接触があるわけではないが、身体接触ありとしてグループ分けした。

身体接触の有無でグルーピングすることによって、社会で通用している痴漢のようないわゆるセクハラ行為と、物理的接触がないことで不快度が低くなると想定される行為をより明確に分類することが可能になる。

3 分析結果

3.1 平均不快度と親しさ

セクハラ行為の加害者と親しい関係にあるかどうかで分類したのが図1である。図1からも、親しくない人からのセクハラ行為の方が、不快に感じる傾向にあることが読み取

れる。被害者を女性に限定したものが図2、男性だけに限定したのが図3である。

被害者が女性の場合の方が、被害者が男性である場合と比較して、不快感が平均して高く、女性の方が、セクハラ行為に対して嫌悪感を抱いていることが分かる。平均値だけで見ると、女性が親しい人からセクハラ行為をされるときに感じる不快感と、男性が親しくない人からセクハラ行為をされるときに感じる不快感の平均がほぼ等しくなっている。

図1：平均不快感と親しさ

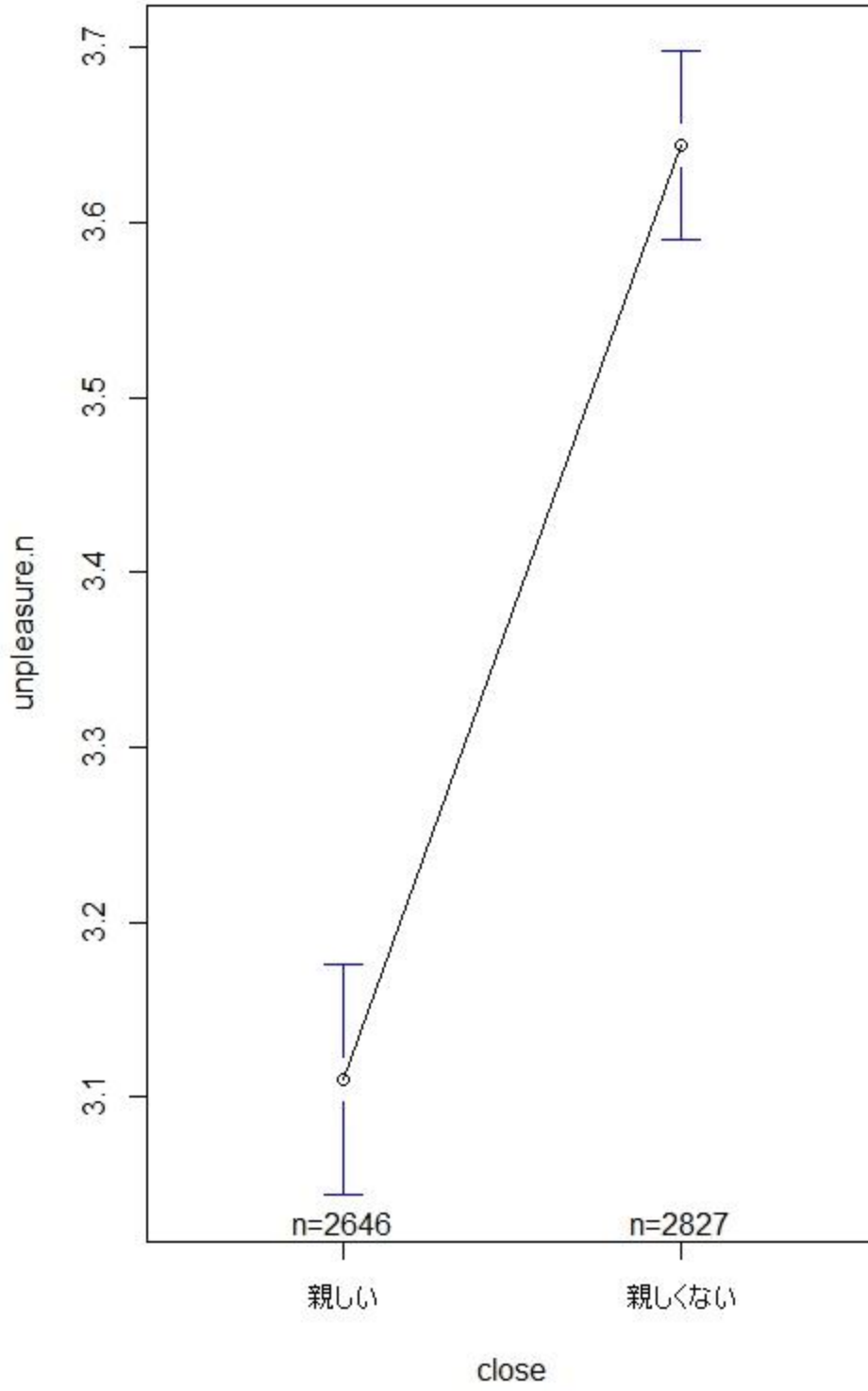


図2:平均不快感と親しさ(被害者:女)

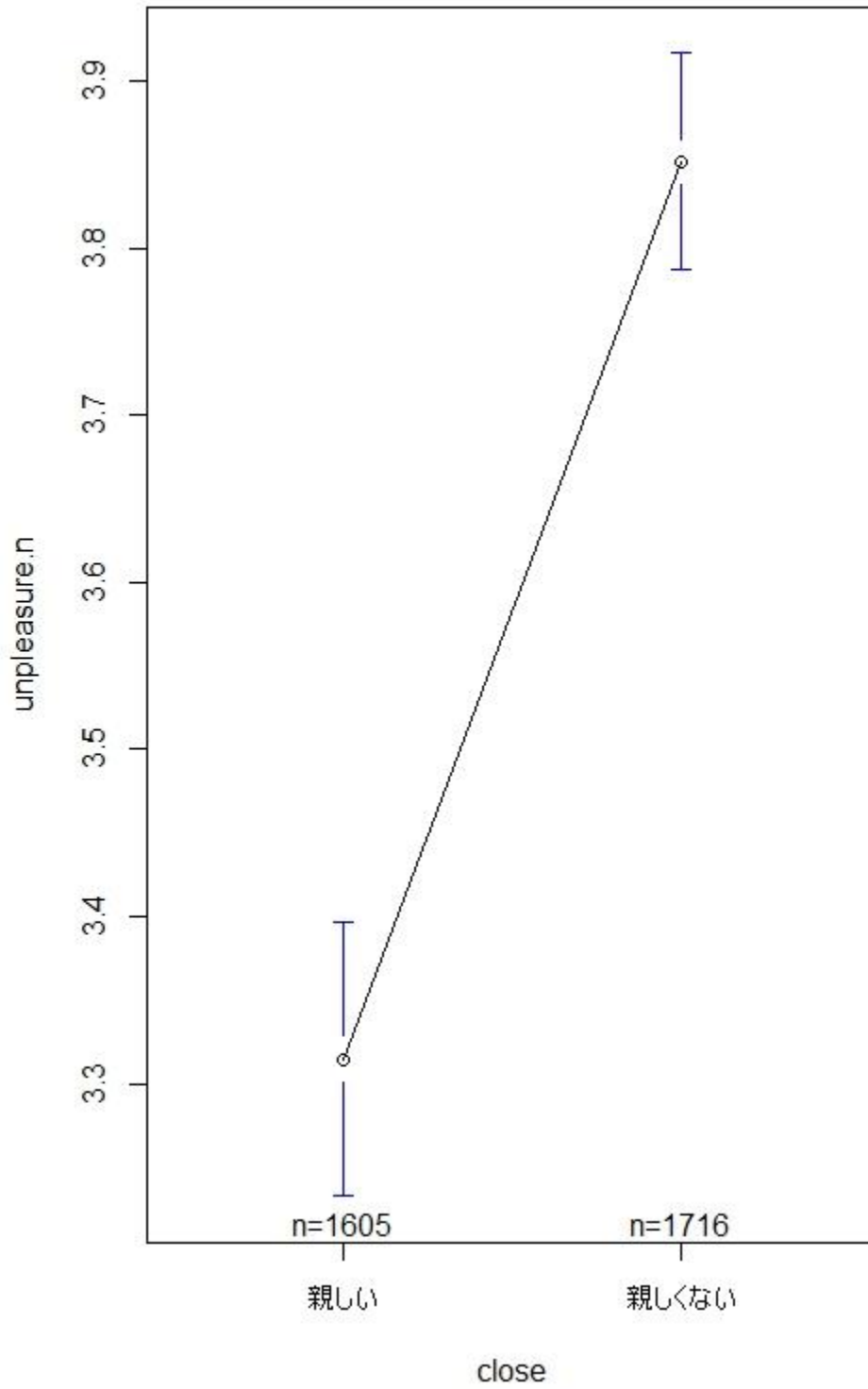
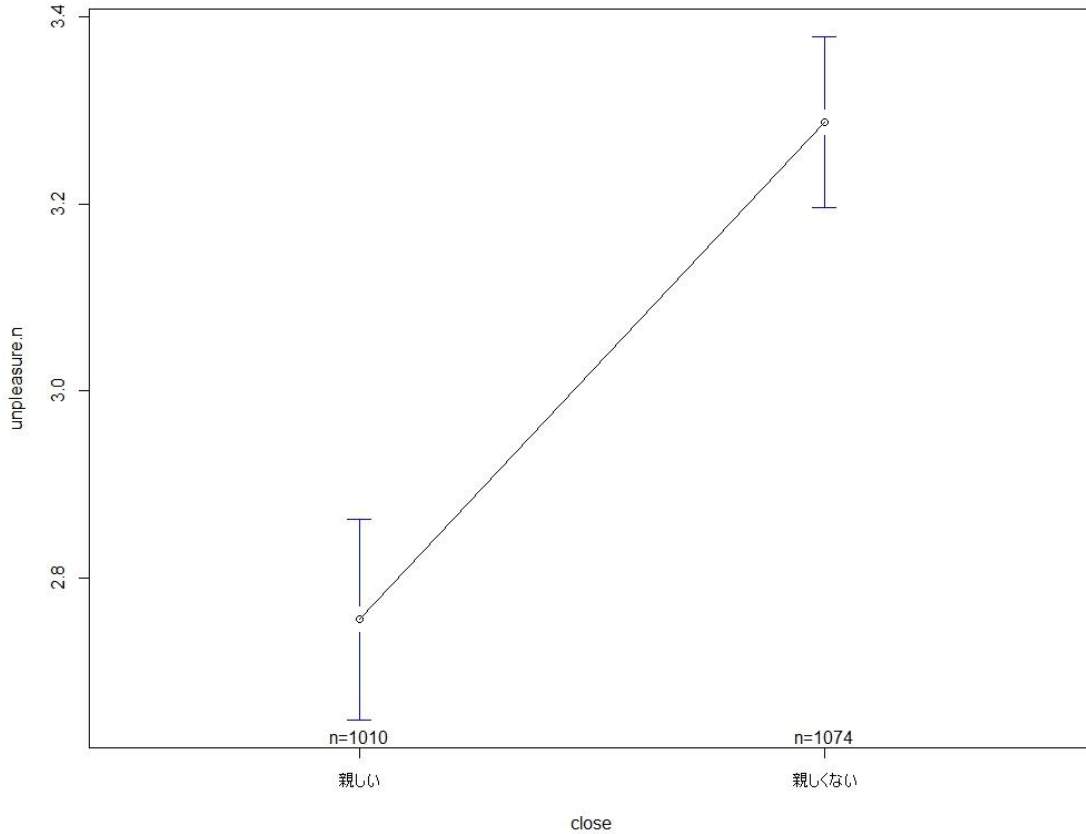


図3:平均不快感と親しさ(被害者:男)



3.2 平均不快感と身体接触

次に、身体接触の有り無しでヴィネットを分類し、平均不快感の差を示した結果が図4である。平均不快感が一番高いものは、あまり親しくない人から受ける身体接触を伴うセクハラ行為で、これはすごく納得のできる結果であると思う。この結果のうち、被害者が女性のみが図5、被害者が男性である場合を示したものが図6である。今回注目してほしいのは、図5と図6のグラフの概形が異なる点である。被害者が男性である場合、加害者との親密度にかかわらず、身体接触を伴うセクハラ行為の方が不快感が高いのに対し、被害者が女性である場合は、親しい人から受けるセクハラ行為において、

身体接触のないものの方が不快に感じるという結果になった。

図4: 平均不快度と身体接触の有無

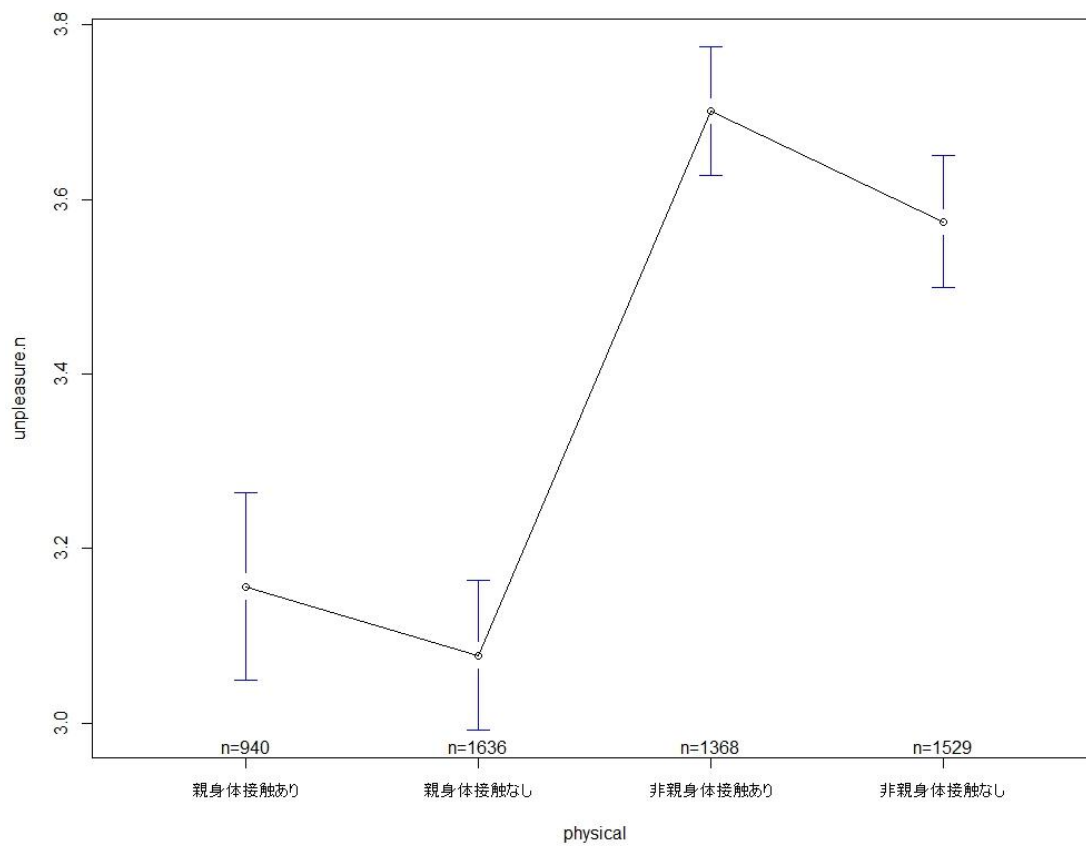


図5:平均不快度と身体接触の有無(被害者:女)

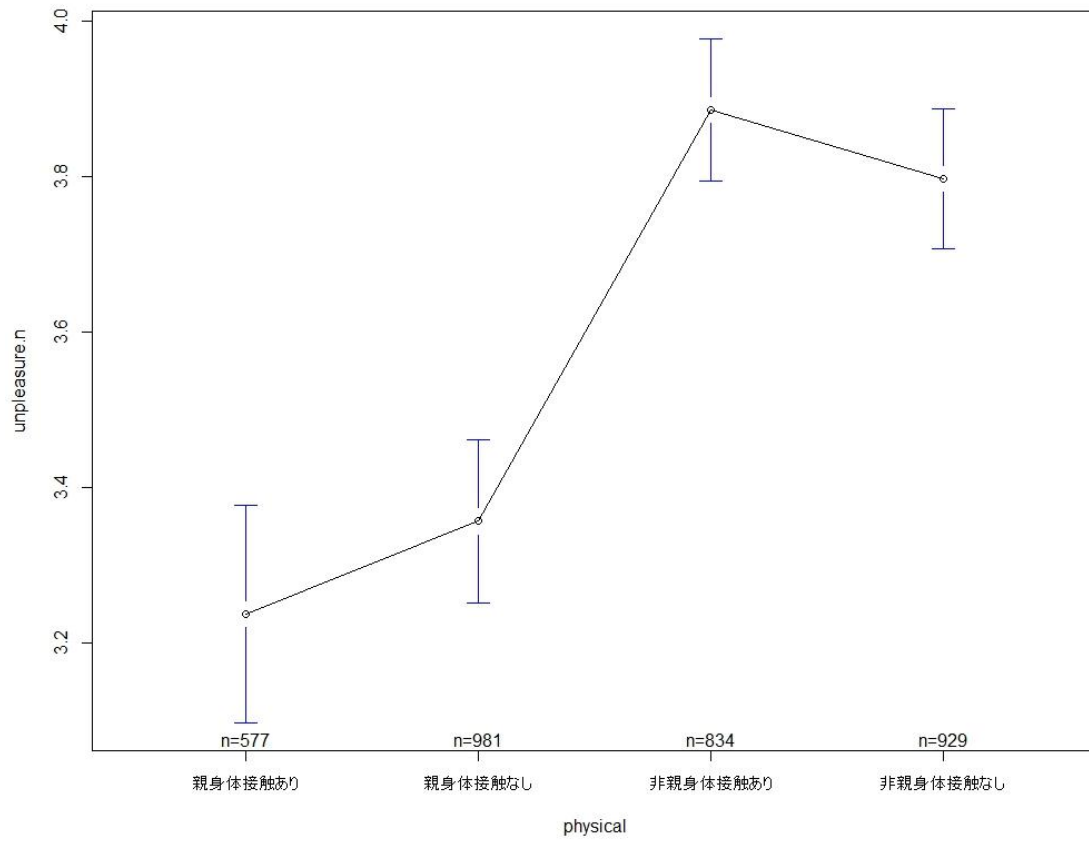
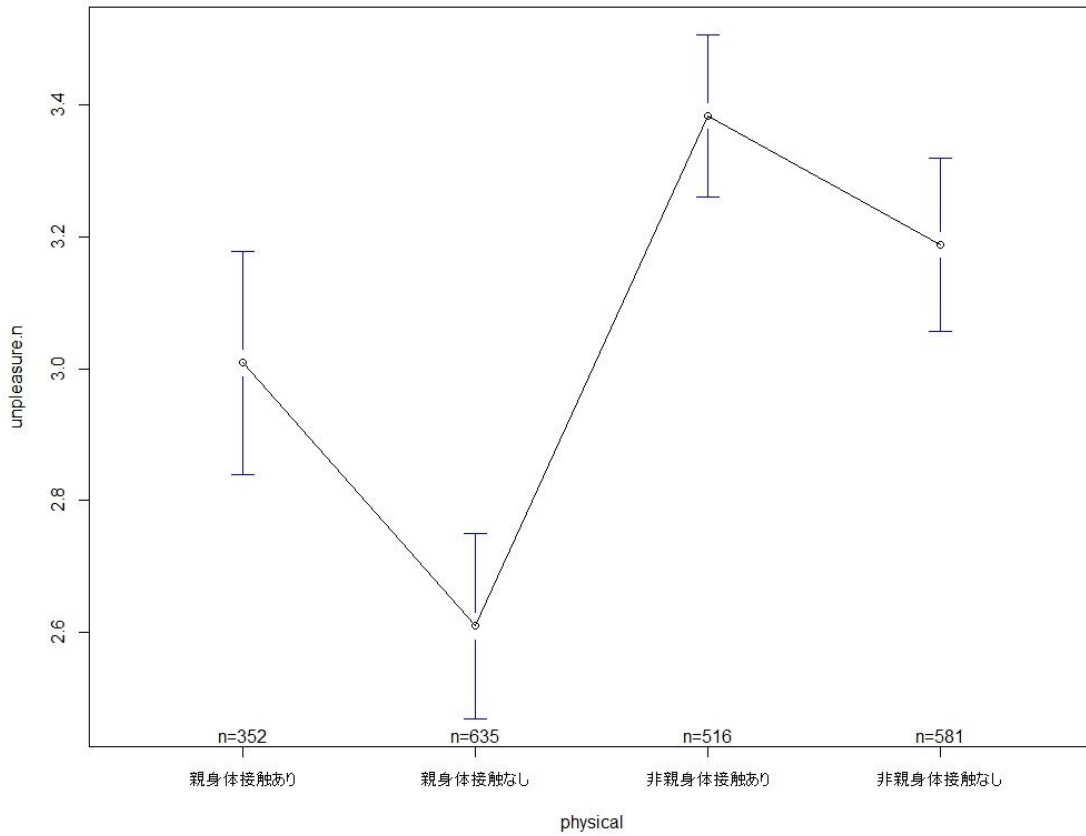


図6:平均不快感と身体接触の有無(被害者:男)



3.3 重回帰分析

平均不快感を従属変数、親しさ、行為の加害者、身体接触濃霧を独立変数にして重回帰分析を行った結果が表1である。被害者の性別に関係なく、行為の加害者が男性の場合に、有意な相関がみられる。また、モデル1女（被害者が女性）において、親しくない人から受けるセクハラ行為は、身体接触の有無にかかわらず、有意な相関が認められた。

表1：回帰分析の結果

	モデル 1	モデル 1 女	モデル 1 男
(Intercept)	2.71 *** (0.05)	2.67 *** (0.06)	2.77 *** (0.09)
close 親しくない	-0.07 (0.19)	-0.12 (0.21)	0.07 (0.35)
sex.offender 男	0.85 *** (0.04)	1.11 *** (0.05)	0.44 *** (0.07)
physical 親身体接触なし	-0.11 (0.06)	0.08 (0.07)	-0.41 *** (0.11)
physical 非親身体接触あり	0.61 ** (0.20)	0.75 *** (0.23)	0.32 (0.36)
physical 非親身体接触なし	0.52 ** (0.19)	0.72 ** (0.22)	0.14 (0.35)
R ²	0.10	0.16	0.05
Adj. R ²	0.10	0.16	0.05
Num. obs.	5473	3321	2084

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

4 結論

不快度と親しさの関係については、性別にかかわらず、あまり親しくない人からセクハラ行為を受ける方が不快であるという結果で、仮説が支持された。

また、加害者の性別に着目した場合、男性は男性からのセクハラ行為の方が不快に感じるという結果が出た。これは、女性から性的意図を感じる行為をされる場合よりも、同性から同様の行為をされた場合の方が、違和感として不快に感じやすいという理由なのではないかと推測する。

女性は、親しい人から受けるセクハラ行為において、身体接触を伴わない方が不快に感じるという結果が出て、これは直感に反する結果になったといえる。このような結果になった背景として、女性同士では、友好関係を示すときに、ボディタッチを手段の一つ

として用いやすい傾向があり、そこに性的意図が含まれるとは考えない。そのため身体接触を伴う行為の方が、不快ではないという結果になったのだと考えられる。

全体を通して、どの項目においても女性の方が、男性よりも平均不快感が高く出ており、セクハラ行為に対する感度は、女性の方が優れているといえる。

今回は、行為の加害者を性別の身で分類し、ヴィネットにあった地位については考慮しなかった。今後の課題として、加害者の地位に着目して分析を行うと、よりセクハラ行為に対して知見が深まると考えられる。

参考文献

打越文弥,2017,「育児休業の取得が女性の就業継続に与える中長期的な影響－JGSS-2009LCSを用いた生存分析－」,日本版総合的社会調査共同研究拠点 研究論文集[17] JGSS Research Series No.14 ,29-40

[ラッキースケベ - Wikipedia](#)

セクハラ行為者の性別が職業よりも不快感に対する 強い要因となるか

水垣 はるか

1. はじめに

セクハラが発生しやすい環境の一つは上下関係が強い環境であるとされる。厚生労働省の調査（2021）では、過去3年間にセクハラを受けた者の回答で、セクハラ行為を行ったものとして上司（役員以外）が55.2%であるのに対し、同僚は21.0%である。また、セクハラの行為者と被害者の関係で最も多かったのは「上司から部下へ」であった。セクハラが発生しやすい環境に関して、その上下関係は具体的には「セクハラの行為者の性別」と「職業や年齢による権力関係」が挙げられるだろう。このうち前者の男女間の非対称性がよりセクハラの不快感を高める要因として強く作用すると考えた。今回は中（2021）にならい、この要因を分解して要因の効果を明らかにすることでセクハラの上昇しやすい状況の理解につながり、セクハラ発生の防止に役立てることができると考えられる。そこで、セクハラの上昇しやすい状況の性別の方がセクハラの上昇しやすい状況の職業よりも不快感を高める要因として強く働くこと、すなわち、セクハラの上昇しやすい状況が男性である方が女性である場合よりも、職業（年齢）が不快感を高める要因より強く働くことを今回の仮説とする。この仮説には次の2つのことを前提としている。すなわち、セクハラの上昇しやすい状況が男性である方が女性の場合より不快感が高いこと及び、セクハラの上昇しやすい状況—被害者間での上下関係が強い場合に（セクハラの上昇しやすい状況が教授よりも同級生である方が）不快感はより高いことである。これら前提と仮説は、不快感の大小関係について以下①～③を分析の結果で示すことができれば正しいと考えられる。なお、前提の一つ目は①～③で、

前提の二つ目は④⑤で示され、これら①～④が順に示されたうえで⑤が示されれば、今回の仮説が正しいことがいえると考えられる。

- ① セクハラの実行者が男性 (>女性)
- ② セクハラの実行者が男性で同級生 (>女性で同級生)
- ③ セクハラの実行者が男性で教授 (>女性で教授)
- ④ セクハラの実行者が男性で教授 (>男性で同級生)
- ⑤ セクハラの実行者が女性で教授 (>女性で同級生)
- ⑥ セクハラの実行者が女性で同級生 (>男性で教授)

2. 方法

質問調査における「とても不快である」「不快である」「どちらかといえば不快」「どちらかといえば不快ではない」「不快ではない」にそれぞれ5～1の整数を割り振り数値化し、不快度の尺度として使用した。セクハラの実行者の性別を基準に、sex.offenderにて「男」「女」、そしてセクハラの実行者の性別と職業について sexstatus として「男性で教授」「男性で同級生」「女性で教授」「女性で同級生」として分類し使用した。

3. 結果

```

=====
                        Model 1
-----
(Intercept)              3.24 ***
                        (0.05)
sexstatus女性で同級生    -0.65 ***
                        (0.07)
sexstatus男性で教授      -0.45 ***
                        (0.07)
sexstatus男性で同級生    -1.39 ***
                        (0.08)
sex.offender男           0.92 ***
                        (0.05)
-----
R^2                      0.15
Adj. R^2                 0.15
Num. obs.                3322
=====
*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

```

図：不快感に関する、セクハラ行為者の性別と職業別の回帰分析の結果

セクハラの実行者の性別と職業を独立変数、不快感を従属変数として回帰分析した結果が上の図である。セクハラの実行者が男性の時は、「sex.offender 男」の回帰係数が0.92で有意であることから、実行者が男性である場合の方が女性である場合より不快感が高くなり、第一章の①が示された。次に、sexstatusについて「女性で教授」を基準として回帰係数は他のsexstatus「女性で同級生」「男性で教授」「男性で同級生」においてそれぞれ-0.65、-0.45、-1.39ですべてマイナスであり有意な値が得られた。よってセクハラの実行者が「女性で教授」である場合の方が「男性で教授」である場合より、不快感が高い。「男性で同級生」の「女性で同級生」との回帰係数の差は $-1.39 - (-0.65) = -0.74$ であり、「男性で同級生」の方が「女性で同級生」の場合より不快感が低くなる。以上のことから②③は示されなかった。そして、「女性で同級生」の回帰係数が-0.65で「男性で教授」の「男性で同級生」との回帰係数の差は $-0.45 - (-1.39) = 0.94$ であることから、「女性で教授」の方が「女性で同級生」より不快感が高くなり、「男性で教授」の

方が「男性で同級生」より不快感が高くなる。よって第一章の④⑤は示された。最後に、「女性で同級生」の「男性で教授」との回帰係数の差は $-0.65 - (-0.45) = -0.20$ であることから、「女性で同級生」の方が「男性で教授」の場合より不快感が低くなる。よって⑤は示されなかった。

4. 考察

今回はセクハラの実行者の性別が職業よりも、不快感をより高める要因となるという仮説を確かめるため、セクハラの不快感を5段階で数値化しセクハラの実行者の性別と職業について要因を分解して回帰分析を行った。その結果、実行者の性別では男性の場合の方が女性の場合よりも不快感を高めるが、職業別では必ずしもそうとは言えずむしろ不快感が低くなった。また、職業別では男女ごとでともに教授である方が同級生の場合より不快感が高くなった。セクハラの不快感を高める要因として、セクハラの実行者の性別と職業に注目し、男女の上下関係が職業による上下関係よりも不快感をより高める要因として働くという仮説を示そうとしたが、分析の結果、職業ごとの性別で仮説と逆、すなわち女性である方がより不快感が高くなった。よって仮説は①④⑤のみが示され、仮説は正しいとは言えないという結果となった。この結果が得られたのは、男女によってその肩書であることが、被害者に対する意味が異なるためではと考える。例えば、今回のアンケート調査に回答する場合に、男性の教授よりも、女性の教授の方がセクハラの実行者として想定しにくいいため、不快感がより高い回答を得る可能性がある。今回のレポートの意義としては、実行者の性別という大きなくりでは男性である方が不快感が高くなるが、職業別では女性の方が不快感が高くなったため、この要因を分析する余地がある。今後の課題としては、職業について教授、同級生に加えてさらに後輩や先輩といった、人間関係の上下関係についてより詳細なカテゴリでも同様の調査を行うこと、そしてさらにセクハラの内容ごとでも不快感の効果の差を検討することで、今回の仮説が立証できなかった要因を明らかにすることである。

参考文献

東京海上日動リスクコンサルティング株式会社, 2021, 「令和2年度 厚生労働省委託事業 職場のハラスメントに関する実態調査 報告書」.

中濤, 2021, 「同性愛に対する意識—JGSS を用いた規定要因分析と要因分解—」『研究論文集』 19:115-126.

調査表

セクハラ調査 2022 A

この調査は京都大学文学部・社会学実習で実施する調査です。調査結果は教育・研究目的のためにのみ用い、個人情報などが流出することはありません。

Q1 あなたの性別は？

1 つだけマークしてください。

- 1 女
- 2 男
- 3 その他

Q2 あなたの学年等は？

1 つだけマークしてください。

- 1 年生
- 2 年生
- 3 年生
- 4 年生
- 大学院生
- 研究生、聴講生など
- 大学には在籍していない

ハラスメントへのサポート

Q3 もしもあなたがハラスメント被害にあったら、次の人たちの中に、あなたの話を親身に聞いたり、援助したりしてくれる人がいると思いますか。

1行につき1つだけマークしてください。

	1 いる と思う	2 たぶ んいる と思う	3 どちら とも いえな い	4 たぶ んいな いと思う	5 いな いと思う
1 あなたの家族の中	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
2 あなたの友人の中	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
3 あなたの大学の先生たちの中	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
4 あなたの大学のセクハラ対応窓口	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

誕生月

あなたは何月生まれですか。以下のうちあてはまるものを選んでください。

1 つだけマークしてください。

- 1月、5月、または、9月生まれ
- 2月、6月、または、10月生まれ
- 3月、7月、または、11月生まれ
- 4月、8月、または、12月生まれ

分岐 a (誕生月が 1月、5月、または、9月の回答者)

A あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の 6 段階で評価してください。

a1 あまり親しくない 35 歳の教授 (男) に手を握られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

a2 親しい 55 歳の非常勤講師 (男) に手を握られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

a3 親しい同級生（女）にあなたが既婚者と浮気しているというデマを流された

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

a4 親しい35歳の教授（女）に手を握られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

a5 あまり親しくない35歳の教授（女）にあなたが既婚者と浮気しているというデマを流された

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

a6 親しい35歳の非常勤講師（男）に下ネタの冗談を聞かされた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

a7 あまり親しくない55歳の非常勤講師（女）にお尻を触られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

a8 あまり親しくない35歳の非常勤講師（女）に手を握られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

a9 親しい35歳の非常勤講師（女）にいやらしい目で見つめられた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

a10 親しい55歳の非常勤講師（女）に異性の好みを聞かれた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

a11 親しい55歳の教授（女）にお尻を触られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

a12 あまり親しくない同級生（男）に異性の好みを聞かれた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

a13 あまり親しくない55歳の教授（女）に異性の好みを聞かれた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

a14 あまり親しくない55歳の教授（男）に顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

a15 あまり親しくない35歳の教授（男）にいやらしい目で見つめられた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

a16 あまり親しくない同級生（男）にお尻を触られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

a17 親しい35歳の教授（女）に顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

分岐 b (誕生月が 2月、6月、または、10月の回答者)

B あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の 6 段階で評価してください。

b1 親しい 35 歳の教授 (男) に異性の好みを聞かれた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

b2 あまり親しくない 35 歳の非常勤講師 (男) にいやらしい目で見つめられた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

b3 親しい 35 歳の非常勤講師 (男) にあなたが既婚者と浮気しているというデマを流された

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

b4 あまり親しくない55歳の非常勤講師（女）に下ネタの冗談を聞かされた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

b5 親しい55歳の教授（女）にいやらしい目で見つめられた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

b6 親しい55歳の教授（男）に異性の好みを聞かれた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

b7 あまり親しくない同級生（女）にいやらしい目で見つめられた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

b8 親しい同級生（男）に顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

b9 親しい 35 歳の教授（女）にお尻を触られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

b10 あまり親しくない 35 歳の非常勤講師（女）に顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

b11 親しい 55 歳の教授（女）に顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

b12 親しい同級生（女）に下ネタの冗談を聞かされた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

b13 親しい 55 歳の非常勤講師（男）にいやらしい目で見つめられた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

b14 あまり親しくない 55 歳の非常勤講師（女）にあなたが既婚者と浮気しているというデマを流された

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

b15 親しい同級生（女）に異性の好みを聞かれた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

b16 親しい 55 歳の非常勤講師（男）にあなたが既婚者と浮気しているというデマを流された

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

b17 親しい 55 歳の教授（男）に下ネタの冗談を聞かされた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

C あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の 6 段階で評価してください。

c1 あまり親しくない 55 歳の教授（女）に下ネタの冗談を聞かされた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

c2 親しい55歳の教授（女）にあなたが既婚者と浮気しているというデマを流された

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

c3 あまり親しくない同級生（男）に下ネタの冗談を聞かされた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

c4 あまり親しくない55歳の教授（男）にお尻を触られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

c5 あまり親しくない同級生（女）にお尻を触られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

c6 あまり親しくない同級生（男）にあなたが既婚者と浮気しているというデマを流された

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

c7 親しい35歳の非常勤講師（男）に顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

c8 あまり親しくない 55 歳の教授（男）にいやらしい目で見つめられた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

c9 あまり親しくない 55 歳の教授（女）に手を握られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

c10 親しい同級生（女）に手を握られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

c11 あまり親しくない 55 歳の非常勤講師（男）に顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

c12 親しい 35 歳の教授（女）に下ネタの冗談を聞かされた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

c13 親しい 55 歳の非常勤講師（男）にお尻を触られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

c14 あまり親しくない 35 歳の非常勤講師（女）にお尻を触られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

c15 親しい 35 歳の教授（男）にあなたが既婚者と浮気しているというデマを流された

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

c16 あまり親しくない 35 歳の非常勤講師（男）に手を握られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

c17 あまり親しくない 55 歳の非常勤講師（女）にいやらしい目で見つめられた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

D あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の 6 段階で評価してください。

d1 親しい 35 歳の非常勤講師（女）に下ネタの冗談を聞かされた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

d2 あまり親しくない 55 歳の非常勤講師（女）に手を握られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

d3 あまり親しくない55歳の教授（男）にあなたが既婚者と浮気しているというデマを流された

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

d4 親しい35歳の非常勤講師（男）にお尻を触られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

d5 あまり親しくない同級生（女）に顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

d6 親しい55歳の非常勤講師（男）に下ネタの冗談を聞かされた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

d7 あまり親しくない同級生（男）に手を握られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

d8 あまり親しくない55歳の非常勤講師（男）に異性の好みを聞かれた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

d9 あまり親しくない35歳の教授（男）にお尻を触られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

d10 親しい55歳の教授（男）に手を握られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

d11 あまり親しくない35歳の非常勤講師（女）に異性の好みを聞かれた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

d12 あまり親しくない35歳の教授（女）にいやらしい目で見つめられた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

d13 親しい同級生（男）にいやらしい目で見つめられた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

d14 あまり親しくない35歳の教授（男）に顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

d15 親しい 35 歳の非常勤講師（男）に異性の好みを聞かれた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

d16 親しい 35 歳の教授（女）に異性の好みを聞かれた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

d17 あまり親しくない 35 歳の教授（男）に下ネタの冗談を聞かされた

1 つだけマークしてください。

- 1 とても不快である
- 2 不快である
- 3 どちらかといえば不快
- 4 どちらかといえば不快ではない
- 5 不快ではない
- 6 まったく不快ではない

感情の制御

Q4 次のような意見についてどう思いますか。選択肢の中から一番あなたの考えに近いものを選んでください。

1行につき1つだけマークしてください。

	2 どちら	3 どちら	
1 そう	らかと	らかと	4 そう
思う	いえば	いえば	思わない
	そう思う	そう思	い
		わない	

不快感が顔
に出ないよ
う気をつけ
るべきだ

不快なこと
や腹がたつ
ことがあつ
ても、目上
の人には言
うべきでは
ない

周りの人が
楽しそうに
していると
きは、自分
が楽しくな
くても周り
に合わせて
楽しそうに
すべきだ

ネガティブ
な感情を持
たないよう
普段から気
をつけるべ
きだ

自分自身の
気持ちに正
直であるべき
だ

Q5 次のような事柄はあなたにどの程度あてはまりますか。「1 あてはまる」から「4 あてはまらない」の4段階で評価するなら、どれが一番あなたに近いですか。

1行につき1つだけマークしてください。

1 あて はまる	2 やや あては まる	3 やや あては まらない	4 あて はまら ない
----------------	----------------------	------------------------	----------------------

1 不快なことがあっても、自分の気持ちをうまく人に伝えられない

2 否定的な感情は表に出さないようにしている

3 カッとなってつい大きな声を出してしまうことがある

4 気持ちが高ぶって人前で涙を流してしまうことがある

感想と所属大学

Q6 あなたの通っている大学を教えてください。

1 つだけマークしてください。

京都大学

その他:

Q7 回答中で答えにくかった点や感想などあれば自由に書いてください。

以上で質問は終わりです。ご協力ありがとうございました。

単純集計表

Q1 あなたの性別は？

	度数	割合[%]
1. 女	198	60.2
2. 男	127	38.6
3. その他	4	1.2
欠損値	0	0.0
計	329	100.0

Q2 あなたの学年等は？

	度数	割合[%]
1 年生	26	7.9
2 年生	35	10.6
3 年生	122	37.1
4 年生	66	20.1
大学院生	60	18.2
研究生、聴講 生など	15	4.6
大学には在籍 していない	5	1.5
欠損値	0	0.0
計	329	100.0

Q3 もしもあなたがハラスメント被害にあったら、次の人たちの中に、あなたの話を親身に聞いたり、援助したりしてくれる人がいると思いますか。

1 あなたの家族の中

	度数	割合[%]
1 いると思う	220	67.9
2 たぶんいると 思う	56	17.3
3 どちらともい えない	23	7.1
4 たぶんいない と思う	16	4.9
5 いないと思う	7	2.2
欠損値	2	0.6
計	324	100.0

2 あなたの友人の中

	度数	割合[%]
1 いると思う	259	79.9
2 たぶんいると 思う	39	12.0
3 どちらともい えない	10	3.1
4 たぶんいない と思う	9	2.8
5 いないと思う	4	1.2
欠損値	3	0.9
計	324	100.0

3 あなたの大学の先生たちの中

	度数	割合[%]
1 いると思う	86	26.5
2 たぶんいると思う	97	29.9
3 どちらともいえない	69	21.3
4 たぶんいないと思う	45	13.9
5 いないと思う	25	7.7
欠損値	2	0.6
計	324	100.0

4 あなたの大学のセクハラ対応窓口

	度数	割合[%]
1 いると思う	77	23.8
2 たぶんいると思う	114	35.2
3 どちらともいえない	93	28.7
4 たぶんいないと思う	25	7.7
5 いないと思う	12	3.7
欠損値	3	0.9
計	324	100.0

あなたは何月生まれですか。以下のうちあてはまるものを選んでください。

	度数	割合[%]
1月、5月、または、9月生まれ	70	21.6
2月、6月、または10月生まれ	81	25.0
3月、7月、または、11月生まれ	79	24.4
4月、8月、または、12月生まれ	94	29.0
欠損値	0	0.0
計	324	100.0

A 票

A あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の6段階で評価してください。

a1 あまり親しくない35歳の教授(男)に手を握られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	33	47.1
2 不快である	18	25.7
3 どちらかといえば不快	8	11.4
4 どちらかといえば不快ではない	7	10.0
5 不快ではない	2	2.9
6 まったく不快ではない	1	1.4
欠損値	0	0.0
計	70	100.0

a2 親しい55歳の非常勤講師(男)に手を握られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	23	32.9
2 不快である	14	20.0
3 どちらかといえば不快	12	17.1
4 どちらかといえば不快ではない	15	21.4
5 不快ではない	4	5.7
6 まったく不快ではない	2	2.9
欠損値	0	0.0
計	70	100.0

a3 親しい同級生(女)にあなたが既婚者と浮気しているというデマを流された

	度数	割合[%]
1 とても不快である	57	81.4
2 不快である	11	15.7
3 どちらかといえば不快	0	0.0
4 どちらかといえば不快ではない	1	1.4
5 不快ではない	1	1.4
6 まったく不快ではない	0	0.0
欠損値	0	0.0
計	70	100.0

a4 親しい35歳の教授（女）に手を握られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	6	8.6
2 不快である	10	14.3
3 どちらかといえば不快	9	12.9
4 どちらかといえば不快ではない	18	25.7
5 不快ではない	14	20.0
6 まったく不快ではない	13	18.6
欠損値	0	0.0
計	70	100.0

a6 親しい35歳の非常勤講師（男）に下ネタの冗談を聞かされた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	12	17.1
2 不快である	20	28.6
3 どちらかといえば不快	12	17.1
4 どちらかといえば不快ではない	12	17.1
5 不快ではない	10	14.3
6 まったく不快ではない	4	5.7
欠損値	0	0.0
計	70	100.0

a5 あまり親しくない35歳の教授（女）にあなたが既婚者と浮気しているというデマを流された

	度数	割合[%]
1 とても不快である	60	85.7
2 不快である	7	10.0
3 どちらかといえば不快	2	2.9
4 どちらかといえば不快ではない	0	0.0
5 不快ではない	1	1.4
6 まったく不快ではない	0	0.0
欠損値	0	0.0
計	70	100.0

a7 あまり親しくない55歳の非常勤講師（女）にお尻を触られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	37	52.9
2 不快である	17	24.3
3 どちらかといえば不快	9	12.9
4 どちらかといえば不快ではない	5	7.1
5 不快ではない	2	2.9
6 まったく不快ではない	0	0.0
欠損値	0	0.0
計	70	100.0

a8 あまり親しくない 35 歳の非常勤講師（女）に手を握られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	10	14.3
2 不快である	20	28.6
3 どちらかといえば不快	16	22.9
4 どちらかといえば不快ではない	11	15.7
5 不快ではない	7	10.0
6 まったく不快ではない	6	8.6
欠損値	0	0.0
計	70	100.0

a10 親しい 55 歳の非常勤講師（女）に異性の好みを聞かれた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	5	7.1
2 不快である	8	11.4
3 どちらかといえば不快	7	10.0
4 どちらかといえば不快ではない	11	15.7
5 不快ではない	23	32.9
6 まったく不快ではない	16	22.9
欠損値	0	0.0
計	70	100.0

a9 親しい 35 歳の非常勤講師（女）にいやらしい目で見つめられた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	15	21.4
2 不快である	15	21.4
3 どちらかといえば不快	22	31.4
4 どちらかといえば不快ではない	10	14.3
5 不快ではない	5	7.1
6 まったく不快ではない	3	4.3
欠損値	0	0.0
計	70	100.0

a11 親しい 55 歳の教授（女）にお尻を触られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	26	37.1
2 不快である	18	25.7
3 どちらかといえば不快	12	17.1
4 どちらかといえば不快ではない	5	7.1
5 不快ではない	3	4.3
6 まったく不快ではない	5	7.1
欠損値	1	1.4
計	70	100.0

a12 あまり親しくない同級生（男）に
異性の好みを聞かれた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	4	5.7
2 不快である	6	8.6
3 どちらかといえ ば不快	18	25.7
4 どちらかといえ ば不快ではない	16	22.9
5 不快ではない	15	21.4
6 まったく不快 ではない	10	14.3
欠損値	1	1.4
計	70	100.0

a13 あまり親しくない55歳の教授
（女）に異性の好みを聞かれた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	9	12.9
2 不快である	12	17.1
3 どちらかといえ ば不快	20	28.6
4 どちらかといえ ば不快ではない	12	17.1
5 不快ではない	8	11.4
6 まったく不快 ではない	9	12.9
欠損値	0	0.0
計	70	100.0

a14 あまり親しくない55歳の教授
（男）に顔と顔の距離が20cmのところ
まで近寄られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	30	42.9
2 不快である	26	37.1
3 どちらかといえ ば不快	8	11.4
4 どちらかといえ ば不快ではない	2	2.9
5 不快ではない	2	2.9
6 まったく不快 ではない	1	1.4
欠損値	1	1.4
計	70	100.0

a15 あまり親しくない35歳の教授
（男）にいやらしい目で見つめられた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	32	45.7
2 不快である	24	34.3
3 どちらかといえ ば不快	8	11.4
4 どちらかといえ ば不快ではない	2	2.9
5 不快ではない	1	1.4
6 まったく不快 ではない	3	4.3
欠損値	0	0.0
計	70	100.0

a16 あまり親しくない同級生（男）にお尻を触られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	43	61.4
2 不快である	15	21.4
3 どちらかといえば不快	5	7.1
4 どちらかといえば不快ではない	5	7.1
5 不快ではない	1	1.4
6 まったく不快ではない	0	0.0
欠損値	1	1.4
計	70	100.0

a17 親しい35歳の教授（女）に顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	7	10.0
2 不快である	19	27.1
3 どちらかといえば不快	17	24.3
4 どちらかといえば不快ではない	9	12.9
5 不快ではない	8	11.4
6 まったく不快ではない	10	14.3
欠損値	0	0.0
計	70	100.0

B 票

B あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の6段階で評価してください。

b1 親しい35歳の教授（男）に異性の好みを聞かれた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	9	11.1
2 不快である	10	12.3
3 どちらかといえば不快	22	27.2
4 どちらかといえば不快ではない	12	14.8
5 不快ではない	18	22.2
6 まったく不快ではない	9	11.1
欠損値	1	1.2
計	81	100.0

b2 あまり親しくない 35 歳の非常勤講師（男）にいやらしい目で見つめられた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	42	51.9
2 不快である	21	25.9
3 どちらかといえば不快	13	16.0
4 どちらかといえば不快ではない	3	3.7
5 不快ではない	1	1.2
6 まったく不快ではない	0	0.0
欠損値	1	1.2
計	81	100.0

b3 親しい 35 歳の非常勤講師（男）にあなたが既婚者と浮気しているというデマを流された

	度数	割合[%]
1 とても不快である	67	82.7
2 不快である	12	14.8
3 どちらかといえば不快	0	0.0
4 どちらかといえば不快ではない	0	0.0
5 不快ではない	0	0.0
6 まったく不快ではない	1	1.2
欠損値	1	1.2
計	81	100.0

b4 あまり親しくない 55 歳の非常勤講師（女）に下ネタの冗談を聞かされた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	17	21.0
2 不快である	24	29.6
3 どちらかといえば不快	18	22.2
4 どちらかといえば不快ではない	16	19.8
5 不快ではない	2	2.5
6 まったく不快ではない	3	3.7
欠損値	1	1.2
計	81	100.0

b5 親しい 55 歳の教授（女）にいやらしい目で見つめられた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	19	23.5
2 不快である	23	28.4
3 どちらかといえば不快	30	37.0
4 どちらかといえば不快ではない	5	6.2
5 不快ではない	1	1.2
6 まったく不快ではない	1	1.2
欠損値	2	2.5
計	81	100.0

b6 親しい55歳の教授（男）に異性の
好みを聞かれた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	8	9.9
2 不快である	16	19.8
3 どちらかといえ ば不快	17	21.0
4 どちらかといえ ば不快ではない	17	21.0
5 不快ではない	14	17.3
6 まったく不快 ではない	8	9.9
欠損値	1	1.2
計	81	100.0

b8 親しい同級生（男）に顔と顔の距離
が20cmのところまで近寄られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	9	11.1
2 不快である	17	21.0
3 どちらかといえ ば不快	21	25.9
4 どちらかといえ ば不快ではない	15	18.5
5 不快ではない	11	13.6
6 まったく不快 ではない	7	8.6
欠損値	1	1.2
計	81	100.0

b7 あまり親しくない同級生（女）にい
やらしい目で見つめられた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	12	14.8
2 不快である	8	9.9
3 どちらかといえ ば不快	27	33.3
4 どちらかといえ ば不快ではない	14	17.3
5 不快ではない	11	13.6
6 まったく不快 ではない	7	8.6
欠損値	2	2.5
計	81	100.0

b9 親しい35歳の教授（女）にお尻を
触られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	23	28.4
2 不快である	22	27.2
3 どちらかといえ ば不快	16	19.8
4 どちらかといえ ば不快ではない	14	17.3
5 不快ではない	3	3.7
6 まったく不快 ではない	1	1.2
欠損値	2	2.5
計	81	100.0

b10 あまり親しくない35歳の非常勤講師（女）に顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	8	9.9
2 不快である	24	29.6
3 どちらかといえ ば不快	27	33.3
4 どちらかといえ ば不快ではない	9	11.1
5 不快ではない	9	11.1
6 まったく不快 ではない	4	4.9
欠損値	0	0.0
計	81	100.0

b11 親しい55歳の教授（女）に顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	7	8.6
2 不快である	19	23.5
3 どちらかといえ ば不快	25	30.9
4 どちらかといえ ば不快ではない	13	16.0
5 不快ではない	11	13.6
6 まったく不快 ではない	5	6.2
欠損値	1	1.2
計	81	100.0

b12 親しい同級生（女）に下ネタの冗談を聞かされた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	2	2.5
2 不快である	7	8.6
3 どちらかといえ ば不快	6	7.4
4 どちらかといえ ば不快ではない	18	22.2
5 不快ではない	25	30.9
6 まったく不快 ではない	23	28.4
欠損値	0	0.0
計	81	100.0

b13 親しい55歳の非常勤講師（男）にいやらしい目で見つめられた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	47	58.0
2 不快である	21	25.9
3 どちらかといえ ば不快	10	12.3
4 どちらかといえ ば不快ではない	3	3.7
5 不快ではない	0	0.0
6 まったく不快 ではない	0	0.0
欠損値	0	0.0
計	81	100.0

b14 あまり親しくない55歳の非常勤講師（女）にあなたが既婚者と浮気しているというデマを流された

	度数	割合[%]
1 とても不快である	67	82.7
2 不快である	11	13.6
3 どちらかといえば不快	0	0.0
4 どちらかといえば不快ではない	1	1.2
5 不快ではない	1	1.2
6 まったく不快ではない	0	0.0
欠損値	1	1.2
計	81	100.0

b16 親しい55歳の非常勤講師（男）にあなたが既婚者と浮気しているというデマを流された

	度数	割合[%]
1 とても不快である	68	84.0
2 不快である	9	11.1
3 どちらかといえば不快	1	1.2
4 どちらかといえば不快ではない	0	0.0
5 不快ではない	1	1.2
6 まったく不快ではない	1	1.2
欠損値	1	1.2
計	81	100.0

b15 親しい同級生（女）に異性の好みを聞かれた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	2	2.5
2 不快である	0	0.0
3 どちらかといえば不快	3	3.7
4 どちらかといえば不快ではない	6	7.4
5 不快ではない	25	30.9
6 まったく不快ではない	44	54.3
欠損値	1	1.2
計	81	100.0

b17 親しい55歳の教授（男）に下ネタの冗談を聞かされた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	25	30.9
2 不快である	19	23.5
3 どちらかといえば不快	15	18.5
4 どちらかといえば不快ではない	8	9.9
5 不快ではない	5	6.2
6 まったく不快ではない	8	9.9
欠損値	1	1.2
計	81	100.0

C 票

C あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の6段階で評価してください。

c1 あまり親しくない55歳の教授(女)に下ネタの冗談を聞かされた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	19	24.1
2 不快である	27	34.2
3 どちらかといえば不快	18	22.8
4 どちらかといえば不快ではない	7	8.9
5 不快ではない	5	6.3
6 まったく不快ではない	3	3.8
欠損値	0	0.0
計	79	100.0

c2 親しい55歳の教授(女)にあなたが既婚者と浮気しているというデマを流された

	度数	割合[%]
1 とても不快である	61	77.2
2 不快である	14	17.7
3 どちらかといえば不快	1	1.3
4 どちらかといえば不快ではない	2	2.5
5 不快ではない	0	0.0
6 まったく不快ではない	1	1.3
欠損値	0	0.0
計	79	100.0

c3 あまり親しくない同級生(男)に下ネタの冗談を聞かされた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	16	20.3
2 不快である	19	24.1
3 どちらかといえば不快	21	26.6
4 どちらかといえば不快ではない	4	5.1
5 不快ではない	11	13.9
6 まったく不快ではない	8	10.1
欠損値	0	0.0
計	79	100.0

c4 あまり親しくない55歳の教授
(男)にお尻を触られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	62	78.5
2 不快である	8	10.1
3 どちらかといえば不快	6	7.6
4 どちらかといえば不快ではない	2	2.5
5 不快ではない	0	0.0
6 まったく不快ではない	0	0.0
欠損値	1	1.3
計	79	100.0

c5 あまり親しくない同級生(女)にお尻を触られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	13	16.5
2 不快である	21	26.6
3 どちらかといえば不快	26	32.9
4 どちらかといえば不快ではない	7	8.9
5 不快ではない	7	8.9
6 まったく不快ではない	5	6.3
欠損値	0	0.0
計	79	100.0

c6 あまり親しくない同級生(男)にあなたが既婚者と浮気しているというデマを流された

	度数	割合[%]
1 とても不快である	52	65.8
2 不快である	20	25.3
3 どちらかといえば不快	3	3.8
4 どちらかといえば不快ではない	1	1.3
5 不快ではない	1	1.3
6 まったく不快ではない	1	1.3
欠損値	1	1.3
計	79	100.0

c7 親しい35歳の非常勤講師(男)に顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	23	29.1
2 不快である	20	25.3
3 どちらかといえば不快	16	20.3
4 どちらかといえば不快ではない	11	13.9
5 不快ではない	7	8.9
6 まったく不快ではない	1	1.3
欠損値	1	1.3
計	79	100.0

c8 あまり親しくない55歳の教授
(男) にいやらしい目で見つめられた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	44	55.7
2 不快である	19	24.1
3 どちらかといえば不快	11	13.9
4 どちらかといえば不快ではない	1	1.3
5 不快ではない	1	1.3
6 まったく不快ではない	1	1.3
欠損値	2	2.5
計	79	100.0

c10 親しい同級生(女) に手を握られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	0	0.0
2 不快である	0	0.0
3 どちらかといえば不快	1	1.3
4 どちらかといえば不快ではない	9	11.4
5 不快ではない	21	26.6
6 まったく不快ではない	48	60.8
欠損値	0	0.0
計	79	100.0

c9 あまり親しくない55歳の教授
(女) に手を握られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	9	11.4
2 不快である	20	25.3
3 どちらかといえば不快	21	26.6
4 どちらかといえば不快ではない	19	24.1
5 不快ではない	7	8.9
6 まったく不快ではない	3	3.8
欠損値	0	0.0
計	79	100.0

c11 あまり親しくない55歳の非常勤講師(男) に顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	43	54.4
2 不快である	19	24.1
3 どちらかといえば不快	13	16.5
4 どちらかといえば不快ではない	2	2.5
5 不快ではない	1	1.3
6 まったく不快ではない	0	0.0
欠損値	1	1.3
計	79	100.0

c12 親しい35歳の教授（女）に下ネタの冗談を聞かされた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	10	12.7
2 不快である	14	17.7
3 どちらかといえば不快	16	20.3
4 どちらかといえば不快ではない	16	20.3
5 不快ではない	18	22.8
6 まったく不快ではない	4	5.1
欠損値	1	1.3
計	79	100.0

c14 あまり親しくない35歳の非常勤講師（女）にお尻を触られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	36	45.6
2 不快である	22	27.8
3 どちらかといえば不快	11	13.9
4 どちらかといえば不快ではない	4	5.1
5 不快ではない	4	5.1
6 まったく不快ではない	2	2.5
欠損値	0	0.0
計	79	100.0

c13 親しい55歳の非常勤講師（男）にお尻を触られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	49	62.0
2 不快である	17	21.5
3 どちらかといえば不快	3	3.8
4 どちらかといえば不快ではない	4	5.1
5 不快ではない	3	3.8
6 まったく不快ではない	1	1.3
欠損値	2	2.5
計	79	100.0

c15 親しい35歳の教授（男）にあなたが既婚者と浮気しているというデマを流された

	度数	割合[%]
1 とても不快である	58	73.4
2 不快である	16	20.3
3 どちらかといえば不快	3	3.8
4 どちらかといえば不快ではない	1	1.3
5 不快ではない	1	1.3
6 まったく不快ではない	0	0.0
欠損値	0	0.0
計	79	100.0

c16 あまり親しくない 35 歳の非常勤講師（男）に手を握られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	42	53.2
2 不快である	18	22.8
3 どちらかといえば不快	8	10.1
4 どちらかといえば不快ではない	5	6.3
5 不快ではない	3	3.8
6 まったく不快ではない	2	2.5
欠損値	1	1.3
計	79	100.0

c17 あまり親しくない 55 歳の非常勤講師（女）にいやらしい目で見つめられた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	26	32.9
2 不快である	29	36.7
3 どちらかといえば不快	16	20.3
4 どちらかといえば不快ではない	2	2.5
5 不快ではない	5	6.3
6 まったく不快ではない	1	1.3
欠損値	0	0.0
計	79	100.0

D 票

D あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の 6 段階で評価してください。

d1 親しい 35 歳の非常勤講師（女）に下ネタの冗談を聞かされた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	7	7.4
2 不快である	18	19.1
3 どちらかといえば不快	23	24.5
4 どちらかといえば不快ではない	14	14.9
5 不快ではない	22	23.4
6 まったく不快ではない	10	10.6
欠損値	0	0.0
計	94	100.0

d2 あまり親しくない55歳の非常勤講師（女）に手を握られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	14	14.9
2 不快である	24	25.5
3 どちらかといえば不快	22	23.4
4 どちらかといえば不快ではない	19	20.2
5 不快ではない	11	11.7
6 まったく不快ではない	4	4.3
欠損値	0	0.0
計	94	100.0

d3 あまり親しくない55歳の教授（男）にあなたが既婚者と浮気しているというデマを流された

	度数	割合[%]
1 とても不快である	81	86.2
2 不快である	8	8.5
3 どちらかといえば不快	3	3.2
4 どちらかといえば不快ではない	1	1.1
5 不快ではない	1	1.1
6 まったく不快ではない	0	0.0
欠損値	0	0.0
計	94	100.0

d4 親しい35歳の非常勤講師（男）にお尻を触られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	68	72.3
2 不快である	13	13.8
3 どちらかといえば不快	8	8.5
4 どちらかといえば不快ではない	2	2.1
5 不快ではない	2	2.1
6 まったく不快ではない	1	1.1
欠損値	0	0.0
計	94	100.0

d5 あまり親しくない同級生（女）に顔と顔の距離が20cmのところまで近寄られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	7	7.4
2 不快である	13	13.8
3 どちらかといえば不快	19	20.2
4 どちらかといえば不快ではない	26	27.7
5 不快ではない	17	18.1
6 まったく不快ではない	12	12.8
欠損値	0	0.0
計	94	100.0

d6 親しい55歳の非常勤講師（男）に下ネタの冗談を聞かされた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	27	28.7
2 不快である	20	21.3
3 どちらかといえば不快	15	16.0
4 どちらかといえば不快ではない	14	14.9
5 不快ではない	12	12.8
6 まったく不快ではない	6	6.4
欠損値	0	0.0
計	94	100.0

d8 あまり親しくない55歳の非常勤講師（男）に異性の好みを聞かれた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	23	24.5
2 不快である	21	22.3
3 どちらかといえば不快	15	16.0
4 どちらかといえば不快ではない	19	20.2
5 不快ではない	8	8.5
6 まったく不快ではない	8	8.5
欠損値	0	0.0
計	94	100.0

d7 あまり親しくない同級生（男）に手を握られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	26	27.7
2 不快である	26	27.7
3 どちらかといえば不快	22	23.4
4 どちらかといえば不快ではない	10	10.6
5 不快ではない	7	7.4
6 まったく不快ではない	3	3.2
欠損値	0	0.0
計	94	100.0

d9 あまり親しくない35歳の教授（男）にお尻を触られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	71	75.5
2 不快である	13	13.8
3 どちらかといえば不快	7	7.4
4 どちらかといえば不快ではない	1	1.1
5 不快ではない	2	2.1
6 まったく不快ではない	0	0.0
欠損値	0	0.0
計	94	100.0

d10 親しい55歳の教授（男）に手を握られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	40	42.6
2 不快である	18	19.1
3 どちらかといえば不快	18	19.1
4 どちらかといえば不快ではない	8	8.5
5 不快ではない	7	7.4
6 まったく不快ではない	3	3.2
欠損値	0	0.0
計	94	100.0

d12 あまり親しくない35歳の教授（女）にいやらしい目で見つめられた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	19	20.2
2 不快である	25	26.6
3 どちらかといえば不快	29	30.9
4 どちらかといえば不快ではない	13	13.8
5 不快ではない	4	4.3
6 まったく不快ではない	4	4.3
欠損値	0	0.0
計	94	100.0

d11 あまり親しくない35歳の非常勤講師（女）に異性の好みを聞かれた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	4	4.3
2 不快である	17	18.1
3 どちらかといえば不快	19	20.2
4 どちらかといえば不快ではない	17	18.1
5 不快ではない	24	25.5
6 まったく不快ではない	13	13.8
欠損値	0	0.0
計	94	100.0

d13 親しい同級生（男）にいやらしい目で見つめられた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	22	23.4
2 不快である	28	29.8
3 どちらかといえば不快	21	22.3
4 どちらかといえば不快ではない	12	12.8
5 不快ではない	7	7.4
6 まったく不快ではない	3	3.2
欠損値	1	1.1
計	94	100.0

d14 あまり親しくない 35 歳の教授
(男) に顔と顔の距離が 20cm のところまで近寄られた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	49	52.1
2 不快である	25	26.6
3 どちらかといえ ば不快	13	13.8
4 どちらかといえ ば不快ではない	5	5.3
5 不快ではない	1	1.1
6 まったく不快 ではない	0	0.0
欠損値	1	1.1
計	94	100.0

d15 親しい 35 歳の非常勤講師 (男)
に異性の好みを聞かれた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	9	9.6
2 不快である	14	14.9
3 どちらかといえ ば不快	16	17.0
4 どちらかといえ ば不快ではない	22	23.4
5 不快ではない	20	21.3
6 まったく不快 ではない	13	13.8
欠損値	0	0.0
計	94	100.0

d16 親しい 35 歳の教授 (女) に異性
の好みを聞かれた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	2	2.1
2 不快である	6	6.4
3 どちらかといえ ば不快	14	14.9
4 どちらかといえ ば不快ではない	18	19.1
5 不快ではない	24	25.5
6 まったく不快 ではない	30	31.9
欠損値	0	0.0
計	94	100.0

d17 あまり親しくない 35 歳の教授
(男) に下ネタの冗談を聞かされた

	度数	割合[%]
1 とても不快である	36	38.3
2 不快である	22	23.4
3 どちらかといえ ば不快	13	13.8
4 どちらかといえ ば不快ではない	8	8.5
5 不快ではない	9	9.6
6 まったく不快 ではない	5	5.3
欠損値	1	1.1
計	94	100.0

感情の制御

Q4 次のような意見についてどう思いますか。選択肢の中から一番あなたの考えに近いものを選んでください。

不快感が顔に出ないように気をつけるべきだ

	度数	割合[%]
1 そう思う	42	13.0
2 どちらかといえばそう思う	124	38.3
3 どちらかといえばそう思わない	93	28.7
4 そう思わない	64	19.8
欠損値	1	0.3
計	324	100.0

不快なことや腹がたつことがあっても、目上の人には言うべきではない

	度数	割合[%]
1 そう思う	21	6.5
2 どちらかといえばそう思う	71	21.9
3 どちらかといえばそう思わない	116	35.8
4 そう思わない	115	35.5
欠損値	1	0.3
計	324	100.0

周りの人が楽しそうにしているときは、自分が楽しくなくても周りに合わせて楽しそうにすべきだ

	度数	割合[%]
1 そう思う	39	12.0
2 どちらかといえばそう思う	146	45.1
3 どちらかといえばそう思わない	92	28.4
4 そう思わない	46	14.2
欠損値	1	0.3
計	324	100.0

ネガティブな感情を持たないように普段から気をつけるべきだ

	度数	割合[%]
1 そう思う	52	16.0
2 どちらかといえばそう思う	103	31.8
3 どちらかといえばそう思わない	86	26.5
4 そう思わない	82	25.3
欠損値	1	0.3
計	324	100.0

自分自身の気持ちに正直であるべきだ

	度数	割合[%]
1 そう思う	163	50.3
2 どちらかとい えばそう思う	133	41.0
3 どちらかとい えばそう思わな い	22	6.8
4 そう思わない	4	1.2
欠損値	2	0.6
計	324	100.0

Q5 次のような事柄はあなたにどの程度あてはまりますか。「1あてはまる」から「4あてはまらない」の4段階で評価するなら、どれが一番あなたに近いですか。

1 不快なことがあっても、自分の気持ちをうまく人に伝えられない

	度数	割合[%]
1 そう思う	53	16.4
2 どちらかとい えばそう思う	122	37.7
3 どちらかとい えばそう思わな い	78	24.1
4 そう思わない	67	20.7
欠損値	4	1.2
計	324	100.0

2 否定的な感情は表に出さないようにしている

	度数	割合[%]
1 そう思う	86	26.5
2 どちらかとい えばそう思う	119	36.7
3 どちらかとい えばそう思わな い	75	23.1
4 そう思わない	43	13.3
欠損値	1	0.3
計	324	100.0

3 カツとなつてつい大きな声を出してしまうことがあることがある

	度数	割合[%]
1 そう思う	29	8.95
2 どちらかとい えばそう思う	51	15.74
3 どちらかとい えばそう思わな い	83	25.62
4 そう思わない	160	49.38
欠損値	1	0.31
計	324	100.00

4 気持ちが高ぶって人前で涙を流してしまうことがある

	度数	割合[%]
1 そう思う	51	15.7
2 どちらかといえばそう思う	96	29.6
3 どちらかといえばそう思わない	83	25.6
4 そう思わない	91	28.1
欠損値	3	0.9
計	324	100.0

感想と所属大学

Q6 あなたの通っている大学を教えてください。

	度数	割合[%]
京都大学	169	52.2
その他	116	35.8
欠損値	39	0.12
計	324	100.0

**どんな要因がハラスメントを不快
にするのか 2022**

京都大学文学部社会学研究室 2022
年度社会学実習 報告書

2023年3月発行

編集・発行： 太郎丸 博

京都大学文学部社会学研究室

〒606-8501 京都市左京区吉田本町
